

---

# アクスベリ。

白紙描写

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクセスベリ。

### 【Nコード】

N5555X

### 【作者名】

白紙描写

### 【あらすじ】

アクセスストロベリー…従姉と結婚するまでの物語

「許してください。そして、御免なさい。」

あくせすとりべり…

「うつわゝアイスが溶けてる！」

粉塵売買　コトシラは、街で買ってきたアイスを確かめたのは、ク  
ビルトノノセルと言う田舎町に到着した後の事だった。

「やばいなー、腐ってないか？このアイス」

『我バルト王国』の首都『ノキベ』のとある一角にある商店『ハジ  
キ』の味の良さは認めるも品質の良さは一役買ってない。  
アイスをぺろりつくのは、家に帰ってからのお楽しみとばかりに、  
懷に収めていたのが運の尽きだったと、改めて解釈する。

コトシラは、今年で17だ。

独り立ちもあと3日、ワクワクが止まらないのです。

「仕方ない」

一言告げて、無性にアイスの袋をこじ開ける。

「やべ、手に垂れた」

不器用なのか、ストロベリー味のそれが盛大に、手にかかるのだった。

「友達居ねーのに、この少惨事、どうにかしておくれよ……」

無情に、ショッキング。

明日は、襦袢破壊試験が待ちかねているのに、気分転換に、ろくにアイスも食えない有り様。

ああ、いつその事、家を出て、立派な剣士になりより、勇者になつてやろうか。

…

甘くはない。そんなに、人生甘くはない。

黒砂糖よりも、甘くはない。分かつてる。理解している。

世界は何を中心として、回っていると思う？

「それは、太陽を中心として、地球がグルグル回っているのだ。何処にも中心なんてない。中心は誰かが決める物なのだからだ」

決まらない言葉を言い放ち、地元を翔る。

次回

本編は、まだ始まってはいない。

続けて、

地域

地元の空気はとてつもなく、何事にも代え難い独特な味をしていた。  
していたのではなく、している。

何か特徴のある町並みでもなく、本当に何もない地味な所だ。田舎  
という物は…

でも、無くなつては成つてはならない場所でもある。

その様にして、鑑賞に浸っていると、つかの間の出来事と、悪夢が  
おそつたのだ。

地面から息なり、何かが飛び出してきたのだったからだ。

「うわ、」

凄い勢いで急展開を迎える。少しばかり、休憩したかったんだけど、  
それは、待つてはくれなかった。

「なんだ。何が起きた？考える時間くらいくださいさ！」

んなこと、言つて、体勢崩して、すっころんだ俺。コトシラは、体  
勢を崩しながらも現場を伺う。

するとそこには、語彙では表現できない。怪物が居たのだ。

「ば、化け物！」

その通り化け物、しかし、コトシラにはそんな語句は、関係有りません。

だってコトシラは、背中にいつもながら背負っているはずの、大剣を所持していなかったからです。

コレは大変です。なにが大変かと述べて説明するのなら、さっき、そうほんの今さっき、開封したばかりのアイスが地面に引き寄せられ…

クツチャクチャに、成ったからです。

「せ、せつかくのアイスが…」

残念なことです。気分転換にしては長すぎる散歩を得て、手に入れたアイスが、

瞬きする間もなく、食べられないご様子へと変貌したからです。

衝撃的ですな。

このほんの一時の幸せを実現するために、果てしなく遠いと、錯覚する道のりを自前の二本足で、せつせと歩んで来たのにも関わらず…

見れば、現実 は 皮肉 の 固まり ですな。

言わんばかりに、地べたに溶け染みるアイス。

「あ、あ、ああああ…」

言葉も詰まり、話す言葉も感想も言えないコトシラ。

こうなってしまうば、前方の語彙では表現できない怪物は、見えていません。

終わりましたね。コトシラ。

コトシラの最後は、儚くアイスとともに散ることであろうよ。  
さらばコトシラ。

バイバイコトシラ。

コトシラのこととは、墓場まで忘れない。

コトシラ万歳。永久不滅のコトシラは英雄だ。

：

動き始める怪獣。唸りをあげ、高鳴る罵声と憎悪と共に、襲いかかる。

距離にして、身と鼻の先。

後がないコトシラ。

旋律と穿孔が彼をみすばらしく罵る。

！

その時だった、僕らナレーターだって諦めていた刹那。

奇跡が起きたのだ。

イトコの古見子が直撃寸前の怪獣をなぎ払った。

過去形のように、怪獣は、5時の方角へ水気になり、溶けていった。

「あ、あああああ」

コトシラはまだ、アイスの棒を双眸で見つめ眺めているのだった。とても悲しそうだ。

「何していの？コトシラ？もう獣鬼は、葬ったわよ？」

獣鬼とは、先ほど、5時の方角へ飛んでいったあれだ、言わば、雑魚モンスターー。

「だ、だって、お姉ちゃん。アイスが、僕のアイスが……」

イトコの古見子は、ヘボコトシラと違って、優秀な二刀小刀使い、とつてもかっこいいです。

なので、コトシラはお姉ちゃんとあえて呼んでいる。

「何を言っているの？アイスなんて、ドコにだって、売っているじゃない」

違うんですよ。古見子さん。コトシラは懸命に歩いたあとの『あいす』が食べたかったんですよ。

噛み合わない。対人関係ですよ。もう

「おれ……おれ……」

頑張れ、コトシラ！



「おれ、自分をいじめて、美味しくアイスが食べたかっただけなんだ…けど、もう、どん底です…」

おい、コトシラ！何を言っているんだ？

「…」

古見子さん退いてる！やばい退いてる！どうにか、コトシラを正常化しておくれよ。

「大丈夫。あなたは大丈夫よ」

大丈夫。ちよつとばかり無責任過ぎはしませんか？

「お姉ちゃん…」

ああ、読めてきた。だめだこいつ早くどうにかしないと…

「おれ、頑張る！いつか、きっと世界を取り巻く剣士に成ってやる！」

よく言った。上辺だけの素晴らしい言葉をよく言った、お前はある意味勇者だ。

次回

取り巻くそれは、更新系

「とりあえず、誰からぶつ殺しましょうか？」

「物騒な言語は控えましょう」

僕の悩みという物を赤裸々に、話しあげく、第一声がこんな調子だから困る。

もう少しばかり、優しい言葉遣いで励ましてくれないものかと、少しばかり困る。

「だってあんた、クソ弱いじゃん。だから、人を殺めて経験値稼ぎでもしたらどうよ？」

相談テーマは、明日の試験対策で先ほどのアイスの話は、なんの関係もないただの漫才とかと思ってくれ。

「僕らのスキルがレベル数値で決まるんだとしたら、たまったもんじゃないな、試験にレベル差とか、撃破数とか、関係ないしスキルを観るから、アイツ等、」

スキル…すなわち、学歴とか資格とか。

アイツ等…審査員とか、審査員とか。

「あら？弱音を吐くのね。あなた、」

私なんて、物の数分で合格したわよ的な態度をとる。

「仕方ないだろよ、おれ、落ちこぼれとか、出来損ないとかの部類に位置する人間だし……」

生きがいと言えば、苦勞のあとのお菓子や食べ物（主に洋菓子）なのだから、武道家はびっくりする。

「別に私だって、才ある人種ではなかったわ。ただ普通の凡人生だった……」

「ってか。僕より一つしか変わらないのになんて切実な談話なんだ。深刻でクソ真面目な人生相談をやってるようで気持ち悪い。」

「所で、試験って聞いた感じじゃ。盛り上がりそうなイベントだけど、勿論、壮大な生き残り大乱闘とかしたちゃったりするのよね？」「いや、違う！今年は筆記試験だ！……」

「二言目は早とちりと来たか、この人は、局面での切り替えが早くて、翻弄される。」

「実技じゃないの？……なるほどね。去年がそうだったから、今年は無いのか。」

無いのではなく、筆記ね。

「……だとすれば、まだチャンスは巡っているって事になるのか。僕、体育会系ではない方の人材だから。」

夏休みに一時ピークを迎えて、学問に禿げくんだものだ。その所為か、冬休みはダルさと寒さのダブルアタックがクリティカルヒットしたもんだ。ペンも握っていない。

その成果は総合的に、絶対値0。

大した成果は得られないまま、猶予や期限が詰みっている。

最近では、試験対攻略本なんかをペラペラしている始末だ。

「なんだか、実技でフルボッコされる方がよっぽど、ましになってきた…」

本音語るコトシラ。つまりおれ。

「頑張れとしか言えないのが、偶に傷だらけ」

日本文語を的確に連ねて語らってもらいたいな。意味が分からない。

「所でここ、僕の部屋何だけど、勝手にゲームに電源入れるの止めてくれないかな？」

昔、古見子さんに保存データ消された事があるトラウマがフラッシュバックしたため、そんな事を言うのである。

「凡人は、凡人らしく、凡人以下なら凡人以下らしくだ」

名言でもないが、なるようになれば、普通を願うのも贅沢だとか、言う方向性で語るね。

独立立ちっつてのは、保護者の管理から外れ、一人でこの世界に生きていけなくてはいけない。行政側の勝手なルール。

古見子は、どこかの警備団体に所属してるし、今回の件では暇つぶし…が妥当な選だろう。

しかし、どいつもこいつも平和ぼけで退屈だ。獣鬼なんて、相手に

ならない。

昔は、恐れるケダモノや邪なゲテモノが闊歩していたに違いないのに、人々の高度成長し続けたあげくって言い伝えた。

「まあ、どうにかしてみせるよ…」

試験落ちたところで、取って碎かれるわけでもないし、死ぬわけでもない。

僕は僕らしくゆるゆると、人生歩きを楽しむとしようじゃなか。

「コントローラー、一つしかなくて対戦や協力は出来ないが、作業をしている様子を伺うだけでも十分に楽しい」

と言いつつ、体育座りで古見子さんのゲームテクを眺める。17才。

「何よ？そんなに私のシューティング避けテクのが凄いの？」

凄い手つきで、向こうから迫る玉石を交わすわ革す。18才。

…

一人っ子の俺には、何か、物々しく暖かい光景。ああ、何だろうこの気持ち。

お姉ちゃんとかいなくて、友達とかいなくて、ほとんど生きていく価値感が感じ取れなかった俺に、こんなにも、和やかで誰かに譲れないようなこの感覚は…

「あのさ…」

カチカチ

カチカチ

カチカチ

「何よ？」

「何だろ…か」

「？」

ゲームに夢中なのは分かる、だがしかし、今日の俺は多分狂っているであろう。

「ゲームがあきたら、一言言わせてくれるか？」

何もないに等しい。殺風景な私室には、低音量の薄型テレビ音とワイヤレスコントローラー動作音とが非常に旋律を奏でていた。

俺の言葉でほのめかすのなら、混沌と無機質。

「？ちよつと、話しが読めないわ。今はなしたらどう？」

無傷でボスを粉碎する古見子。

「いいだろ、今はゲームに集中する時だ。今は集中するんだゲームに、そのあとに言いたい」

結構割れながらに、真剣に言ってみた。

「笑」

笑った。古見子は笑ったのだ。肩で笑う。

「ちょ、あんた、私を笑い殺す気？あはは、真面目なあんたが真面目口調って、本気で言っているの？」

…

全然把握できない笑いのツボだ。どう対応していか…分からない。

「まで、笑うな！笑うとはげるぞ。」

…

沈黙が走る。

「…」

ヤバっ、眼が虚ろだ！救急車！消防署！ハイライトが消えかかっている。

「よくよく考え手みたんだけど、アナログテレビの上に…飾りとか、どうでもいい。家具とか置いたりしてたよね。昔」

飾りはないと思うけど、何の話し？

「昔は、良かった…そんなの過去という曖昧な記憶とともに、比較した勝手な言いつけだよ。現に、私はアナログテレビ…ブラウン管のテレビの上、よく飾っていたもん。今はちよっと、寂しい…」

カチカチ

カチカチ

昔と今、…確かに、懐かしんだり、悲しんだり、するのは、過去の記憶をベースに、今にはないやるせなさ…が、そうさせているんだと思うよ…僕だって、

その瞬間、一瞬だが部屋の隅に置かれた大剣が脳裏に入る。

他人事のように言われる悲劇も、俺は17才と、短い人生で一度だけ経験したことがあった。

黒いどうしようもなく黒いは、俺が体験した悲劇の象徴だ。過言ではない…

「寂しい…か」

次回

通り過ぎた過去の記憶



ゲームを終えた彼女に僕は一言こう言うのだった。

「もし、試験が受かったのなら、何処かへ旅にいきませんか？」と…

おれの家族はみんな死んで、僕一人。

おれが殺してしまったんだ。

正気の沙汰ではない。狂っていた。

武器による呪い…それはただの言い訳、おれは、単純に心が弱かっただけだった。

狂ってしまったら、楽だろうとか、もうどうでもいいとか。

そこから生じる、報われない結果だけが残ることも考えずに…

だから、そうなった。

元から一人しかいないのに、独り立ちなんて…笑ってしまうような。

けど、最後の後始末くらいはさせてくれ、殺してしまった家族とも関わりのない。

本当の意味での独りにさせてくれ。

昔の俺が志しにしていた唯一の願い。

誰とも、血縁や友達、関わる全てを無くしたいと…誰も何もいらな  
いと…

「昔のあなたは可愛かったのね。」

イトコの声が聞こえたと思うと、

「答えは、『良いわよ』よ」

我に返れば、古見子さんは何か、言葉を返しているではないか。え、おれ、なんて言った？

「あの、すみませんが、おれなんて言ってたの？」

うろたえるより、直接聞く。

「あなたが私と共に、世界を旅するなどと言ってたわ。」

そうか、我を忘れて、とんでもない事を言ったかと思った。が、思い違い普通だ。

「その答えは？なんと返したのですか？」  
確認の為、再度訊ねる。

「オーケーと言っわ」

そうか、オーケーなのか。

…

「ゲーム楽しかったか？」

なんか急に、語彙不足と話題不足に陥ったな。これは何だ？。

「楽しかった？今期もまた自己記録更新って感じで、」

あれ？いつの間にか、ゲーム機が綺麗にテレビの下に収納されている。

！

こいつは大方、凄腕収納の達人でも慣れるじゃないかと言っくらい。  
俊敏に片付ける。

「あの」「だわ」

被りもどきが発生した。

「俺から言わせてくれるか？」「いや、私から言わせて…」

やんと言っ、自己主張したい彼らなんだ…

「ど、どうぞ、そちらから、…」

控えめに譲る。これは厚意だ…

「じゃあ、宣言して良いかしら？コトシラ？」

…

「いいよ、何言われようと、大丈夫だぜ」

イトコの古見子さんは、なんだかよく分からないけど、深呼吸をし始める。この行為に何の意味があるのかは、分からない。  
だけど、彼女にとっては意味があることなのである…

「あなた私のこと好きでしょ？」

！

何を言っているんだこいつ。

なぜ、そのような文を紡ぐ？

誤記を誤読している。…ではあるまいな。

「ご名答。大正解だ」

カッコ良く口が動く。意に反してはいないか？

いや、体は考えよりも正直だ。そう言う、相場が定められている、本でもって記載されていた。

一番初心に返るんだ！おれ！

初めての出会いは、いつだ！？

思い出せない。その前にイトコとかいたっけ？その前、彼女は誰だ

？彼女はイトコの古見子さんだ！

それ以上でもそれ以下でもない！

血縁関係は若干使いだけの親戚だと断定する。

だとして、なんだ。

記憶があやふやなとか、記憶すっぱり無くなってるというか。

まず、おれ、友達がいなし。

わかった。全てが幻聴だ。

幻覚と悪夢に襲われているんだ！

よし、この話を手っ取り早く解決する策を思いついたぞ。

「一発、殴らせろ。」

暴力で下らない。幻影を葬ってやる！。

「テレ隠しの行動にしか、思えないわよ」

何とでも、ほざけばいい。今日の俺は絶好調だ。

「俺が殴りたいと言っているんだ。殴らせろ！」

明日の試験なんて、カンニングでどうとでもなる。今の俺には、過度の緊張の所為で、可笑しな幻影が前方に座りすくんでいるのが、許せないのだ！

構える。正しい構えだ。

先生に習ったからな。当たり前だ。

「……」

「そこまで言うのなら、殴らせて遣らなくはないわ」

羽織っていた。ジャージを脱ぐ。

ガサガサ

ゴクリ

「さあ、思う限りの力を握って、拳をふるうが良いわ」

無防備過ぎる。彼女は正座。目は閉じたままだ。

「怖くはないのか？」

「怖くはないわ」

そうか

「一つ、お願いがあるのだけれど、」

「なんだ。言ってみろ。」

「あなたからの質問は、何だったの？まさか、殴らせる！ではないでしょ？」

頭に浮かぶ。

「あの」「だわ」

「ああ、あれは、もう夕方出し、帰った方が良くないじゃないかって、言おうとしただけだよ」

「あら、そう……」

「いくぜ。これが真実だったら、こんな街さつさと出ようぜ」

「……うん」

バシユン、ズバキッ

……

試験当日。

なんだか、審査員思つて、いたよりも偏屈だな。

そこには、長袖長ズボンのラフな感じの男が立ちすくんでいた。

「それでは、回答用紙と鉛筆を配るから、絶対それ以外の筆記を無知あわせるなよ」

今日もいい天気だ。アイスが食べたい。

試験会場は、『我バルト王国』の首都『ノキベ』のとある一角にある『クノベラクドナス』。

王国最も領域、聖域と言つた方がいいか。

ここには、古人からの言い伝えがあつて、神が降臨し、全てをを葬り去つて歸つたという。

まるつきり、間抜けな話したがバカには出来ない。なんせ、堅つ苦しい国の長や役人が神神神信仰心むき出しでいるからな。

めんどくさい事に巻き込まれないように、神っているが、いつ、神病院にかかるか分からない。

だからこそ、試験は筆記に置いては、有利と言ふべきか。

殆ど、神類で助かると言うか、別に、簡単な訳ではないが、出て来る問題に結構、高確率で神類のワードに絞られるため、

ああ、もう、強いて言えば、簡単だ以上！

「それでは、問題用紙、回答用紙、受け取った者、さつさと始める。

失格にするぞ！

それから、休んでいる人は即、失格だぞ！

あと、消しゴムを使用したり、鉛筆の芯が折れて記入できなかったり、回答枠から線が飛び出したり、紙を落したりしても失格だぞ！最後に、頑張れ。」

言いたいだけ言ってくれて、お疲れさん。悪いが俺は、今言った注意に該当するヘマはしない。

どうして、そこまで自信過剰に判断できるのか疑問符を捧げる彼らに説明するなら、今の今まで、爪楊枝と墨汁だけで、授業を受けていたからだ。

それと、…

天井に張り付く蛍光灯を見上げる…

家におれを待っていてくれる人が居るから…

絶対失敗なんて出来ない…

次回

諦めるな。前をみる、  
友達になれそうよ。



母は言いました、「そんな、死ねない人間に育てた覚えはない！」

問3）上記の演出から見て、適切な応答を応えよ。

答え（神を称える

本当に、こんな問題ばかり並べていると、まるで奇人が書いた随筆の用に見えてくる。

早めの内に書き終えないと、こっちの精神が狂いそうだ。

筆記如く、鉛筆を滑らす速度は一定で周囲の音響と同調して、至極場にとけ込んでいる。

それでいてか、試験にこれまでにない集中力と可動力が追加される。怖いぐらいに…

…恐怖さえもこみ上げてくる。

考え過ぎかどうかは知らないが、アイツ等はこうして、洗脳じみた、儀式と言つべきだな、そう言った儀式を俺らに強要して忠誠心を言えつける策なのだろうか？

…手は動く。頭も働き冴えている。

この調子で行けば、確実に成功を納める。だがしかし、何かがこみ上げてくる悪寒。

気の所為と言えば、無論気の所為になるのであろう。考えても性が

ないが、考えることしかできない。まるで尋問だ。

コトシラは、ふと、何処でもある教室、訂正、聖域を視線だけを巡回させる。

…彼らは、何だ？

彼ら、僕らから観ると、彼らはちょうど視察のそれと同等な巡行を施している。

つまり、彼らとは、このお国の上等にあたり、王国の所有を有する。天皇な輩だ。

これはこれは、女々しいお嬢様までご登場の様子だ。毎年毎年こうして、低受験者共々の視察を繰り返し行われているというのなら、さぞかし退屈な動物園巡りであろう。

「彼らに、鉛筆でも投げてやろうか…」

回答用紙は既に、神で覆い尽くされている、完全回答だ。終了時刻までまだ幾度か、時間が余っている。

心にゆとりが出来たからこそ、言えた口だ。それでも、つぶやきレベルでほざいた口ではある。

考える猶予もなく馬鹿な口が開いたまでの話だ。

と言いつつ、叩きどころを探す為、再度彼らを吟味。

「…」

なんだか、この街ではどう観ても浮力が違いすぎて、物理的に浮い

て見えそうな、女々しいお嬢様を取り囲む、白ずくめな連中は、実際に邪魔苦しそうだし、暑苦しそうだし、観てられない。

頑張ってる熱意的なものは感じるが、残念ながら脳内で存在削除しています。

一方、女々しいお嬢様は、このお国の上王様。

とは、僕の知識からは判断しがたいが、外見から観て、肯定を呑もう。

まず、装備品からして品質、デザイン性、実用性の無さ、が一段と格別だ。次元すらも歪んで見える。

「えんぴつでも投げてやろうか…」

おっと、いけね。

少し前の音量より、若干大きめの声がため息と共に逃げていった。

念の為、顔を伏せて、平然を強する。

わきの下から、横目で様子を伺う。

幸いなことに、審査員は耳をくぐもるだけだった。

「ふ」

精神を落ち着かせ。顔を上げる。

！

おれは、生きていてここまでバカな奴は観たことはない。

一番始めに、一徳べきだったな。

前方に居座る。受験生。

脳内削除も完璧に、完了していたがまさかここで伏線が忍び寄るとは…

受験番号記載の番号布を安全ピンでくくりつけ、始終、落ちとかないご様子の受験生が立ち上がった。

「やってられねー、帰る」

受験生はスタスタ歩行し、教室を飛び出す。

ん？それで？

…もうおしまい？

「哀れな愚民ですわ」

お嬢様、が喋った。

思ってたより、古典的で助かる。

第三者の立場から傍観していると、世界があらさまに見えてくる。都市伝説的な受験生、その言葉だけを言うために生きているようなお嬢様。

けどけど、やっぱり俺には、アイツしかない。

早く帰って、家がどうなっているのか。

出迎えて暮れるのか。

考えるだけで満たされる。

と、そろそろ時間だ。

試験なんて言っても所詮は、紙と筆記で力キ力キするだけのお遊戯なんだと実感の色が隠せない。

「えゝ、それでは、終わりだ。終了終了、筆記を置きたまえ」

黒板の教室は、なんて物寂しいものか：

イタツ、

激痛は一瞬だ。どこかの一般生徒が放り投げたのが偶々頭部に直撃したらしい。不覚にも痛点を突かれたと述べるべきだな。

頭をさするながら、剥げていないか確かめる。

大事には至らなかったが、もしもの事柄を想像したら：それだけでゾツとする。

「コラコラ、無用に筆記を投げるではない、投げた者は失格だぞゝ」

へ、

は、

ざまーみろ、いわんこっちゃない。

気を抜いて油断するから悪いんだよ。先生始めに言っていただろ。紙じゃなくて神だ、筆記、回答用紙、問題用紙合わせて神と呼ぶ。

この聖域では、三つ揃って、神の私物と呼ぶらしい。既に、この情報屋から引っ張って来たからな。

「先生ゝ、そんなのないっすよゝへへ」

「ちょ、聞いてないぜ。ルールをもっと分かり易く解説して欲しかったー」

観ろ、木偶の坊らが戯れ言を訴えているぞ。今夜の飯は美味しく頂けそうだ。

「あれ？綺麗なべっぴんさんと厳めしい近衛らはどこに行ったんだ！」

帰った、としか言えないだろ。

「四の五の言う前に、後ろから紙集める。答案用紙と問答用紙は、ゴミ箱にでも捨ててくれ、」

答案用紙と問答用紙？嗚呼、回答用紙と問答用紙のことか。

言われたとおり、二枚の用紙を握力で圧を掛け押し縮め、紙屑ボール形を整え、教室の隅に、設置されたゴミ箱に大車輪投法で放り投げる。

見事に吸い込まれる紙屑。

あれ？さっきまで、手に汗握って、記入したあれは、どこ行っただろうか、ゴミ箱に捨てたのか…

すると、後ろからえんぴつを回収する生徒が近寄る。試験が終われば、ただの他人。

…えんぴつ…を握っているぞ？この一般生徒。おれのえんぴつが欲しいのか？

変わった者もいるな、この世には。

「ほれ、えんぴつ」

「え、あ、うん」

ちよつと、拳動不審で穏やかな人。

多分、この人も苦労しているんだろうな。感傷に浸るおれ。

「では、これで解散とする」

これで終わりかと、弱なる物足りなさやつと終わりかと、労働感に誘われる。

「ふー」と一息切らし、

「さて帰るか、過ぎ帰るかっ」

おれは、オレてらしく。両手に何も携えずに、教室を跳びした。

この時点での僕は、まだまだ、全然知らなかった、知るはずもない。ここまで、脇役と思われ、二度と関わらないと思いきなり起きない彼らが、いずれ、深く関わってしまうことに…

次回

帰宅路につく。

ここから自由だ。

明日は面接だ。気を引き締めなくては…

僕はコトシラ。帰路に定着し、今は落ち着いた歩調で二足歩行の真つ最中だ。

神の聖域は、王国最大の建造ビル、通称『バマクラマ』の北から斜め八十度に広がる『自由線境界』の中央に分布している。

普段は『自由線境界結界』で一般人は観光も出来ないが、この特別な日にだけ、場内に入場出来るってわけだ。

イメージは、なんだか安い造りのミステリーサークルにもよく似た地上図で取り囲まれた廃墟の学校のような、如何にも、風変わりと近寄りがたく悪趣味な仕様が施されている為、歪だ。

広さは、『マイガル広場』四個分と思っていた以上に、狭い。教科書に載っている画像写真を見てもそうだった。

未練がましく、もう一言言うのなら、聖域内に入る時など、パスとか、証明書とか必要ないらしく、威風堂々とポッケに財布と小銭だけを詰めて、ガリマタ歩行で聖域を去ろうとはしたが、

クールに外に出た。

ちなみに、おれは商店『ハジキ』道草を食おうと思っている。時間帯にしては、午後二時を回っており、程良く、思想錯誤に小腹が空いているような気がしていた事による、自分自身の食欲精神が刺激され『食いたい』と思いたいが、『食いたい』と想ってしまっ



たのだ。

「なぜ、想ったかって？…カナメはやはり、昨日のアイスが心残りだったから、ハハ」

自分で自分をつっ込みます。小難しい語源を並べて誤魔化すより、初めっから、アイスが食べたかったと言えば良かったんだよ。  
はは、ウケるウケる。

と、前方不注意でどなたかとぶつかるコトシラ。

しっかりしろ！コトシラ！

「おっと、いけね。ごん面なさい？何方さん？…」

おれ、コトシラはぎこちない体制と不バランスと揺らぐ体をおっとつと、と額に手をやり、状態修正しながら、地面ばかり観ていた視線を前へ…

「すみません！」

「その前に誰だよ」

あ、

思い出した。こいつ、受験番号419番の『やってられるか！帰る！』君だ。

名前と顔を覚える習慣の無いおれでも、コイツだけは、伏線で脳内に血の気が弥立つほど印象を獲得している。

ここは尊敬と敬意を孕んで省略して、『シイク（419）』君だ。

「なんだ。シイク君か、何をしているんだい？こんな所で…」

今日は気分がいい。偏見的な彼の姿だって許すし、立ち話もしたい気分だ。

「シイク？…キミ僕の知り合い？かなんかだっけ？僕記憶に無いんだけど」

僕とは誰だ？ああ、シイクか。

「そうそう、おまえの知り合い。…で、気に障るのなら控えるけど、自動販売機の前で右往左往立ち往生しているのは…どうしてだい？」

お金を落として、茫然自失となっていたか、金が無いから邪な考えを企んでいたかのどちらかであろう。

試験中に罵声を吐いて教室を飛び出す奇人だぞ？ろくな人間ではないのは確実だ。

「あ、いや、これは、自分の情けない姿を悔やんでいただけです。」

角度を変えて、自販機を覗てみると…彼の言う通り、鏡の劣化版並みに、冴えない眼鏡がそこにいる。

「メガネの調子が悪いのか？発狂してしまうほどに、レンズの度が合わなかったのか？」

心で笑いながらも、クソ真面目に返答する。

「あ、いや、あれは…恥ずかしい所をお見せしたようですね。あれは、反抗期です」

うぶ、シイク君。羞恥心とか備わっていてほつとするぜ。何よりだ。

「反抗期？お前は、社会的に一人前になって、独り立ちとかしたくないのか？親孝行したりしないと親が悲しむぞ？」

我ながら、俺の人生観では説得力もないとんでも無い事を口にする用になったもんだ。迅速にアイスが食べたいし、今の言葉は墓場まで持って行こう。

「親？笑わせますね…うひゃ、親なんて、今の世に生んでくれて、ありがとサンキュウベリマッチって所ですよ。」

親に虐げられる気持ちは僕には、わからなくは、ない。だって、殺しちゃったもん。

「それもそうだな、親孝行はお金で解決する。ただし、それは哀しいこと…」

チラリシイクを面と向かって観ると…

メガネが覆い隠す顔は、意外と整った顔立ちにで、びっくりした。

「僕も終わっていますけど、貴方も綻びてますね…」

意外と良い奴！

「これもなんかの思し召しだ、商店『ハジキ』で美味しいアイスでも飲食しに行かないか？」

彼とは、馬が合うらしくここで分かれるのも中途半端な気がした。そこでの提案だ。嫌な感じはするが悪くはない。ただ単に、同類の磁力が働いただけであろうと察する。

「良いですね。行くとしましょうか…それと、質問があります」

そう来るか。でも、問われたら答えなくてはな。無言で、言ってみる？の仕草をする。

「僕の知り合いではないですよ？どこで縄絵を知ったのですか？」  
想像はしてた分、返答には困らなかった。

「お前の席の後ろ。…から高みの見物で知った。」

お前のその番号布は、本名なのか？妙にとっ掛からなくて、不安の汗まで垂れてくる始末だ。

「僕の存在なんて忘れてしまった方が賢明なのに、…敢えて、覚えて声を掛ける辺りから何か良いことでもあったんでしょね」

「ああ、そうだが」

王国のとある一角に徒歩で進行中。

「良いですね。僕からも何か、差し上げて良いでしょうか？」

なんだか、気持ち悪くなってくるのは気の所為か？

「」

ん？消えた。

どこ行っただ？

おれは、その一瞬で何が起きたのがわからなかった。  
何かが変わったようにも思える。

しかし、何かが変わった気配がない。さっきまで居た街並みは町並みのままだ。

判断に、どうしようが混じるがまだ現実だ。

正気ではある。

並大抵のことらり何とかなった風に、…何とかなっている。  
しかし、しかしだ。

どうして、シイクはいない？

意味が分からない、全く皆無だ。話しがつかめない。

……

やっぱりか。呪いは持続中ってわけか。

『忘れることのない』

襲いかかるか…

ま。気に悩むこともない。

バグっているのは、俺の方だからな。

この後のでコトシラは、商店ハジキでアイスを買うが当たり付きでもないアイスに、当たりがでた奇跡は、彼の仕業がどうかなんて知るはずもない。

シイクは、一番始まりから存在していなかったのだから…

時間は経ち、我が地元と実家。

コトシラは自前の持ち合わせた。脚で故郷まで辿り着いていたのだ。

「フー、五時間ぶりの家だぜ。」

ドアノブに手をかざす。

年期の入り浸る突起は、ひんやりと冷たい温度がほとばしる。

自動ドアとか思ったら、違うんだなこれが。

「あら、何方ですか？」

何とも言えない。棒読み。

おれは心なしな、言葉に温まる派なんですよ。滑稽ですよね？

次回

明日は休め。



動静、微動だにしない。

其れ即ち、この家の動向だ。

「あのく古見子さん？」

「何かしら？」

おれは所持品ゼロ、それでいて、驚異的な速さで家内にあがる。

ゼロではないか、財布とそれ相応の小銭がポケットに混入している。

歩いてる時は、ジャラジャラ効果音は響かなかったが家にあがると、息なり発声を上げる。

どんな構造になっているのか、これを購入した完全百円均一『マガノルノライス』に問い合わせたいと思った。

思ったただけだ。

「ここに居座ることになったのは、おれの所為ですけど、恨んでいません？」

よく見なくとも、彼女の頬はコットン繊維質のテープで痛々しい。そこのこの問をぶつける。少なくとも確認のためだ。しょうがない。

「別に平気ですけど、問題はないわ」



恨んではいません、と答えたのであろう。

「ん？一見、前より生活感のある家の見取り図に変貌しているが、掃除等の家事をこなしたのか？」

引き出される出かけた後の記憶と、今観る、家内の景色とが一致しない。

要するに、綺麗に片付けられている。

暇なのか？思うまでもない、今なのであろう。  
選りすぐって腕を掛けて掃除したに違いない。

「う…ん」

一応。

「ありがとう」

午後五時、胃の内部では生半可に溶けたアイスが吸収されている頃  
合いだろう。  
自覚はないが。

そんな、どうでも良いことを思想しながら、おれはその足で茶の間  
へと移動する。

この季節、外は薄暗い設定だ。現に薄暗い。

「ドットコラセット」

古見子さんが先に、こたつに和んでいる後に、カタカナ口調でゲーム機をワイヤレスコントローラーで電源を入れる。

言っておくが茶の間に、ゲーム機本体は存在しておらず、自分の遊戯室イコール寝室から、出力コードを引っ張って来てのゲーム機の起動だ。

「午前中はずっと、将棋遣っていたし、今回は『風のクロノア』+2』でも交互プレーするか？」

説明しているわけではないが、午前中は内蔵ゲーム『将棋』を仕切りに、一手一手返しプレーしていたのだ。

「何でも良いわ。遣るなら徹底して遣るだけ」

そのノリ、おれは好きだ。  
一番ゲームが遣りやすい。

雰囲気的に。

「それでは、行きますか」

ブォン

キリキリキリ

ホワン

起動音といい、高画質と良い、最新鋭のゲーム機はとも好感覚に、楽しめる。的確な言い方ではないが二文字で、

愉快だ。

瞬きする間もない、ロード時間にふと、思った。

多分、おれは矛盾している行為行っているのかもしれない。と、

ドコからドコまでが、矛盾しているか…言いくるめるなら、生き方についてだ。

『過去おれ』は、独りで生きていける、苦悩とお菓子さえあれば充分だ、などと言っていた用な気がする。

『今おれ』どうだろう？ほん少し、暖かいこの気持ちは何だろう？知ってはいるんだ。分かっているフリをしていただけだと…

初めっから、弱い人間で、実際にも強い人間なんて居ないのだと実感する。

これが現実。

どうしても、人間な俺たちには、そう言う者が必要なんだ。どう言うもの？

どんなもの？

もの？

いや人

人生のパートナーが…

「聞いても良いかしら？」

「どうぞぞぞ、」

こたつには特殊加工を施した電熱線が取り付けられている、使用するときだけこたつ内の気団を暖めてくれる。

夏には涼しく快適に、

秋にはほんのり熱く、

春は、微妙に寒い。

と設定され、設計されている。

豆知識だと思ってくれ。

「夕食とかどうするの？」

把握していたわけではない。

そうなるような気はしていただけた。

「カップヌードルとかで、良くないか？手軽く」

健康面に配慮されていない、食品を選択する。…彼女も読み通りだろう。

おれの華麗なる朝昼晩の食事種は、

カレーラーメン弁当だ。

一から全て、コンビ二品。

自分で言ってて笑いそうだが、前にも同じ事で笑ってしまったので今日は、お預けだ。

「それはちょっと、マズくないかしら？」

…

どちらのマズいだ？

食品自体の味での過程の不味いか？

では無いと肯定しての

食品種の厳選が誤ったか？

ラーメンは嫌いか？栄養面での気遣いか？

ここは…

「分かってる、これからは健康にも気を使っよ。」

拍手ですね。なかなか言い出せないよね。僕も成長したな、選択肢の選び方…

「あら、分かっているじゃない、そう、それ」

ああ、生命再臨回数が尽きそうだ。

「はい、ぱす」

本体とコントローラーを繋ぐ紐がないため、放り投げ、手渡す。

大丈夫、彼女に任せれば、必ずゲームオーバーは回避できる。

カチャ

「？どこに行くのかしら？」

「ドッコラった、？…憚り所にお手洗いしにだが？」

上半身を錐揉みしながら、手を突き、立ち上がり祭に、言葉を返す。

憚りはトイレ。

「うん、いつてらっしゃい」

彼女のいつもの口語が、たまに脱線してしまい傾向は敢えて、とやかく指摘しないことにした。…今決めた。

ギコギコ

冷たい廊下を一般的な要因で踏みつけ進む。

毎度毎度語らうが『歩く』が正しい表現。

ギコギコ

足音がビビったがこれはいつものことだ。年期が入った五十年前の建築物だ多少のボロは許すしかない。

ガチャ、パタン

おれが家族というモノがまだこの世に留まっていた時は、まだまだ、ガキで今よりずっと楽しかったに違いない。

仮説論類に、よっぽと近い言い方だがおれには、過去は過ぎ去るモノで未来は、大剣に貪られるモノでしかない。

願ったモノは叶ったが、きっと誤っただけの性もなく哀れで悲惨なお話なんだ。

いつもだったら、そうであろうとか、そうだったが用意られるけど、こればかりははっきり言いたい。

ザザー

ガチャ、キイイ。

どうも俺は、脳内演説が人より二、三步得意らしい。  
滑稽な人生観を長々と語って何になる？

ハハ、説得力が感じられない、おれはもう、人としての何かの虫の息なんだろう。

自覚はしている、親殺す所から自覚している。とうに悟っていた。

ギコギコ

本当に名残惜しい気分だ。

体が壊れる前に心が壊れるな。

ギコギコ

「よう、元気してる？」

これは自分の声、古見子に話しかけたのだ。

「相変わらず、元気してるわよ」

あつという間に、行ったことのない初めてみるステージへ進行形で  
進んでいるキャラを観る。クロノアだ。

「凄いな、お手上げだ、お前が如何様を屈してプレイする人ではないとは、思うが、疑い深い……」

信じていない、訳ではないがそう言いたい。願望？

「こんなの容易なタイトルは、如何様する価値がないわ」

ってことは、何処かでこっそりしていたりするの？他のタイトルでは…

次回

強火で三分



あらずじに、予め細工している。

ゲームは好きではなかった。好きではなかったが弄ぶのは好きだった。

イカレた事にも、おれは確実に着いていない。ゲームが俺らを、進化させ、ゲームが俺たちを縛り付けたのだ。

証拠、何もない。

「次はおれの番だろ。貸してよ」

怒鳴るように優しく呟いた。このような高話術を磨くのは、苦難な道のりと道程とが入り浸る、険しい道筋を通行しなくては身に付けきれない賜物である。

「良いわ。取ってみなさいよ。…けどね、渡さないわ」

ムキになったら、こんなの反応を反響するのか…なるほどなるほど。

徐々に、彼女の脳内回路が手に取るように解ってくるのは、時間の問題らしい。

「そんなこと言わず、な、早くよこせ?」

有望視なものの見方で、説得と回収に当たる。

「性に合わないことは、避けるべきね…」

目を反らすようにして、アナログコントローラーを放物線上に乗せ、徒手する。

「お…わつと、」

健気なくエビフライをキャッチ。

「こつからは、おれの時代が始まるぜ。」

コタツの角に、上記の言葉をぶつけ、操作開始する。

確認もとらずに、世界観移動を選択し、強豪揃いの場所に転生を図ってしまった。

ピュン、ビルビルビル。

わっふー。

「な、なんだ！、語彙では表現できないそれがウヨウヨいる！地獄編だ！」

画面中央の可愛いキャラクターが、愛くるしく悩んでいる。

ひとまず、一時停止。

「どう？コントローラーだけで電腦世界から落としたのよ？恐ろしいを通り過ぎて、有頂天が精神を駆け巡るでしょ？」

確かに、確認と同意を取らずに先走った行動は、血迷った結末にしなければならないことがよく、

思い知った。

あれだけの語彙では表現できない軍勢が中央無人に、物理法則をすっぽかして、爛々乱舞を展開してしまったっては、打つ手は皆無に同等だ。

「やられたよ。おれの負けだ…」

折角、おれの気持ち悪い兼用で動きに動くコントローラーさばきを、トクと診せてやろうと思ったのに、

それっきしのそれだな。

「もしもの事は起きないと想うけど、負けたら、夕食を一緒に作ってくれるかしら？」

一方的な条件だが、拒否権は剥奪されているに同等だ。おれ自身がゲーム使用権限を剥奪したようなもんだからな。

迷ったあげく、テレビ画面、再度確認と現実逃避をする。

そこには、観るも無惨な、語彙で語源不足で表せない『それ』がウヨウヨ。

愛くるしくキャラの眼前には、『それ』がすぐそばまで来ている。

「…どうするの？…二択しか無いし、片方は自殺行為よ？」

二択とも、爆弾だ。

一つ、ゲーム再開、ぎゃー。

一つ、コントローラーを返す、ゲーム再開、ぎゃー。

後者の場合、おれの方に所有権があるため、イトコにやらせた所でイトコが無操作に、スタートボタンを押すだけでおれの敗北が決まる…。

おれは、冷や汗を欠き垂らしながら、イトコな彼女の双眸に眼球を送る。

大きく深い瞳は、おれを観ている、…何を考えているのかは、論さえも上訴出来そうにない。

これをおれの危うい語彙量ではのめかすのなら…

漢字二文字で深林。

が俺から観てのイトコの印象だ。

「了解だ。承知した…」

少し休憩とばかりに、コタツテーブル上に置いて置いたコントローラーを手に取る。

引力の影響力交えたかのように、吸い込まれるハンド。

本気も本機も部屋の中だ！ここには、コントローラーとハンドしが

ない！

やられると分かってて、やられる！

別に良くはない。けど、悪くものない！

どちらでも良い！

一番の重要視は、やるか、やられるかだ！

「ひとまず、深呼吸させて？」

「良いわよ。止めはしない」

ひー

ふー

みっちり、リッチな気分。

よし、今なら逝ける！

今まで以上に、力いっぱいスタートボタンを叩く。

ぎゃー

終了、ご愁傷様。

「ま、けた…ぜ」

当たり前だ。割り箸を横に割ると非常に見えるくらい当たり前だ。

なにせ、眼前の迫る『それ』をどうやってよける？自問自答を返して、不可能だ。

テレビ画面の世界は幾何学的に成り立っている為、無理化が利かない。あるに会ったとしても、それ自体が世界の一部で、その道筋を通れば必ず、歪みが生じる。

必然的に成り立つ世界。テレビ画面。

出来すぎて、偶然すぎる世界。おれら。

族に言う。越えられない壁だ。

おれも、世界の理屈は了承済みだ。影響力可不可もパワーバランスも頭に刻んでいる。

そのためか、学歴は並み以下だ。それでもいいか。

「負けね…」

「ああ、完敗だよ。」

まあ、神様も許せる範囲内だろ。

おれの未来を代償に、しているのだから。

「んで？もう、真っ暗だが今何時だ？」

ホームボタンを押せば、分かることだがそんな事の為に、手を可動されるわけにはいかない。一種のプライドだ。

「体内時計を実用化なさったかどうかしら？午後六時を回った所よ……」

おれが帰宅してから、一時間しかたっていないのか……ここまで楽しんでおいて、それだけの時間軸しか……

「？どうしたの？顔色が悪いの？それとも腹の調子が悪いの？」

根回しの良し悪しいいね、腹が減っているんだよ。

「心配すんな、腹が減っているだけだ」

とりあえず、遊び場終わり。ゲーム本体の電源を落とす。

まだまだ、おれらはガキだからな。色々引き締めていかないと地獄を観る。

「と言うことだ、厨房に急ぐぞ」

兎に角、コタツから出ないと話が進まない。おれは勢いに身を投じて、螺旋の如くとコタツから脱出する。

それは、イトコも同じだ。

普通に、コタツから脱出。

トコトコ厨房に向かうおれは小学生の様に、輝かしい無邪気な姿に見えたであろう。

厨房目前と差し掛かった所で、ふと、あることを思い出す。

今日の昼は、食材がなく。蓄えていたカップラーメンで補ったが果たして、料理が出来るほど食材は貯蔵庫に在るであろつか？

「って、買い物とか行ってきたのか？貯蔵庫は、アテにならないくらい、貧困な食料量だったはず…」

期待と過度な不安が募る。

「安心して、あなたが頑張っている間に、調達してきたから…」

と言うのは、イトコの古見子だ。

古見子は、その柄に合わないと言われる、『笑み』を浮かべる。彼女はイトコだ。

頼には、昨日の件での痛々しい有り様が現れている。応急処置は施してあるが…

「ああ、そうか、助かるよ…」

つまり、ありがとう。

次回

夕食おろか晩飯



外堀をありの巢が囲う、考えただけで怯えてしまふ。

まさか、モンスターの肉片だったしないだろうな。だとしたら、厨房某台所が生臭くなってしまつて、それでいて、慣れてしまつてしまった、自分を想像するだけで腐つてしまいそうだ。

おれは、冷蔵庫と対面、露わに、立ち尽くす。

相対立と対照的なおれと冷蔵庫。

取っ手は、開けんとするばかりに飛び出している。

それに対し、彼女は、どうやら何を作るのかに迷っているらしく電気のコモを目見つめている。

…それが怖いのだ。

何を買ってきたのか、言ってくれないし、何より、何を作るのか決まっていないのに、食材売り場で買いあさった食材とは一体何だ？

考え過ぎるのは良くない傾向だ。

されど、今は慎重に行きたい。

冷蔵庫を開いて確かめるだけなのに、こんなに用事深く心の準備をしないといけないの？とか言われそうだけど、なんだか怖くて、怖くて性がないんだ。

「せめて、こういう風な物が収納されているのかだけでも答えてく

ださい。ヒントをください。」

媚びるように頼むおれは、怖がりな哀れなお人に違いない。でも、開いたとたん：バーンと効果音と反響音に狭まれて死ぬのは嫌だ。

「発想が豊かすぎるのよ、あなた、中身は普通よ」

普通…どこまで信じていいのか、計りが必要だ。罔を忍ばせても良い。小鳥にせがむのも良い。

って、おい。

何言ってんだよおれ。

雰囲気吞まれすぎだろ。何も考えず、あければいいじゃねーかよ。

かけ声と共に、冷蔵庫の取っ手を握り開門する。

ほれ

あつと言つ間に、内部を一覧出来るほどの空間が出来上がった。

…思い過ぎしは、思い過ぎだったと息を吞む。

至って普通が適当とは、恐れ入る。

てな感じで、普通を連想させる品々が列を創る。

今晚は、カレーだ。

普通の品物を観ると定番色彩る『カレー』の単語が思想雇用空間にこぼれ落ちる。

これはもう、カレーで即決だ。言葉に出して、伝えよう。

「今日はレタスとほうれん草を刻んで炒めて食べよう!」

どこの口が駄弁を申す? あ、おれか。

「そんな、料理があるの? 私の耳が覚えている限り、初耳よ」

当たり前前の朝飯前だ。おれの口でも初口に当たる造語を想像しないと解釈がつかん。

「引いても無駄だ。これに決めたんだ。変更は死体になっても変えられん」

壊れたか、おれの口。薄々気づいたがここまでとは…

「そこまで、大胆な発言をするのなら、そのレタれん草炒めと斬新な食べ物を作るしかないわね。それでもいいの?」

確認の意を圧す様に、返答。

心此処に在らずな発声器官は言う事を聞かずに、紡ぐ。

「料理なんて、手引き書や調合書なんかに頼らずに完成させる、させてしまいが普通何だよ。」

冒険者は一度は、吐露したことがありそうな言い回しだ。

「…言うわね。なら、早く調理に当たりましょう?」

本気で口が自動的に動いた。制御のしようがない口を、黙らせつつ。

額いて、食材を取り出す。

…冷蔵は、長時間開いたままにしておけば、節電など環境などの小賢しい勿体ないお化けがそこら辺を闊歩遊覧してしまうと妄想してしまうので、すぐ閉じる。

両手で持ち上げた作物は、低温度を維持しているため、冷ややかに手が冷たい。

まるで、凍りそうだ。

早めに急いで、イトコが用意したまな板に乗せた。

「危ないわよ、そんなに焦って、持ってきたら…勢い余って、包丁にでも突き刺さったら事故死すまされないわよ」

と、言われ申されても、両手両腕が冷たいんだもの。と言いつきは心に吸い込まれる。

「おれも手伝うよ。その法が効率に良いし」

料理が苦手そうなおれだってそこそこ、親の手伝いとかしたし、家庭科で鍛え上げたし、問題ないハズだ。

「じゃあ、米をご飯に変えて、…」

？炊飯器に電源が入っていない事に、やっと気づいたのか？

おれが冷蔵のボディを吟味していた頃合いから仕込みはしていたが、わざと電源を入れていなかった。

って、線で観ていたのだが、まるつきし、忘れていたのか…？

「了解」

言い放ったコトシラは、炊飯器のコードをコンセントに言えるところから始め、早炊きモードで開始ボタンを押した。

達成感の無さに驚く。

もっと、手伝わせる。

「他に、手伝って欲しい作業とか在る？ 手伝い足りないぜ」

イトコの横顔に話しかければ、包丁を手際良く使いこなして、緑の野菜たちを切り刻んでるではないか。

流石、武器に同じ様な刃物を両手で使っているだけは、在る。

無駄に、接近したら何気なくバラバラにされてそうだ。

「…じゃあ、次はフライパンを加熱させて、私的に適温かな？ と想った時点で灯油を注ぐの」

トントントン、まな板が悲鳴を上げている。

おれ、コトシラは、スライドする戸棚からフライパンを取り出す。

焔炉にフライパンをかぶせ、凹の字と似た相似でセッティングしてから着火。

バチ、ボー

白い閃光と共に、青い炎が靡輪たる（ナビワたる）。

言っておくがただ火が着いただけです。深い意味はありません。

「…」

手伝う事がなくなり、辺りをぐるぐる放浪。

古見子さんの前に存在するまな板の家には、観るも無惨なレタスとほうれん草が広がる。

バランスを考えたのか。そこに、ピーマンとニンジンが混じっていた。

「…」

無言な彼女は、すでに準備を終えた熱たぎったフライパンの上に、まな板ごと放り込む。

ジャーっと、奇声と罵声を奏でる野菜たち。程よく、様になってるフライパン中の住人たち。

「味付けとか、どうするんだよ?」

フライパンの住人を炒めつけるイトコに聞いてみる。

「コシヨウだけで充分、でしょ? どうせ、胃袋に詰めるだけだから…」

納得のいく解答に、同意。

「明日の面接技能能力表現試験とか、あるじゃん? お前は、どんな感じで受けたの?」

試験官と試験官の事について、語ったりするのだろうか？

あ、因みに、ほぼ一対一の語り合いと思ってくれ。

変に、武道で争ったり、特技を晒したりするような荒々しい企画ではない。

単なる面接だ。

「…これ言っちゃって、良いのかしら？」

「言っちゃって、くれちゃって良いですよ。古見子さん」

背中越したが、何となく、口に出すのが恥ずかしいご様子に思える。

「将来の事とか…かな？」

そうか、そうか、夢を語ったりしていたのか。

昔の古見子さんは可愛い事を言っていたんだな。

イトコの古見子さんの事を少し知った。コトシラだった。

次回

食べ物

これは、なんて料理だ？

そんじょそこらの家庭的な実に、お手軽料理と命名した方がいいのか？

お皿似盛られたお野菜は、主食として、一品だけ。

これが始まりの先ず始めのメニューとなるのだった。

おれの日常では、弁当かそれ以外の加工食品。主に、カレーを中心として廻っている。

食品の入手方法は、近くの市場だったか、コンビニだったか…大概は、コンビニだったであろう。記憶までもあやふやになるほど、食に関してはズボラで取り留めが無かったらしい。

自覚すら、させられる。

さて、お皿に盛られた食べ物の主観的感想は止めよか、長々と語っても飯がマズくなる様な感じがするし。

装備は、右手にお箸、左手にお米だ。

つついて食る方が寂しく感じられないと、イトコの提案で、無駄に皿が平坦で大きい。

「どうせなら、コタツの中で食べても良かったけど、今日は調子が悪いから、コタツの上で食べることにするよ」



夜になれば、より肌寒く感じられる季節なのでそこまでしてみたいモノだと、何となく、言ってみた。

「？またおかしい事を言うのね、あなたは馬鹿なの？」

とイトコに、下等動物の漢字二文字を告げられ、とつさに頷いた。

すると、安心した顔をして、今度はイトコが言葉を返す。

「…私からおかしな事を言うておくけど、大抵の人は行儀に忠実、それは誰だってそうであるが、基本的に何処でどう食べようが人の自由だと思っています。」

その言葉には、端から見て不愉快にさせてしまふ食べ方でもよろしい、とでも言っているように聞こえた。

「…つまり、今こうして、片足でゲームを遣りながら夕食を食べても良いと？」

コタツに足を入れている為、外側からは遮って見えないが、おれの右足には、器用にコントローラーを操作しているのの様子だ。

それでいて、ゲーム見取りの画面を見ながら物を食べる、少し異様な光景がそこにはあった。

「それも許せる範囲内だと思うわ」

その言葉を聞くと、段々フリーダム化が信仰してしまい、拳げ句の果てには律儀にマナーを守る人はいなくなるぞ。

…よし、その問題を話題してみるか。

むしゃむしゃと汚らしい食い方で、論を述べる。

「あ、そうだ、今の話で思い出したんだけど、許容範囲が広いと逆に、未来が怖くないか？って話があつて…」

事細かに、話す。

「…最終的に人は自滅するんじゃないか？って、結末になったんだよ。その意見に対しどう思う？」

ん？、話がズレてないか？ま、いつものことか。

「確かに、偏った見方や一種の考えだけに縛られると、人を次の段階に進めないと言うし、ストレスだってため込んでしまうだろうと…どこかの友人が言っていたけど、自滅のイッテを辿るのは、遠い未来と…言っていたわ」

やばいな、味付けコショウだけなのに、美味しく感じてしまう。何でだろう？

「多分、限界を越えるのが楽しいだけなんだろうね、人類の大抵の人は…」

イトコがまとめを表す。

「話題を出して、なんだけど、話を変えて良いかな？」

おれはまた、ふと思いついたのだ。

「確認なんて、とらなくて良いわよ。好きに話を出して良いわ」

遠慮はするな。と聞き取れる。

「さっき、ゲームで二択の選択勝負が在ったが、あの語彙では表現出来ないあれはどうやったの？」

純粋な質問だ。裏技の領域を越えプログラム自体を書き換え構築したって感じだった。

「何となくよ、やってみたから出来ただけ、」

やってみたら出来た…もし、あの時彼女に代わっていたら、軽くクリア出来ていたのであろうか…。

だとすると、彼女が言っていた自殺行為はおれ自身がプレイすることで、彼女がやって入れば、僕の勝利だったのか？

いや、権利はオレに働いていたため、彼女がおれの為にクリアするハズがない。

「古見子さん、もし、あの時、古見子さんに代わっていたら、古見子さんは最後までクリアしていましたか？」

無粋な事をほざくおれ。

「さあね、あなたのために、最後までゴールしとるとは考えにくいのではないかしら？」

つまり、作為的に負けて相手を負かすとか、何で敵であるお前を、とかの話になるのか。

「ま、過ぎてしまった今となつては、何ともいえないが」

一言だけ告げ、食事とゲームに集中した。

色々、会話が續かない話題を幾つかだし、食器と一緒に片づけ、ただやることもなく。

コタツにこもつて、テレビを見ながらとつぶしていた。

おれ、基本的に何もやらないがモットーだから、洗濯とか、炊事的な事とか、最小限行つていない。

けれど、イトコは少しばかりは、家事に協力的だ。

それだけ、とても助かる。

簡潔に言つと楽になつた。

これも昨日件での事件がきっかけで、始まりだったのであろう。

ここから、その事件の結末を浮き彫りと晒すとしてよう。

一部始終赤裸々に語ると、昨日、そう昨日の夕方頃、ちょっとイカした俺が全身全霊をイトコの頬に放つたのだ。

すると、おれは大勢を崩して、頭を過つた位置にぶつけ、眠りの世界へ誘られたのである。

目が覚めれば、朝だった。

恐らく、彼女がいなかったら、おれは寒さで風邪を引いてたに違いないだろう。

普通の人でも、そのままにはしなないと思うがイトコの古見子はおれが寝る横で看病をしていたのか、座ってゲームをしていた。

これが今日の朝の目覚めでした。

俺が思うに、ゲームの力は世界を変えられそうな気がする。

ボケていたオレは、ついついこんな事を言ってしまう。

「俺も明日の面接みたいな試験で話すテーマは、『将来』に決めたよ」

何にしようか、決めるのがめんどくさくて決めたわけではない。

なんだかよく分からないけど、彼女と同じテーマで試験を受けたいと思っただけ話。

「それは、いいんじゃない？、あなたには不向きなようで意外と適材だったりしそうだし」

おれも、そのテーマでどのような結果になるのかは、全く持って皆無。

けど、結果が全てではない。生きてきた中で結果だけにこだわる人生で楽しかったと言える人など、数える位しかない。

結果が嬉しいわけではなく、此処まできた努力と過去の自分との比較でそう思ってしまうだけだ。？

要するに、気安く人生何て物は語れない物だといいたい。

つまり、どうにかなるんだ。

今日はよく眠れそうだ。

次回

難だろう

今日は、こんにちは  
今晚は、こんばんは  
おはよう？お早う？

目覚めは、そんなどうでもいいような夢をひたすら永遠にループし、悪夢のような気分で起きたコトシラだった。

額に汗を垂らして、息が荒々しく乱れていたが布団を除けて顔を洗えば、スッキリ爽快の気分には誘われた。

いつもなら、夢なんて虚像は見ないし、増しては、悪夢なんて悪い虚像はもっと見ない。

「今日は、何か、起きそうだな…」

予感や勘が的中した事なんてのも、ざらにない。でも、思う時点で思わないときより、生存率が高いと聴いた。

人の勘はよく当たる。

有りがちだ。何処でも耳にする。

と、洗面台から歩いて、居間に向かった。時計の針は六時半過ぎ。おれにとっては早すぎる起床だ。

おれにしてみれば早いが、イトコはというと…

多分、別部屋でぐっすり寝ているのか、朝の狩りにでも出ているのか……

と言つか、おれも知らぬ間にここに馴染んでいるのは、なぜだ？

警備的な仕事はどこ行った？

しかも、更にいえば、ぼくに対する態度が最初と少し変わっているような違和感は何だ？

ま、考えるだけ無駄か。おれは知っている。そう思うだけでオールオツケーだ。

そのうちひよっこり、顔を見せてくれるであろう。

コトシラは、静かな一階立て建築の家をその足で飛び出し、家よりも静かで平穏な外の世界に立った。

…

久しぶりの早起きとはいえ、朝のまだまだ薄暗く冷たい空気に包まれる外の世界は、果たして、何年ぶりの事だろうか？

今の今まで、寂しいようで暖かい世界を観たのは何年？何十年？ぶりなんだろうか……

恐らく初めて、即ち、早起き不足。

かんだかい、野生の獣鬼の鳴き声が聞こえるが、これもまた心地がよいものだ。



今日から早起しよう。  
そう心に決めた。

決めたは良いが、実行に移せるかが不安。どうにか、なると思っ  
こう。

コトシラは、至極大自然な田舎の空気を吸こみ吐く、深呼吸をする。

肺の内部に大自然が詰まってゆく。

肺は肺がパンク寸前まで吸い上げてゆき、肺が飛び出すほど、大自  
然を吐き捨てた。

「ふー、戻るか」

ほんの数分の出来事だった。

家に戻れば、何も変わらないただ冷たいだけの空気が迎えてくれる  
だけだった。

やっぱり、こんなもんか…

悟ったように、コトシラはため息を吐く。また、居間へ向かう。時  
計の針は、もう、7時と言っても良い。

数分の出来事は、体内時計を狂わす。

「おはよう、古見子さん」

玄関前から連なる廊下の末端に、古見子はいた。  
ダルそうな、足取り、昨日のあれはゲームの力だったのか？恐れる  
べしゲーム様だ。

「おはよう」

一言、文字じゃこんなだが力が入りきっていない。

どうしてだろう？理由は知っているがわからないことにした。

「あゝダルい、ダルい」

と言いつつ、自室からコントローラーを手にとり、居間に再度方向を向け変え、歩行中にコントローラーの起動キーを叩いて、ゲーム様を起こす。

ダルさを表現するために、ナチュラルに首に手を添え、首を傾げる。

端から見れば、あいつ、露骨にダルそーにしてっぞ、とか思われるレベルで自然体でダルさ加減をアピールしている。

何のためだよ！と聴かれても、自分の為って答えるさ。現にダルいから。

此处で語らせていただくのなら、疲れた体を無理して、平然たる様子を装っても、さらに疲れるだけで、周りの人々に、不愉快と言うなの災いで危害が及ぶ。

だったら、ダルピールしか無いだろ。

と自問会議の結果でそうさせて頂いています。

「よっつ」

7時ちょうどに、コタツに居座りゲームを開始する。

この姿を誰が観ても思っだろう。朝からマイナーなゲームをやる奴とか奇地害（きちがいこの世界では、このような漢字が使われる）だって…

けど…

好きな物は何物にも代え難い、んだよ。

と言ってみる。

別に、好きではないが遣りたいからただやっているだけであって、別に、普通だ。

カチカチ

カチカチ

「あら、コトシラ君は朝から熱心な事ね」  
そこに、イトコが参加した。

「熱心とかじゃなくて、日課かな」

否定する所を誤ったが、  
意味合いはこっちの方がカオスだ。

「なら、邪魔しちゃ不味いわね。…朝ご飯でも、作っとくからごゆ  
つくりどうぞ…」

「まて、おれにも作らせる。朝食を」

反射的に、言葉がはらんだ。おれ自身も理由が分からない。

「…分かったわ、」

んで、片手でゲームを遣りながら、  
なんだかんだで朝飯を作っちゃって、食べた。

料理内容は実にシンプル。パンにざるそば乗せるだけなので…

「古見子さん、これ結構不味くて、美味しいです」

ゲームの遣りすぎか、味覚が狂ったのかもしれない。

「奇遇だわ、私も美味しく頂いているって感じだわ」

…

逡巡たる一瞬。

それには理由がある。

それは、昨夜の昨日まで遡れば分かる。

僕たちは、一度ゲーム世界に呑み込まれたからだ。

それで全ての疑問が解ける。おれが観た悪夢も、彼女がおれより遅く起きてきた事も。

回想

あれは、おれらがボケてテレビ画面を長々と虚ろな目で視聴していたその時に起きた。

「そろそろ、寝るか…」

理屈は睡魔が襲ったから、

「良いわ、賛成」

道理は彼女も眠いから。

錐揉み混じりに、立ち上がろうとした。

「！」

いきなり、日中逆転や重力が逆転したかの様に、視界が歪んだ。言葉が出ない。常識的に、それが道筋って奴だろう。

蛇に睨まれたカエル然りと恐怖で一時的な言語生涯が起きたのであろう。

「ん？ここはどこだ？」

始めてみる場所だ。なんだかんだ、何処かの平面世界のような。ゆとりが感じる。

ガサ、

何がなんだか、状況がいまいち理解出来ていないコトシラの背後に、邪悪な物体が蠢く。

「どうしようかなー、北がどっちか分からない…」

学校の授業で習った、拉致された時の為の方角把握訓練で上位クラ

スだったオレでも、確実に、磁気の歪んだ空間では、その力を発揮できない始末。

常識上これは異常だ！意外の単語が浮かばれない。

コトシラは頭を掻いて、如何に困っているアピールを取る。  
誰か、が助けしてくれるかもしれないを装って…

ズバッ

邪悪な物体は、それと同時に動き出した。  
襲いかかった。が適切であろう。

第三者の視点からは、絶体絶命が正しい…はず

次回

死なないハズ

此処がゲームの中だと誰がいえようか？

定理で語るなら、ここは非常に別世界で在る確実が高い。

洞察力や判断力が無くとも、知っている人はすぐさま理解するはず。

ゲームと言つ名の電腦世界。

電腦世界とは、有りつ丈の導線回路の集合体。言わば、人の頭と同じ、もしくはそれ以上だったりする。

どうして、ここが電腦世界で有る…と断定出来るか、判断出来るか、の冒頭で聴かれたのなら  
オレは素直に、おれの元居た世界には有り得ない物を観てしまったから…だと、答える。

即答の領域だ。だってそうじゃないか？常識的異常な現象を目の当たりにしたり…いや、現に『何ら違う世界』に飛ばされた自覚が有るから、これは確認の一つか。

コトシラの眼中には、邪悪な化け物の姿をはっきり捉えていた。

その化け物は、知ってはいるがコトシラが知ってる限り、こんな事は起きたりしない。

ゲームのモンスター。

それがコトシラの眼中に映し出されているのだ。

先ほど、前。

コトシラは、背後から襲いかかる化け物を難なく蹴り倒し事なきを得た。

問題は其処からだ。

物理的にもあり得ない世界に居たコトシラでも、次元を渡ったり、時間を跳躍しり、する事なんでも出来るはずもないと思ってたからさらにたちが悪い。

風の感触がなく、空調の音が無機質、増しては空気の温度が感じない。

数日間、この世界をさまよえば確実に、精神が朽ちる。

大変なことになった。言わなくても分かる焦りと緊張感、落ち着く事なんて彼には出来ないと思われるが、このような状況下に限って、彼は平然だ。

逆に、この場を楽しんでいる。

「所で何か、ヒントはないのか？」

ゲーム世界に入ってしまったえば、本当の意味でのゲーム感覚に陥るのである。

彼はそう唱えた。

辺りを巡視しだす、コトシラ。  
ヒントなんて物は転がっては、くれない。



だから、探す。

周りを見回すような詮索は、かなり有能ではない。状況把握の一つとして、役には立つが、彼が探しているのは、そんな安い情報ではない。

彼が最も探して、見つけるべき代物は…

元の世界に帰ること。

もしも、思想が脱線してもその目標に、必ず、辿り着く。

もう、物凄い確率で辿り着く。

絶対なんて無い。そんな哲学はほつといて、まず、家に帰りたい。

普通に思ったりしないか？

と、コトシラの脳内会議で可決が下された。

「誰か居ませんかー」

大声で自分以外の人間を呼ぶ。

…

返答なし、おまけにヒントもない。

どうしたものか、とコトシラは悩みに悩み満ちて行く。

「とりあえず、手当たり次第に、さすらいとしよう」

先ほど来た世界に、手当たり何であるのか？手がかりも無いくせに  
生意気だ。

進行方向は、適当に決めただ歩む。

よく出来た世界のため、歩くとチタチタ音が鳴る。ここまで耳障りな足音は聴いたことがない。設定などで効果音等のポリウムを消すか、減らすか、したいものだ。

ふと、またしても怪物が現れた。

グガー

おりゃ、シュワー（蒸発）

どうやら、えぐい死に様を拝めることなく消えてくれるらしい…

最初の化け物は、気絶させただけで外相に何ら変形のない容姿でくたばっていたから、視野に納めることは出来たが、そう何匹も観たくはない。

気が狂い出す病の魔の手が侵攻してはしまっからな。このシステムは認める。

と

三匹目

は、シュワー

…一方的に、殴ったり蹴ったりしているけど、これ、これくらったら、どうなるの？

疑問符を浮かべるコトシラは、まばらに発生する闘技のルールに関してよく知らない。

「ま、一撃でも攻撃をもらえば、即死って事だろ」

気になるのは、その後、僕は何処へ行ってしまうのだろうと言う概念だった。

敗者復活は、システム上に存在するのか？と前提を肯定した上で、何度まで再起出来るのか…

ますます、不安要素はつるばかり…

誰とでも話せるのは、良いことだが、おれにはまず、周りに人がいない。

どうすんの？

その果てに何が待っているのか、よく分かる。人の温もりや愛情が行き届く事なく滞り、残念な人は沢山観て来た。

終わりは目の前だ。

悪魔の囁きだつて聞こえる気がする。

うわ、やべ、涙も出てこない。

「う、うあああああああああ」

土下座に近い物腰で大地にへばる。

心は平常だが、体がそれを保とうとしたい。いかにも滑稽な姿が誰の目を通して、印象は綻んだ哀れ人と思うだろう。

最悪だ体が言う事を利かない。これで自己紹介したら、第一声に、『うあああああああ』が飛び交い、笑いにもならない。

此処まで体が正直だと、正直、思わなかった。

イトコの古見子さんが助けにでも来てくれたら…

贅沢を言っているのと言うのなら、試験中、大声を出したシイク君でも良い。

…貴族なお姫様でも良い。物静かな青年でも良い。

誰か、声を掛けてくれ…

…

沈む。視界はうつすらとはつきりしない。落ちていく感覚とほとんど同じ。

バイバイ。おれの人生…

…

「何しているの？」

「精神的に参っていたんだ」

「おかしな子ね？医者に相談することをお勧めするわ」

「ああ、その心配は、もう決着が付いた。」

「？つまり、直ったって事？」

「勿論さ」

その声は、イトコの聞き慣れた声。

はつきり言って、聞き慣れすぎたって感じた。けれど、そんなのどうでも良い。

コトシラは、ズボンに付着する、妙にリアリティのない土は払いながら、立ち上がる。

絶対何処かで、期待していただけあって、いざ登場してきても、何でもなかった。

無かったとは、無情感類いではなく、何かの変化が起きなかったと言っ言い回しだ。

始めっから、演技だった…てことはない。

此処で終わってしまえば…それはそれで、其処までだったって事。

「古見子さん…」

おれは、この言葉に、お礼を言わないとな。何時だって、気持ちを伝えられる。

「ありがとう…」

「…」

声は聞こえる。そこには居ないが、聞こえてくるって事は、おれの言葉だって、聞こえてくれているはずだ。

文法が正しいとか正しくないとかそんなの関係ない、そんなの要らない。

気持ちを込めれば、何時だって何処だって、絶体絶命の最中だって、…繋がる。

…かもしれない。

うん、多分きつと、そうだ。

「お礼を言われるのは、これで二回目何がするわ…」

次回  
帰る為

「今の話をまとめると、ここはおれが愛用していたゲームの中つて事か？」

長々と話すこともない彼女は、淡々と状況を話してくれた。おれは、何故か理由は知らないがゲームの中に迷い込んだらしい。

「そうよ」

と彼女。

この声の発生源は、何処なのか、見当も憶測も掴めないが、見えな  
い発信機から聞こえると思えば気にならない。

さっきのさっきまで、無言で反応もなかったのも、あちら側では、  
一生懸命おれの行方を探していた。とか。

まさか、ね。とかも言ったに違いない。

此処は一つ、良くやったと誉めるべきだな。

「でもよ、見つけるのが困難では、なかったか？ゲームの中なん  
て、馬鹿馬鹿しくて、思ったとしても調べる場所ではないだろ？  
…  
次元的に」

現状がこうだから、違和感ありげな質問に仕上がってしまったけど、  
正論だろ。

「それを私に言わせて、何になるの？…そうね…強いて言えば、愛の力とか…」

言ってくれたな、古見子さん。こういう場面では、聞こえなかった事にするが吉だな。

「ふむ。…そうかそうか…話、変わるけど、此处から出る方法とか考えてないか？」

この世界のことだ、色々歪んで綻んだりしそうで、早めに対処しないと…いけないからな。

「その件に関しては、大方、見切りは着いているわ」

お、頼りになるな。これだから優秀さんには、勝てない。

「このゲームを壊す。」

あれ？ブレてないか？

「壊すのは、止めておくれよ…」

弱々しい声の主は勿論おれ。

「あら？それが駄目なら、このソフト内のエンディングを迎えれば、外に出られるの推測の方がいいのかしら？」

全然そっち…いや、冷静に考えるとこれは難儀な事ではないか？



「セーブデータまで飛んで一気に、エンディングって、荒技を実行に移すことは出来ないか？」

ゲーム高かったし、壊すのは可哀想だからな。こっち除けで動いて頂けますです。

「ちょっと待っててね」

無言で返答。待っている間は、レベル腕慣らしのため、雑魚を一、二匹殺める。

セーブデータで飛んだりするのは、難儀からの他に、まだ何個かあげられる。

五体満足に生まれたおれでも武器なしで、奴らを相手にするのは、厄介だ。

もしこれが、一度負ければ、戻れないようなルールであるのなら、おれは心構えをしなければならない。

この世に限界は存在するし、制限だらけだ。

…ん？今の発言には矛盾が生じてないか？

「…もしもし…コトシラ君？」

「はい、何でしょうか？」

また、脳内会議を繰り広げ展開していたのかおれは…

「出来るわよ、移動…と言っのかしら？一番最下層の最後の敵の手前とかまで…」

なるほど、初っ端からラスボのお出ましか。ちっとも面白くないが、こんな所にいる時点で面白くないことには変わらない。

「気回しは無用だ。そこまでとばしてくれ、遠慮なくな。」

一度は言ってみたかった言葉だ。おれ言っと、結構滑稽。

「わかりました、それじゃ、遠慮なくな、飛ばさせていただきますね」

…

飛ぶ。それはどんな感覚なのだろう…生まれ出から一度も飛行機などに乗ったことのない、田舎生まれのおれに、その言葉は何処か現実味のない物に感じる。

…

すると、体が人為的に軽くなる。

瞳孔を開き、瞬きもせずに観た感覚だと、下手に鈍く視界が捻れ淀むのが分かった。

一瞬の内に、夢を観ているような力オスな記憶の世界。そこには、今までの不幸や苦悩や災いなどの負の記憶しか蘇らない。

まるで、生きてきたすべてが負だったように…。

「！」

立ちすくむのは、壁。

いまこの場所は、最下層のはず。だが、何かが違う。

「マズったわね…」

些か、頼りなく聞こえる声。

何がどのようなようにして、マズったのか。

推理するには、材料不足。

まあ、前方が壁だから後ろを観れば何か分かるかもしれないな。

そんな悠長なことを思いながら、翻り、表を向く。

「な…」

愕然の二文字。語呂は四文字。実際言った口は、な…の一字。

『何』とはよく使われる文字だ。何でもかんでも、『何だ』とか、『何だつて』とか、複数に用途があり得る可能性無限大の完全無欠のワード。

コトシラの眼前には、似たような景色が広がり魅せていた。

何故、何だか何となく、世界が一時停止していた。

その答えは分かるような気がする。

古見子さんだ。

コトシラの位置から、見える限るの視界に無数の『それ』がいた。

「語彙では表現できないそれ…」

絶望感と茫然自失の二通りの情感で、彼を襲う。

立っているのがやっと…

素晴らしい言葉だ。どれだけ、慌ただしいがやるせないこの状況を説明できる。

もう終わりだ。無理に違いない。

最悪の状況下、面白くて笑い出しそうだ。  
笑ってみるか…

「うあああああああああ」

しっかりと発音のとれた、哀れ声。いま現在の演出にピッタシだ。  
将来演出家にでもなろうか…

「はあはあ、古見子さんきいてますか？…」

きっと、イカレきった、おれを観て引いるのであろう。恐らくは、  
愛想尽かして、帰ってしまったのだろう。

だとしてもだ。

この場が俺の墓場になっても、これだけは伝えよう。

「おれは、古見子の事が好きでした、大好きで…!」

聴いて無くとも聴いててもだ。

「色々と守られてばっかだけど、此处でオレがくたばったら、くた

ばったで、あの世で今度は、おれが持つてやる！」

ある意味格好悪すぎて、誰にもいえない言葉が俺の意志に逆らって、飛び出す。

これが本音なのだろう…

「…よし!!、おれ、逝ってくる！」

この場が墓場になろうともだ。

コトシラは、構えた。

「うおおあああああああ！」

全速力全身全霊を尽くし、語彙では表現できないそれを避ける。

この局面では、成功といえる華麗な回避を醸し出した。  
無傷で避けたが、次の段階で二波が食らいついてくる。

とっさに、語彙では表現できないその右斜め下に転がり込むが…

ビッシャ

「ぐうあああああああ」

転がり込む際、左手をもってイかれた。

大丈夫か？大丈夫じゃねーよ。

三、四、五、と次から次へと、それが集中的に進撃を狙う。

瞬きすれば、軽く三十匹はいる。

終わったな…

此処はもう、どうにでもなれ…

「古見子ー！ー！！こっああああああああ」

変態じみた奇声で告白した彼女の名を呼んだ。

「全く、しょうがない子ね……助けてやらない訳ないじゃない」

古見子さんの声と共に、体が見えない糸で操られる。

スン

スン

スン

圧倒的な無駄のない動き。

語彙では表現できない朴念仁なそれは、まるで、まともに、ついてこない。

「何が起きた？」

自分が自分じゃない錯覚…何だか、別の体のよう…

そこには、『それ』しかいなかったが、ちょっとだけ、ほかの存在の温もりを感じた。

「コトシラ君、分かってないようだから言っておくけど……、」

彼女は言った。

「……私があなたを操縦してるのよ」

次回  
幕完

回想終了

なる程、分かったぞ。

お早うは、あくまで王覇陽なのか。

ざるそばパンは、流行らない。腹を壊しそうだから。

昨日の今日で、味覚が変化したのなら都合がいい。このざるそばパンを美味しく頂けるのだから…

さてさて、今日は漸く、期待の面接地味な試験の日。

試験開始の時間まで、目測で五時間ほど、全然まだまだ時間が余るという。

「今日は、わつくわくの第二次、試験祭りだが、古見子さんは何しとく?」

お茶を啜りながら、おれが古見子さんに尋ねた。

「…そうね、予定はないけど、暇つぶしでもして、待っているわ…」  
昨夜の出来事以来やる気喪失している、古見子さんは、いつも通りだ。

元気がないのではなく、平常心をわきまえているのだ。日常茶飯事



だ。

どうでもいいけど、古見子さんの家族達は、何をどうしているのだろうか…

観たことも、会ったこともない。匂いもわからない。

それどころか、彼女の招待もつかめていない始末。頭のアバウトな記憶の棚に、この人イトコだ。って、収まっているだけである。

男性として、詮索は避けたいところだが気になる物はどうしても気になる。

このまま、試験なんて止めて、古見子さんと冒険に出ようかと思うほどだ。

「暇つぶし…か。其れ即ち、時間の無駄遣いだけど、遣ってて楽しいか？」

大抵、イマイチか、遣るにしては、とか、言葉が出てくる典型的な言葉の流れ。

「イマイチ…もしくは、面白くは、無いわ」

それもそうだろうな。

「試験が終わったら、旅でもしようか、みたいなこと自分で言いふらしていたけど、期限を放棄して、いま行くか？」

自分の言葉に、責任を取らないおれは典型的なアレだな。

「それも良いけど、今まで遣ってきたことが台無しになるわよ？それでも良いの？」

どの部分を切り取っても、まさしく正論だ、と我に帰る。

一応、分かっていたことなんだよね。此処までの努力と知識の蓄積が中途半端に、役無しになる事ぐらい。

「良いわけではないが、でも、あきらめても良いと思うんだ。」

昨日の今日だからな。あんなことが在ってからの、今は、昔の自分と少し違うと思うし。

当たり前前が当たり前前に出来ないオレだし。

投げ遣りに身を任せてもいいんじゃないか？

「弱いわね。私もそうだけど」

その通り、強う訳がない。昨日の言葉も嘘だったになるかもね。それでも、一人の人間だし、死ぬのは怖い。全然健全者だ。

「だから、さ。俺にも、少し語らして、」

完全に、試験に逃げ出す方向へカジをキったおれからの言葉。届け、届けだろ。

「…語っても文句や反論はしないわ。だけど、私からも一つ言わせて、」

どうぞ。古見子さん。

「語るなら、不抜けた感じで語って貰える？」

！

くつ、大打撃だ。その台詞には、重量感が掛かっていた。古見子さん以外と怒ったときはエグリを使ってくるんだ…新しい顔だな。

「面接の際に、話すハズだった将来の事について、堂々と語って良いか？」

現段階では、質問の領域、語ってはいない。

「言つてご覧なさい？」

吐露する。おれ。

「おほん、では…」

将来、おれは、世界中を旅して、いろいろな物を観て、色々な景色を見て、歩きたいです。」

終わり。何て短く簡単にまとめた文章だろうか、自己評価はどうでもないが…

「…」

盛り上がりには欠ける、発表会。もはやこれは、小学生並みの朗読パティー。

「私からは何も言えないわ…」

飽きられたのか、返す言葉もないのか、どっちも同じ事か。

「よし、旅の準備をしよう」

本当、何もかも意味がなかった。

コトシラ達は、旅の為の重要な道具をまとめ始めた。サバイバルナイフを基準として、紙皿や紙コップ、そして、割り箸を備えた。これは、まるつきし小学生のピクニックと同等、笑われてもそれはそれで、仕方ない。

「ゲーム機とかも、持って行くの？」

電力の供給のままならない、旅路でゲームは荷物になるだけだろ？  
…思い切って、捨ててみようか？

「持っていけるはず無いだろ？異能と特殊能力を孕まないと、確신폱って行つて良いほど無理」

退屈な旅路になりそうで胸が苦しいな。ゲーム機がないと楽しめない直感的に、思想するおれもどうかしているのか…

「あ、言い忘れていたけど、武器とかしつかり、手入れする補修用専用箱をバックに入れとけよ。」

旅には、獣鬼は付き物。忘れてしまひまでおれは落ちぶれてしまったのか…下らん宗教の底辺知識を蓄えた所為でもあるのか…本当何だったんだろアレ。

おれには関係なくなつたことだから、清々と不可思議に思えるんだろうね。

この世の意味が分からない。

「あれ？コトシラ君は、あの禍々しく漆黒色の大剣を背負って持つて行くの？効率悪くない？」

持つていくとは、一言も入っていないが…補修用専用箱イコール自分の武器を持つて行く…につながつたのだろう。ここは有無を言わざるを得ない。

「無論勿論さ、邪魔だな」と思つたら、ポイ捨てすればいいだけだし。もし、獣鬼等の化け物が襲い掛からば、俺らは何をどうすればいいのか、明白じゃん」

ますます、軟弱な起因に満ちていくようだった。

何かが変わったのは、おれだけだろう。ゲーム世界で体感した現実味の無い思想。

手に入れたのは、愛？

違う。当たり前が一番麻痺することの恐ろしさだ。

今のおれは、現実逃避を行っているんだ。逃げるだけで、最悪の選択肢。

現実と闘うわけではない。現実には敵ではない。敵であつて欲しいのは、運命だ。

「そうよね。わざわざ、危険な旅路に成りかねない様に、備えるのは、賢い判断ではないわ。」

古見子さんは、二刀小刀を持ち運ぶ。彼女のお気に入りだと誰もが、一致文語を並べるであらう。

と、おれも部屋の隅にホコリをかぶった、黒刀を取りに行かないと、  
：

コトシラは、日用品あふれる居間から、飛び出し、自室へと向かった。

「行つてらっしゃい。」

と古見子

「ああ、行ってくる」

とおれ。

家の中は、冷たい空気と澄んだ空気とが降り混じり、殆ど同型類の気体なので何とも言えない。

廊下を渡り、ドアノブを半回転させた。

目に映る。見慣れた空間は、一つの世界を物語っていた。

「おれが、数年間過ごしてきた部屋……」

おれが幼少期の時に書いた落書き、今のおれよりガキだった時に書

いた落書き…

眺めている内、言葉通り儚げに散る夢のような気分誘われる…

落書き…してみようか。

何を言い出すかと思えば、落書きをしようと呟いているおれが居た。  
年を重ねて変わっていく感性。

ずっと後に、分かってくる過去の自分の素晴らしいき営み。

奇麗事だと、罵られてもいいが、おれに取っては、すべてが本物、  
どんなときだっておれはおれだから…

落書きの散乱する酷い壁に、マジックペンでこんなことを書いた。

『今のおれがここまで、情けない人だった』と、

意味は、この日を境に、おれの変わる人生観に対しての暴言だ。

コトシラは、マジックペンを元に戻し、ホコリまみれの武器を手にし、扉を閉める。

キィイ、ボタン

寂しさや切なささえ感じる…

次回

試験  
廃止



旅路に、足を踏み出す一歩手前がこれほどまで、長くなるとはな。

正午を廻ったところだ。

昼飯は、ジャムパンで済ました。問題ない。百パーセント全力で歩ける。

目的はない。取りあえずひたすら歩く。

歩いて歩いて、世界全土をこの足で踏み確かめる。何、恐怖とか、武者震いとか、全然。大丈夫だ。

端的に言う運動だ。

そう運動…

この運動に名前を付けるのなら、

目的探しの旅と名札を立てても良い。

目的地なんて、歩いていく内に見つかって、歩いていく内に、見失うもの…そうは思わないか？

ちよっぴり、脳内をくすぐった感覚がしたので、古見子さんに話すことにしよう。

「ねえ、ねえ、古見子さん。目的地を探す旅って、格好良くない？」

おれの精神年齢は、小学高学年並みであろうさ、けれど、恐れることはない。体の方が少し早走って、大きくなっただけさ。

一方では、古見子さんも等身年齢的には、おれより一歳上のイトコで先輩だけど、彼女もどちらかというと、心は幼い方であるうよ…

「主語が抜けている様だけど、つまり、宛先のない封筒をポストに突っ込むくらい、格好いいって事？がいいたいの？」

え、理解してない上、凄く解りづらい例えまで提供しちゃってるよ。

「違う、違う、おれが言いたいののは、『目的を目指す』の目標があるが、それを差し置いて、『目的を探すのを目指す』って、工程が遠慮過ぎはしないか？って、格好良さだよ…」

ゆとりのある行動や言動：人類は、それを有意義と唱えた。

「仏教の道德教育みたいな振る舞いね。」

古見子さん言葉を使って、簡潔に一言で言い切ろうと言う必死さだけが伝わる、それが好きだな、私的に…

「駄弁は、歩きながらも出来るし、戸締まり律儀に気を配ったし、旅だしの一步を歩もうか…？」

急かすように、話を進めるコトシラ。

「…なら、私からも一方的なお願いを言うわね…一度、踏み出したら、背後の景色は観ないことにしましょう。」

良いわね。の古見子さんの語後に、賛成の意を首を縦に振る、のジエスチャーで応えた。

「扉の向こうには、見慣れた村が広がるのを始めに…のちに、今まで隠されていた財宝のように、次から次へと新しい景色が目に見え付くんだよね？」

言葉だけなら、ロマンチックだ。言葉なら綺麗な言葉だけを並べられる。

あくまで、これは好意の語句をわだかまって言っているわけではない。

訳すと、好きで言っているわけではない、になる。

「そうね。卑劣でえげつない。世界も観れそうだしね。」

その通りだよ全く。

あ、そうだ。

おれは思いました、僕の頭の中の脳内思考回路に、ワード検索が掛かった。

コトシラは、国語と数学が苦手です。そのコトシラがだす、演出に適した行動パターンがポロツと、出てきたのです。

男女、歩く、始まり。

ふふ、分かりましたよ。

こんな時は、アレしかないよね。

何かに、取り付かれたかに思える不気味な笑みと微笑みが愛くるし

く合致した。

「古見子さん！」

コトシラは言った。

「何よ？ 気持ち悪い…」

毒舌な饒舌に怯んだ。おれ。  
だが、めげない。

「手を繋ぎましょう」

こつちから言うのも、新鮮味があつて良いな。こんな企画は、おれの方から積極的に押し進めるとするか…

世界がパーと広がる錯覚が拡散した。

「…」

面白い物を見物する有り様で見つめる。  
照れはしない。徹底的に真顔で対応。

「面白い一言ね。今度からは、そっち方面を任せることにしたわ。」

どうやら、株がひとランク昇進したようだ。

それでも、試験放棄の件は、まだ、返済できそうにはない…

「わかった。…出来れば、次からは何となく自分のタイミングで提

供するんで、色々問題点が有ると思うが、広い心でご理解を…」

おれも多少は、チキンなのでここその時に、アプローチが欠けたりしそうだからな。コレだけは、前もって分かってほしい…

「皆まで言わんでもよろしい。暗黙の了解よ」

ま、今、何より優先することは、おててを繋ぐこと、何の支障もない。

単なる握手だ。

「じゃあ、ん〜と、え〜」

現在位置は、家内、玄関入り口前。

靴を履いて、荷物は所持中、準備万端と言える。

正面には、扉、すぐ横には、イトコ。

決意を込めて、よし、とか言ってみた。

「よし、それでは握ります」

落ち着いた面もちの彼女は、何処までも、穏やかだ。

余りに、大人しい為、「人形のような無生物」、とでも例えられそうだと

と

心構えは、澄んでる。

震えるているのか、周りが揺れているのか、幻覚に煽られた気分で、彼女の手をそっと、握る。

鮮明な描写は、言い表せない。

取りあえず、イトコの手を握っている。  
人の手で、自分と異なる異性の手。

以上を上げる。

「さ、行こうか、未知なるそこへ」

飛び出すようにして、ドアノブに手をかける。

始まりは手を繋いで…

おれが答える演出名だ。

ガチャ

ギイ

扉をゆっくりあける…

午後一時前くらいの芳しい日差しが一斉に、照りつけた。

「外、懸念していたほど寒くないわね」

開口一番のそれは、意外性に格段と特化し、咽せるほど吹くところ

だった。

「何行っているんだよ。古見子さん、笑うところ寸前まで来ていたよ、おれ」

軽い気持ちで、訴えてやった。

…手を繋いだまま、庭を歩く。

「待つて、玄関にカギ掛けるの、あなた忘れてるんじゃないの？」  
「ついつい浮かれていた、おれは現実に戻る。  
危うく、カギを欠けないまま、旅に出たとなると…想像しただけで、  
取って食われそうだ。」

「ヤバい。そうだった。」

語頭、ヤバいが着くほど、やばいことである。

「しっかりしないと駄目じゃない？そんなんだったら、この先の  
たれ死ぬわよ。」

こうやって、注意してくれる事までが嬉しい。いつか、注意もしなくなったら、試合終了だと悟っている。

「ああ、無責任な言葉を贈るけど、『次から気をつける』事にするよ」

コトシラは、手を繋いでいる左手を使わず、空いている右手でポケットから、鍵を取り出す。

チャリン

鈴と大昔に流行った珍キャラクターの繋がれたカギ。

合鍵はない。これ一つだけ、

…家族を失ってから、このカギに触れたものは誰もいない。

おれの家族しか触れていないって事は、家族だけしか、触れない物  
って解釈も有りだろう。

「あ、ごめん。おれ左利きだから、カギを扱えないんだ。古見子さ  
ん代わって…」

さり気ない言葉を贈る。

「何よ。独りで何にも出来ないの？…全くしょうがないわね」

コトシラは、古見子さんに鍵を手渡す。

次回

旅蛇尾



千里万里駆け巡る。他愛のない会話を進める物語は、つまらないのだろうか？

現実離れた、今回の行動。神様が居ると仮定したのなら、一般人には到底出来っこない怪奇な定めをきくと、おれらに与えたに違いない。

おれ、通りすがりの田舎者と、彼女、住所不定、家族構成皆無のイトコ、は道さえも整備されていない歩道を二人歩きしている。

現在位置を確認してみようか。

村と言っても過言ではない村を、歩き続けいる末路だ。段取り持つかめていないからこそ、枝が倒れた方向に、直進している。

枝が不規則な道筋を、定めるのも、神様の仕業なのだろうか？

王国最大の都市、…から離れていくのが分かる。

活気溢れる地域とは、逆方向に向かうおれら。

風景や景色は、歩く度に野生化していく。このままでは、人類の原点へと辿り着いてしまいそうな赴きで、補足する。

どうでも言いように聞こえるが、これは、人間としての元凶です。

歩くだけで、猿になるから…話の流れではそうなっている。

「古見子さん、国境を越える際、何かしらのパスポートなどが必須になってくるのではないか？と思うんだけど…そうなのですか？」

以下の話の流れを断ち切る。コトシラ。

それに、連動して、重っ苦しい荷物を引きずる古見子さんはこう答えた。

「パスポートなど、いつの時代の産物ですか？…私は、残念ながら今日初めて、その話を聞いたわ」

この言葉の解釈を追跡し、追求した上での日本文役に正しく並べるのは、非常に高度な分析力を伴うらしい。

これは、さすがのコトシラでも、頭を抱える。

「え、どう言う事？…おれ、さっぱり分からなかった。もう、少しかみ砕いて言っておくれ…」

コトシラは、重そうな大剣を引きずりながら、再度、古見子にコンタクトをはかる。

「伝わらなかったの…つまりね、そんな者必要ないって事、スリルを味わいたいもの…」

成る程、成る程、危機感是一種の好奇心と同じ部類に、分布しますしね。今言ったことも、解らなくはない。

コトシラは、納得の色を見せると同様に、不安感が悪寒を誘ったりした。

でも、心配ない、今までも何事もなかったように、これからも、なんとかなるさ。

「…賛成で決まりだ。無いと分かって、びくびくするより、無いと知っていて、堂々とした方が潔いし、俺たちらしい。」

何だろ？この愛着感、あふるる、この系統の言葉は？

昔っから、言っていた様で言っていない矛盾と良く分からなさ加減は…

前世で言っていたのかもな。

勝手に理由を付け、勝手に納得したコトシラ。

古見子さんもその言葉以来、口を閉ざし、話そうとしなかった。刻々と、時間だけが過ぎていく。

歩いていく内に、

段々と、畑も見えなくなり、完全な平原と化していた。

ずっと奥には、森が見える。此処まで来れば、道など何もない。本当のは、今までの世界なんて、幻だったかの様な素朴と過疎が心を打つ。

「地球って、誰が丸いって、決めたんだろうね…丸かったら、どこ行っても、隅や端で落ち着かないじゃないか…」

人は、放牧には不向きな狭い動物ですからね。特に、日本語をしゃべる僕達なんかは…。

「それは、心の広い人に決まっているじゃない。そうでないと、地球が太陽の周りを回っているなんて、思いもしないわ。」

根底を覆す一言は、なんだか、癒された気分誘われる。

これぞ、反抗精神。反発したり、素直に認めきれないのは、それなりのプライドがあるからだ。

特に、認めたいが自尊心が阻む一時なんて、観ているだけでまるで鳥のようなつかきぶんで気分がいい。

と言うだけの話だ。

「肯定論理を覆してやろうかしら？」

爽やかな草原の揺れる音。

さり気なく芳しい、草の匂い。

きつと、それは叶わぬ夢かな。

「…無料、だと思っぜ。」

「ふーん、言ってくれたわね？。…なら、その理由を五文字以上で説明してくれる？」

言うなれば、創始者には慣れないと、簡潔な文書を現せば良いだけ。

「殆どの開拓者は、皆男だけだと言っぜ。」

これが越えられない何かが隔てる壁。

「確かにそうね。…何故そうなのかしら？」

うん、おれも思う。何故そうなのだろうか？

多分恐らく、そこには、見えない力が均衡を保とうとしているのだからか？

「面白いことに、不平等がバランスを保つことが良くあるご時世だ。暗黒物質のような次元の違う、不確定影響の沙汰ですぜオ」

不確定影響とは、未知の人では想像もつかない世界を構成する部品。

「基本賢いのね。あなた」

馬鹿を賢く言っても、哀れなただけだぜ。なにせ、馬や鹿のような英知しか持っていないし…

「あ、一つ疑問点思い付いた。…賢いかどうかは自分で決めるものか、それとも、他人が決めるものか…」

「まって、何か近づいてくるわ。」

疑問文をあげる前に、言葉を割り込まれたコトシラ。何かとは何か？これでまた、口論できそうだ、などと考えていたのは、彼女は知らない僕だけの秘密だ。

「獣鬼か。この辺の獣鬼は希少価値が高いと村人がすれ違いざまに、訊いたことある。ぶっ倒して、遣ろうぜ」

動詞を組む。荷物を大地にそつと置き、大剣を構える。  
イトコの方も既に、小太刀を手にしている。

二時の方位に、確かに、怪物のそれが居た。

一見、サイの様な形容。突進攻撃はダテでは無さそうな物腰。

「一撃で決めてやるわ。とか言いちゃいたいわ」

そう言えば、前々から思っていたけど、獣鬼ってなに？

人からしてみたら、自然界に不適合とは思わないか？

普通は、俺らと同じ動物は家畜かペットとして可愛がるが、獣鬼は生物出すらない。

手地の固まりと同じく、タンパク質によく似た構成物質の塊だ。彼らに意志など無い、ゲームの奴らと同じ何かに動かされている。

「陰謀だな。」

その掛け声と共に、揺らぐ獣鬼。

先手は、俺らの方が早い。

イトコの機動力は、とある学校で有名になるほどの出来た動きだ。

ガサガサ

獣鬼は、翻弄されていることにも関わらず。突進する。

「直進攻撃とは、何にも考えていないぜオ」

これ wait していたかのように、大剣をこしらえる。

一撃入魂で獣鬼を葬る。

その間に、イトコは獣鬼の外装を剥ぎ取る。手慣れた手付きで顔面部分からこまめに、剥いでいく…

移動対象物をよくはぎ取れるもんだぜ。おれのカンカツではないが、負けた気分がする。

「はい、剥ぎ取り終了。思う存分叩いて良いわよ。」

その合図を待っていたかの様に、大剣がギミックを起こす。

ゴゴゴ

と機械音が奏で、さらに、

ガシャゴキ、シャガッ

リーチが伸びる。

横に振るか、縦に振るか迷ったが横に振ることにした。  
居合いの構えと、黒き熱風が俺の周りを取り囲む。

タッタッタ

獣鬼が眼前何メートルかで、おれは動いた。

「一撃残光横なぶり。とか言っちゃって」

軽く衝撃が走り、ジェット機のように加速する長刀は円心に沿って半回転で獣鬼にぶち当たる。

バ  
ジ  
エ  
コ

旋  
律  
の  
一  
瞬。

次  
回

憚  
り  
所



変形型の武器とは、近年よく見られる代物。けれど、この武器は最悪すぎる。

コトシラとイトコは獣鬼の肉片を回収し始めたところだった。

液体質な物質は、含まれておらず、変わりにジェル状の肉質が溢れ出るだけで生き物としては、甲殻類に当たるのかもしれない。

でもそんなのどうでも良い。おれがタチが悪いと思い当たる部分は、獣鬼の体質とは異なる別の場所、…こんないかがわしい物を食べ物と認知してしまう人が怖い。

いろんな意味で怖いのは、人間の方ではないか？

と、思うがままに語らうコトシラ。脳内限定であるこの討論は、貴重品だ。

一方、現実世界を垣間見れば、獣鬼のそれを圧縮収納箱に詰める地味な作業だけだ。何の面白味も感じられない。

「よくこの凄くどうでもいいこんな場所、よくよく、現れたりするもんだ。陰謀とか人為的何かが裏で糸をヒいていそうな予感しかない…」

ばやく。呟く。どちらかで言ったはずだ。その呟きに、対してかは解らないが、古見子さんが言葉を紡ぐ。

「草原と言う舞台で死にたがっただけじゃないの？」

獣鬼出現は、ただ切り捨てられるだけの局面を迎えるだけで、獣鬼は死ぬだけ…の考え方が定着したのは人類の技術の進化の課程と言える。

死に場所まで求める、獣鬼もどうかしているか…って、それでは獣鬼その物に意思があるのを認めているだけじゃん。

「獣鬼の寿命は、無限、誰かに機能停止を強いられるまで動き続ける…その点を押さえると、古見子さんの云う通り、何百年何千年可動し続ければ、自我の覚醒も有りって話に納得が行きそつだ。」

皮肉で悲惨だな。無限に生き続けるって事は、地獄と何ら変わらない。確かに、死にたがっても仕方ない筈だ。

よし、と、収納箱に出来るだけ質の良い箇所を容れ終わったコトシラ。イトコも同様。

本当なら、もたもたしてられない適所に居るのだが今更、急ぎ足なんて疲れる業はしない主義なんだ。

立て膝を突き、立ち上がる。近辺に転がる大剣を拾う。

「もう、いいか？…ほら歩くぞ」

日が暮れるまでは、どこか親切なお人の家などに住まわないと往けないミッションがあるんで、強制的に揺さぶる。

「こちらの方こそ、あなたが終わるのを待っていたのよ？早く歩くわよ……」

現場を垣間見れば、悟る。おれが大剣を手に取るモーションより、古見子さんの刀を収めて次の立ち上がる方がよっぽど、早かった。

誤差は三秒ほど、でも、送れていることには変わらない。負けたら潔く云いたくなる言葉を言うとするか。

「悪かったな。行動が的確じゃなくて……」

平然と前を向く。コンパスが無くとも何処が進むべき無知かは分かる。

只、歩数を延ばす俺らの行為は無意味と言えるが強制されて、今を本当の意味で居きられない輩の方が殺人的だぜ。

ザガーザガー

大剣を引きずる音は、比較的暖性音域、心地がいい。これも訓練の一つといいざるを得ない。

背後には、イトコの気配。イトコは云った。

「荷物を持って、武器を引きずる姿を想像するだけでユニークと思えるのに、この角度から見るとあなたの姿はより恍惚に滑稽よ？」

ありがとう、ほめ言葉と有り難く受けつけて置くよ。

「引きずるのも大変なんだぜ。特に肩に負荷が掛かるし……」

これから、何里何万里も引き摺れば、きっと、腕が肩からもげる。  
大げさな表現で済まない。

「肩に金具でも、はめ込めば、ましになるじゃないの？ 冗句とかじやなくて…」

彼女がここまで冗談が好きな人とは思わなかった。冗句を口に出して、これは冗談ですって、表現の仕方が何とも素敵。

「まず、体を弄るなんて怖くて出来ないから遠慮しておくよ、心遣いは何とも思えないが…」

そろそろ、眼前に森が見えてきた。森の中は危険がいっぱいだから、先に云っておく。虫や害虫が最も強敵です。

「森が見えてきたわね… あ、云わなくても解るわよ。」

古見子さん、空気呼んでよ。此処は頂でしょ。

「此処からが本調子だ。まだまだ、旅は始まったばかりだ」

足にたこが出来そうなほど歩いて、何を云っている？ 俺は、戯言を話したただけだ、何もいっていない。

「威勢が良いわね。若いって、頂云う言葉も口外出来て良いわよね」

古見子さんも十分若いと思うが、必要以上に遠慮しているのかな？

「森と野原の境目で、休憩しようか。」

ちよつと、此処まで無理していたから、休むのも大切ですよと云わんばかりに、僕から提案した。

『もたもたしてられない』あの言葉は何処へ行ってしまったのだろうか…

「良い案ね。見直したわ。カタニカナグ君」

肩に金具、日本人だとあり得る名前だ。カタニ、カナグ。いいね、この呼び名もいいね。

「それ気に要った。次からカナグとか、カタニとか言ってよ。」

コトシラ、不細工な名前だと大昔に、ずっと思っ、考えないようになしていたがその抑止力も臨界点を突破したらしい。

名前に飽きた。

誰か、出来るであれば、変えてほしい。

ポロツと発言も侮れないな。

「いやだわ、コトシラと呼ばして…」

否を申した。

「そうか…そうは残念だ。…なら、俺が古見子さんの事、カタニと言っていていい？」

名前は大切だ。自分の愚かさを教えられた。古見子さんやっぱスゲ

！。

「だめ」

「なら、敬意と自尊をはらんで、コミさん」

一瞬の拙劣。コミとか言ってしまいそうだった。

「ゴミにしか聞こえないわ。けど、悪くはない…」

コミコミパーティーだ。森と野原の境目でコミコミパーティーをしよう！

「折角だし、森野原の狭間でパーティーでもしようか？」

計二人のパーティー。絶対に盛り上がり欠ける素晴らしい会合になりそうだ。

「パーティーは良いわね。そうと決まれば、森野原の境界まで駆けつこてのはどう？子供臭くて良いと思うわよ」

く、企画案を先取りされた。屈辱的だが全然悔しくないのは、完成度の高さの点がアレだからか？

「良いぜ。受けて立って魅せようか」

正直、大剣が邪魔で走れません。

「なら、号砲はあなたが担当ね。後ハンデとして、遅く走って観せるわ」

どっちもどっちか、勝ち負けなんて自己満足か自己満足か自己満足でしか満たされないし、勝負自体気休めな子供じみた遊びの方がよっぽど増した。

「満足のいく勝負には成らないと思うけど、全力を尽くすよ」

たわごとだぜ。全力は出すけど。

「早く始めなさいよ」

解ったよ。全く穏やかなのかセツカチなのか、困惑させる口調に成ったりするから、困る。

「いくぜ、よーい…」

両者、決めの良いスターティングポーズを撮る。

次回

森野原の狭間で  
パーティー

「始め！」

森野原って、地名ではないと思うけど？

コトシラは、ちょうど良い所に放置された岩に、腰を下ろして、一休みしている。

古見子さんと言うと、どこかへ消えてしまったようだ。此処には居ない。

まあ、考えて見た所で何かが手にはいるわけでもないし、彼女は初めから居なかったことにしよう…。

日も暮れ始め、寒くなってきた。寒いんじゃない、肌寒いと自負の念を押した方が良さな。

：

平原の彼方には、小高い山とふもとの村々が微かに、黄昏の風を仄かに醸し出す。

奥には、暮れなずむ夕日色の太陽が眼に映る。

眼球が溶けそうだ。

何時もの今日が訪れていたのなら、おれは此処には、腰掛けて居ないことになる。

： 椅子の上に座っていたはずだ。

きつぱりと定められた掟を破ったのだから、こうなるのも当然。生きている内に、この岩肌を売れることも出来やしなかったかもしれない。



次の瞬間には、明日なんて無くなるかもしれない。何時もと違い、新たな世界観。

世界中を旅して、あの街に無事に戻ってこれるとも限らないし、地球を一直線に進み、元居た街に帰って来るとも、可能かどうか分からない。

知らないし解らないことだらけだ。

どういった理由で、生きなくては成らないのか、どの場合で死んだらいいのか…

考えは、有頂天屁と誘ってくれそうだ。

「あれ？何か、考え事でもなさっていたのかしら？コトシラ君…」

クールに冷めた描写で、オレが岩に座り考えているであろう、その生きた彫刻を意識しているそれに、古見子さんが語語を飛ばす。

語語とは、所謂言葉だ。

そこまで難しい顔をしていたつもりではないが、何かを考えていたと察し、されてしまったようだ。

「考えていた？、ああ、考えていたさ。…今日は野宿か！ヤッターとか考えていたさ」

率直に野宿が頭を取り囲む。此处は、潔く野宿で決まりだ。テントも在るし、寝袋だって完全所持しているし、文句のない備えだ。

風呂が入りたかったが、携帯便所も携帯風呂も開発されていない。時世だ、文句は言えない。

「野宿とは、大変選び難い選択肢ね…何処かに、平民用の宿泊施設でもあつたら、話は別だけど…」

そんなまで都合良く宿が分布している世界ではないだろ。旅路の道のりは、デートのように甘くはない。

「この近辺に、異端錬金術式使いや魔女が住んでいるって、地図帳に乗っていたけど…」

おれは、自分の口の利口さに驚かされる。思いも寄らぬ言葉を時々、口にしたりするがこんな時だけ役に立ってくる口も、悪くはない。

そういつて、野宿だ野宿と、わめいていたおれも冷静に、地図帳をリュックから取り出す。

「魔女とか…私、ちょっと苦手なんだけど…」

魔女とは、延命や美肌の代価として、若い女性の生き血を啜り採ったりするらしい。

おれには、関係ない話だ。

「それを云うのなら、おれだって完全に異端錬金術式使いもご遠慮させていたきたい所だぜ」

異端錬金術とは、若い男性の体をいじったり解体したりして、楽し

む輩。女性には手を出せない男性の群れが殆どらしい。

チキンな奴らだぜ。

「あつた。へー結構近くにあるじゃん。」

とか何とか、だべっている内に、地図帳は一つの屋敷を示していた。

「地図帳に載るほど有名な場所なのね。魔女だったり、異端錬金術式使いだったが住むアジトって…」

秘密基地を隠したからない連中だったりするのだろうか…

まるで子供だな。おれも混ざりたい…

そんな場合ではない。もう薄暗くて、文字や絵図が確認に出来なくなってきた。早めに、観ないと、今度は電灯探すのに時間がかかる。

コトシラは、双方の眼球を凝らして、正確な現在位置と、その近辺に在るといふ屋敷との座標を頭にたたき込む。

…

「どう？そこに行けそう？」

古見子さんが執念深く地図帳を見つめていたオレに訊く。

「嗚呼、どうにか、場所だけは覚えたが…本当に行くの？」

ふーと、一息ついて、喋り出すおれ。位置関係はほぼ確認はとれた

が肝心の屋敷の名が読めなかった。

なんだか複雑に造成された字が見て取れたが薄暗い上、印刷がうまくいっていなかた為、読めなかった。

「私的に述べれば、まだ、危険をかえりみず暖かい布団にくるまる方が良いわ」

彼女らしい判断。訊くまでもなくそう、答えるであろうは思っていたが。

おれもその意見に、否を配ることはないな。

「大丈夫。おれが守ってやるよ。」

おれが言つと天地が逆転しそうなくらい上辺ばかりな発言。

彼女は、

「…、ありがとう、嬉しいわ。」

彼女も心が詰まっていない空疎な言霊。

「兎に角、とりあえず、決まりつて事で先に進もう。」

喋ることは、歩行中にでも幾度となく話せる。まずは、今すぐ、この場から動くことが重要。

ガササー

重剣が地響きを立てる。それ程大きな音ではないのはやぶさかだが…

「そう言えば、今日、試験じゃなかったかしら？」

その通り、試験日だ。今日を境に試験だったに変わる。

「何を今更、云っているのだい？おれたちは試験日をすっぱかしてここまで来たんじゃないか」

おれたちではなく、おれは、だ。

「…だって、本当に良かったの？って答えたら、考え込みそうじゃない。だから、今からでも引き返せる話をしたいの…」

？全く話が読めない。彼女は僕の心の強さでも、測ろうとしているのか？。

なら、オレはハッキリ弱いですって答えきれるけど？

「コトシラ君は、過去に戻ってやり直したりしたい？」

展開が狂おしいが、彼女の特技と言う事にしておくか。

「過去なんて安っぽい舞台に立とうとは思わない。だって、ゲームが旧式だもん」

過去は省みない。過ちなんて、観たくもないし変えようとも思わない。

「…ごめんなさい」

いきなり唐突に何だ?!

一体、おれに何を求めている!。

「いきなり謝って、何だよ。軽く意味が分からない。」

理由は何だろう…

もう辺りも真っ暗で、彼女の顔も見えないがし、どういった表情をしているのかもわかりやしない。

ちなみに、今向かう屋敷の場所は解る。

超方向探知九百四十七点のこのおれがなせる技だ。

「私、あなたをゲーム世界に送り込んだの」

若干驚いた。

「え、…」

「私、昔っから、人を別世界や異世界に飛ばすことが出来るの…」

衝撃発言だろうが、全く持って違和感がない。これは俺が麻痺しているからなのか?

「ちょっと、待ってくれよ。…その、人を送る力に関しては偏見は無いが、どうして、俺をゲーム世界へ送ったんだ?。それが唯一の疑問だ」

正直に訊きたい。その理由。

「云って良いのかしら?…」

「ああ、云って良いとも、遠慮なくどうぞ」

真っ暗で見えないと思うが、優先者を譲るようなジェスチャーをしている。

次の言葉を待っていたかの様に…

「あなたの、コトシラ君の愛を確かめるために…やりしました。」

次回

屋敷な宿主

なんだ、そんな理由か。

他人の深層心理を見切るのは、人だと理解されない点があるからな。けれどもそんなこんなこの会話を何とか変える十分必要があるな、まあ、彼女も勇気を出して口に出した衝動発言だろう。

ここは、次に言葉に時間を駆けたりするのは、厳禁だ。空気は淀んで、窒息死ではい、終了。

その時点で消滅しそうだ。

大丈夫、おれはちゃんと人並みに好意を抱いているつもりだぜ。って言う事で、

「暗くなってきたし、先を急ごうか」

何事も、起きなかった様にのうのうと、そして如何にも、堂々と話を変えた。

「あ、その件なんだけど、話が逆変換する…私はなんと答えればいいの？『わかったわ』とか答えればいいの？」

そうだな、何か不自然すぎて、言葉と感情転換の辻褄が統合しないような気がするな。

着目する答えは、

「ああ、なら、取り敢えず、『あら、話を変えやがったわ』でも、言えば大概は当たりじゃ…ないか？」



もう、語彙不足だ遣ってられない…

「あら、話を変えやがったわ　それでは、屋敷へ参りましょ…」

此処でおれはこう答えることにしたよ。

「そうだ、行こう!」

私とコトシラは、暗闇で何も観得ない森を駆け巡る。

私たちの眼には、何かを表す光りすらない。深くとても深く、暗黙は何処までも続く。彼は、迷子には成らない…そんな力を持っているから、

私は迷ってしまう。目印さえも簡単に送ってしまうから…

足音だけが一番の光、それを追えば、目には見えなくても、出口は見つかる。

そんな気がした…

コトシラと古見子さんは、徒歩と言う名の健全な移動手段で、屋敷へと足を運んだ。

その目に映る限り、屋敷と名指しされることだけはある立派な建造物だった。

壺にそれはそれは、とても豪華な恍惚物の施しようの良い、美しい修飾品の数々が散りばめられた…

まるで、クリスマスパーティーだった。

折角の飾りで『屋敷』が虚しく聞こえる。

「ね、コトシラ君、立て掛けの様な看板が横たわっているけど、突っ込まなくても良いのよね？」

彼女が云う。指をさり気なく向けるが、観るも無惨な木版が泥をかぶって、地に朽ちていた。

「一応、この屋敷昔は観光地みたいなものだったんじゃないのかな？（ペラペラ）ほら、この地図帳、十三年前の物だし、誰も住んでなかったみたい」

勇者か、英雄…どちらかの救世主の本宅だったとかだろう。

今は、腐敗な奴らのアジトとは、皮肉も休み休み、動き動きするもんだ。

「確かめるくらいの好奇心を窺めたら？この屋敷の名くらいは覚えておかないと…色々」と

念を押す。

万が一を云いたいのだろうか？

まあ、この屋敷にお泊まりするんだし、寂れた勇者のお家の名前くらいは覚えておくとするか…。

地図帳には、旧漢字で丁寧に書いているものの読めないものは、読めないのである。

「別に、子供並みの探索意欲が在るわけではないが礼儀として、文化指定財産疑惑な建造物名を確かめるだけのことだ。しつこく言えば、それ以上でも、それ以下でもない、

ぜ」

他言畑。

コトシラはそう言つと、のこのこ木版に近寄つた。  
まるで、子供のような邪気のない振る舞いで…

「齟齬家」

齟齬とは、壊れた歯車。

それは、思っていたよりも、出来すぎた文字だった。

「え、ごめんなさい。よく聞こえなかったわ」

少し離れた場所から古見子さんが尋ね掛ける。

「ソゴケだって、土まみれで正確ではないけど、齟齬家で当たっている。」

何か、言い返すのだろうか…

「カエルみたいな、語呂ね。下手に口にしたくなうわ」

低評価だった。字にしたら微妙に格好いいけど、やはり、昔の人のセンスは現代人には分からない暗黙があるだろう。

カエルみたいは俺も思ったが事実。

「これでキーワードは回収したし、そろそろ、訪問してみるか…」

此処からが本番だ。すっかり忘れていた、家の中の人は、…予想がつきそうだ。

変な奴か、不自然すぎるほど普通の人か、二分の一で、人数も、複数か、少数のどっちかだ。

おれと古見子さんは、横二列になって、屋敷入り口へと続く石畳状の道しるべを歩く。

カタ、カタ

がく、カタ

踏み所によっては、不安定で危なっかしい踏み石もあるようだ。

「足下気をつけてください、古見子さん」

紳士な振る舞いだ。気持ち悪だけだが…

「心配しなくても、私が転ぶ必然性は無いわ。」

身体能力に美徳化した彼女ならではの発言だ、説得力に力がある。

ガガー

ガラ　ガラ

重剣引きずっている事柄が此处では、耳障りな効果音しかない。

この不協和音を聞いて、ヤッパ、古見子さんの美しさには勝てないな、と自負を負担した。

「なんか、耳障りな音出してごめん。」

謝って、すまされる雑音ではないのは承知だ。けど、背中にリュック、右手にテントを所持した状態で重みのある武器を持ち上げるなんて、おれには出来ない。  
ひ弱すぎてごめんなさいだ。

「そんなの気にする余地すらないわ。嫌なら、私が預かるうかしら？」

言うまでもなく。彼女も荷物で両手いっぱいのような気がするのだが、どこにどう預かるのか知りたいところだ。

「いや、気持ちだけで十分ですよ。気にしていないのなら、このままで良いですか？」

口の中に、収納するとか言い始めたら困る。

「いいわよ」

ガガー

ガガー

ガガー

コトシラ一行は、やけに長い、石畳歩道を歩き、入り口付近まで辿り付いた。

佇む彼らは、

「これって、ノックすべきなのか、ベルマークを押せばいいのか、判

断しかねるから、古見子さんお願いします。」

おれはちゃんと、女性を優先すべきだと、差にを譲る。

「生憎、私もこういうのは初めてなので…ベルを押させていただきます…」

何食わぬ無表情で、ベル可動ボタンを指圧する古見子さん。

ベルル―

べん

屋敷中に音が鳴り響く。

少し緊張するのは、生理的になものなのだろうか？

ドキドキ、安堵ワクワク。

新キャラ登場の期待感が体中の血流を経由して流れる。

「珍しいな、こんな日に客人なん…」

ドアの向こうから、声が聞こえた。

ん、何か引つかかる。

聴いた事のある声質だ…。

ガチャン

キー―

「こんにちは、そしてあなた達は、何方がたでしょうか？」

正しい日本語を使えよ。

現れたのは、絶妙に親近感のあるそいだった。

「こちらこそ、お前誰だよ」

言葉選んで、正しく使ったおれ。

「あなた、コトシラ君の知り合いですか？」

妙に親近感のあるオレらを観て、古見子さんが訪ねた。

「まさか」そんなはずありませんよ」

次回

物静かで穏やかな人

読みづらい言葉を連ねているわけではない。これが全力だから、仕方ないだけな話だからだ。

意味気ままに、語らしてもらってるとって意味合いだ。  
これはそんな物語の断片的解釈から成り立つ。

「何処かで会いましたか？」

軽く爽やかな青年がおれらの前に、存在感を揺るがしていた。  
何処か見覚えがある、ルックス：頭の何処かでは、何かブレて刻まれているような気がして成らない。

青年は、本格的に大きな扉に背中を預け、もたれ掛かっている。

「何処かで会っては、いるとは思うが、他の話がしたい。」

家主とか、家族とか、組織絡みの人達とか、そう言った奴らと話  
したい。お前じゃ、話もマトモにまかり通らん。

初めに、誰ですか？とか、人物名聞き出すところから、意味が分  
からないし。

「どうやら、検討外だったようね…友達などの間柄なら…」

何かの挨拶だと思っていたのだろうか？  
おれらの野郎のやり取りを観て、そう思ったとか？



…それは、見当外だ。

「話は、要するに、家が火事でなくなった。安らぎの空間が無くなってしまつては、手段を選べなかつたってわけだ。」

遠回りにも程がある。

つまり、『泊めておくれよ』とすぐるような言い回しだと思つてくれ。

「はあ、成る程。それで試験も放り出すってわけか…」

青年は、語る。

「ん？、シケン？」

しつかり、聞き取つてはいたが聞き取れなかつたフリをした。

「まあ、玄関口は寒いですし、中へどうぞ」

青年は、言わばパジャマ姿でお出迎えだったらしく、勿論、陰湿な気分誘われる。妙にム力つくつて言いますか…その辺りだ。

「優しくはない。振る舞い方ね…」

腹黒い嫌な感じしかないその電磁波を彼女も察していたらしい。流石イトコ。

無駄に、血縁からよく似ている。

「好感度は、不評のようですね。当たり前ですけど、ははは」

笑いがまるで声優だ。違和感なさすぎて逆に違和感って、こんな時に使われるんだな…

何処まで、納得の行かない人種だぜ。

日本語で回りくどくてまどろっこしいだ。

青年の言うままに、屋敷内に足を踏み入れるが、内部は予想が着くほど富貴に充ちている。

ゆとりと充実した家具、あと、ちらつと見えたが箱型PCは中々、不様。

画面を木っ端みじんと叩き割って、粗大ゴミ誘ってやろうかと思った。

「結構、典型的で笑っちゃいますよね、はは」

庶民に対する冒涇だが、別に裕福だから等って羨んでいると言った、感情は混み上がらない。だって、そこに愛情といった上等品が含まれていからな。

ま、おれも付属してはいない感情の一つではあるが…

「こんなの形だけですよ…」

青年は後に紡いだ。

「とてもじゃないけど、素敵なことを言うのね。中身は空だけ…」

言ってくれた、おれの言葉でもあるそれを…。もういっそ、兄弟で

もいいんじゃないか？

「古見子さん、彼には、殿方とかつてよ。あくまでこれは助言のつもり…」

名前を晒さない。青年に対しての皮肉たっぷりなだね。

テクテク

青年一行は、広さがイイカゲンなりビングホールに連れてきた。今、視察した限り、青年はこの屋敷に一人しかいないらしい。物静かだ。

「此処で寛いでくれると光荣です。」

青年は、あまり騒がないで大人しくしててください。と述べた。

脳内変換もお手の物さ。

「暴れてやろうかしら…」

荷物等は、部屋の隅に置いた。おれが通った通路は、引きずった大剣の跡でスタボロだ。ざまーみる。

このリビングも、『一般者』と隔離された専用室何だろう？バーカバーカ。

さて、反抗的態度は止す事にしよう。此処まで迷惑掛けて頂けているのに、…失礼も有ったもんじゃない。

「君たちは、夕食とか、んーと、その、済ましたか？」

青年は訪ねる。よく見れば、同い年にも見える。

「いいえ、町外れの田舎から此処まで何も口にしていませんわ…」

彼女なりの返答。おれは口を動かすのが疲れるため、いことに任す。ゲームは出来るのにな…。

「それはそれは、田舎街から…大変立ったでしょうに…」

リビング付属のキッチンで何か作業をしている青年。

どうやら、何かの仕込みをしているらしい…

「何なら、自分の作る、食べ物でも召し上がりますでしょうか？」

正直、腹が減って疲れているため、胃袋に詰めれば何でも良しなのだが…

「うん、そうしてくれ。…青年、ゲーム遣って良いか？」

おれは、ダルそうな身のこなして振り向きざまに、テレビの下に綺麗に完備された遊具機に指を指す。

「勿論、良いですけど、自分の事は、『端袈居』と呼んでください。昔っから、この呼び名じゃ、ないと反応出来ない身体なので…」

呼び方は、タンサイだそうだ。

一つ間違えれば、天才に聞こえるが間違いなしに聞いたら、短才でほぼ逆な意味合いになったやうな。可哀想だ…

「タンサイ、私にも手伝わせてくれるかしら？」

良い判断だとは思うよ。五ポイント挙げるよ古見子さん。  
スキルアップも大切だしね。

おれは、その間ゲーム遣って、くたばって置くからさ。

ああ、項云うのを修行って言ったりするんじゃないかな？俺は、思わないけど…

「良いですけど、自分の料理は…物凄く危険ですよ？お湯で凍傷で  
する勢いですよ？ハハハ」

心配するだけだと思われるのだが…彼女に危険は、足しても無  
害無傷の結果に終わるだけだし…

「大丈夫、とでも前倒して置こうかしら？、物理的な危険は大丈夫  
です」

まず、何作るのが気になるんだけど、食べ物何だろうな？タンサイ  
さん？

「そうかそうか、いいね、なら今日は、ピザカレーでも作ろうかつ  
！」

定番色彩の怪しげな名が飛んできおる。この調子なら、心配なのか…

「ピザカレー…え？！、それって食べ物なの！？それとも、食生活  
におけるヘルシー食品！？とか、言っちゃいたい…わ」

テンション高いなー、テレビ画面越しからでも、彼の姿が想像着かないわ…

コトシラは、さめた感情を研ぎ澄まし、精神だけをゲーム世界に放置してきた。

彼の手を止めることは、不可能に等しい。

操作音鳴り響くりビング。ソファアとテーブルとテレビを反響させ、バックで料理をたしなんでいる二人…

和むな…一生このままで居たい気分だ。

ぞっと…もしくは、おれが死ぬまでこのままで居たい…

「ピザは、まず生地をこう延ばすんだ。」

「こう…?」

「そうそう、お、上手だね。いい感じだ」

穏やかな日常感ある会話だ。癒されそうだ。  
端装居は、良い奴かもしれないと思った。

「あ、それと…コトシラさんだっけ？襦袢破壊試験合格おめでとう  
…」

ん？

次回



全部おれの妄想でしか、動いていないよね？こんなんで本当に大丈夫なの？…考えないことにしよう。

独りつきりとか、独り言とか、こつした感情論から成り立ったりするのかな？

「自分、タンサイっす。」

タンサイは、オーブンの棒状の取っ手に手を置き、内部に潜伏し加熱された円盤状の食べ物を取り出す準備をした。

様な気がしたのか、…目線は液晶モニタなので自信はない。

「味付けは良好ね。…少しコクが足りない気がするけど…」

一方、古見子さんの方だって、銀色に光沢が観られる容器の中身を警備している。

難易度イーマイナスのミッションって感じがする。

いわゆる、ランク化と評価別に認識。

…これもまた、背後で行われているため、想像範疇。

「…タンサイさん、絶対何処かで会いましたよね？覚えていません



か？」

さっき、すっ飛ばしていた事柄を今、振るおれ。

「…其れは多分アレだ…筆記試験の急に、席を飛び出したお人だ。」

黄金の香りと円盤の匂いが、室内いっぱいに立ち籠もる。  
は、

どうでも良いので、訂正を試みる事にした。

「いや、それは違うと思います。現にその人、おれの目の前で本当の意味で消えたから…」

シイクさんでしたよね？困惑と混乱と堂々と消えた人…

「本当の意味？…ですか…なら喰われたのでしょいうね。あなたも気をつけた方が良いでしょう？コトシラさん」

古見子さんの気配が感じないのは流石と言える…ちよつと寂しいけど。

「喰われる？何処ぞの神が定めたルールだ？それは？」

話が入れ替わるのも少くはないが、この件は変えざるを得ない情報だ。

「コトシラさんは賢い人柄みただから感づいて、此処まで逃げてきたのだと思うたのですが…違いましたか？」

初耳も此処も来ると産地直送の新鮮感しかないな。

「つまり具体的に言ってどう言うこと？それって、試験と何か絡んでいるのか？」

やっと思い出した。こいつ、筆記試験の鉛筆を回収しにきた物静かで穏やかな人だ。

雰囲気が全然別物だから、気づかなかったけど、家だけとか、少数だけとかの条件を満たしたときに発動する二枚目みたいなものだろう。

「絡んでいるも何も、これは自由と養分とを分ける分岐試験だからね。落ちるか、逃げ出すかしてみたら、神の養分組入りだからね。気をつけて、…何て気休めにも成らないね。必ず消される」

なんてこった！

そんな間抜けなことをほざけたら、どれだけ嬉しいか…

呆れて逆に言いそうだ…

大体、神なんて居るの？って、定理がまだ解明されていないだけでしょ。

神イコール何らかの自然現象なんだし、

「洗いざらいに、喰らっているのだとしたら、神は小太りしたおっさんだろ？」

フライドポテト感覚でパクパクしているだけだろ。怖くはねーよ」

宗教じみた教師等も義務教育も、神に恐れを成して、出来上がっちゃった習わしだったのか…

つくづく思いやれるとは、よく言っただもんだ。

「神に敬意を払いべきですね。早くも食べられますよ?」

いつの間にか、液晶テレビの前には、ピザカレーと些細な菜たちが群を成していた。

何処で食べようが一緒に趣向主義者で助かる…おれは、いつもの様に足の指先でゲームに没頭するだけ、後は何も要らない。

「神というのは、不適切だ。欲望まみれの奇人と言うべきだ。」

病気染みた、テクニクでコントローラーをコントロールする。

「あのちよつと良いかしら?先ほどから、話を聞いていたのですけど、神って何?」

古見子さん其れはないんじゃないかな?

あからさますぎはしないか?

「ごめんな、古見子さん僕達だけで述べまくって、…大丈夫だよ。ちゃんと、古見子ちゃんはいいい声してるって…」

フォローでしたか?こう言うの…

確かに、この青年だけとだべったり、話したりするのは、気が滅入りますよね。

「こんな意味を交えて言った訳ではないけど、正直の所寂しかったのは事実ね…」

個人的に薄い人だから仕方ない…けど、放置は良くないのは解った。これは、俺が今まで生きてきた中で授業よりも為になる知識だな。

「自分もわりと神神言っていたけど、結局、神なんてゴミでしょ  
よ、ハハハ」

ヤベ、カレーがうまく感じた。

良くできたカレーだ。何？この旨さ。

まるで、神がかっている。

旨すぎて鼻血が出そうだ。

こんな時だけ、生まれてきて良かったと思える自分に、涙が溢れて  
きそうだ。

「千変万化に、いきなりどうしましたか？コトシラさん」

生々しい涙を拭うおれに、小馬鹿にした態度でタンサイが話しかけ  
てくれる。

「こんな時って、目から鼻水が出てるって言った方が良いの？もし  
くは、目の水溜まりダムが決壊したの？どうして、って答えるべき  
？」

おれは感動のあまり、隣に座る古見子さんに…

「両方さ！。」

爽やかに、左手を肩に回す。

この友情は、愛在る印とか言いそうな珍妙な光景。

「ちょ、辞めなさいよ！とか、行いちゃいたい…わ」

確かにこの好意は、デリカシーに欠けるな…良しやめよう。

オレは、あくまで紳士で居たいのだ。

「中が良いですね。観てるとぶち壊したいな」と思ったりしますよ。」

喜劇な事を言うなこの人も…

「君たちを観ている…何だか、イイなこういうのもって思いますね…」

寂しげな面持ちに変貌。何か言った方が良いのかというと、意外と言えない雰囲気<sup>きふき</sup>が身を取り囲む。

「少し昔話をしようか…」

黙りこくった僕たちを観て、深刻な威圧感を放ち話をしだす。

俺の足もだんまり。ゲームは一時停止だ。カレーは本当に旨い。ピザもおいしい。

「この屋敷は、昔、魔女が居たんだよ。ずうっと、前にね。」

昔話ではなく都市ですって落ちたろ。

「魔女は一人。孤独に静かに過ごしていましたそうだ。」

童話の域だな。

「そこに人の少年が迷い出来たんだと、その少年は、死にかけ…恐らく各街を行き来する馬車などの人達が

乗るそれに、化け物が手を出し、はぐれ離れの死に損ないだったの  
であろうな。」

生きていても仕方ない…か。

「魔女は少年を助けた。看病に徹した。  
少年は回復。さらに元気に成長する。

魔女はというと、何だかんだで養っていたようだ。」

ここまでは、よくありそうだな。

「すると、少年が立派な魔導流行刀刃師に成ったのだよ。魔女と人  
間のなせる技さ。」

魔法と武術を兼ね備えるか…

「その青年は、魔女にこんな事を言った、『僕は、人だからあなた  
の為に、何か恩を返したい…けど、その前に人間としての役目を果  
たしたい』と、そう言い残し、不老不死とも言える魔女を葬った。」

何処まで、人種の壁は越えられない物が在るのか…

人種では無いな。家畜と所有者。

「その後、その青年は世界中の魔女を殺し回ったとさ。…」

「あなたは…その青年なの？」

と、

古見子は言った。

次回  
魔導流  
行刀刃師

過度の笑いを取ろうとし過ぎて可笑しくなったのか？  
いや、現実味が在りすぎて、逆に嘘にしか聞こえないな。

コトシラは、彼の話信じようとはしなかった。

「嘘か誠かなんて、証拠は何処にある？と訊いてみたら、お前は迷わず証拠は無いと言ってくれるんだろ？」

夕食会も、終わりを迎えていた。明日からは、また今日のように当てもなく歩き出す旅になるのだ。今日はゆっくり休みたい。

「え？、昔話に証拠なんて要ります？自分はただ、そんな事もあつたな…と慈しんで居ただけですよ」

とタンサイ。

「ああ、はいはい、解つたよ。お前はただ、そんな事もあつたを長々と語っていらつしゃればいい。おれには関係ない話だ。」

よしまあ、食器の片づけくらいはおれ一人で遣つておきたいな。今此処で一番策に立ってなかった事の成り行き立ったから…。

「んじゃ、おれ、先に食べたやつたから、磁器でも洗つとくよ」

コトシラはノコノコ、食器を洗い始める。

「…頼んだよ。コトシラ」



馴れ馴れしくタンサイは、綺麗に食べた食器を手渡す。

「手伝ってもイイかしら？」

横から古見子が親切に言うが俺は断った。

「気持ちは有り難いぜ。けど、此処はおれ一人に遣らせてよ。立場的なもので…」

敢えて引き受けさせない。なあに、独りで皿やお皿を黄昏で洗うのも悪くないもんだろ。

「でも…効率面なんかを考えてみても、私と二人で洗い始めた方が…」

気持ちを受け取るだけでも、こんなに困難なモノなのか？…

「いや、効率面よりも今は、お前が十分休んで居ただけで嬉しいですよ、だからね、おれは一人で洗う。」

思うまま口にしたけど、これで良かったのか、後々になって後悔するのかな？

「…そう」

残念そうな顔は、おれにとっても辛いものかもしれない。彼女の一番の敵は、おれかもしれない。

とここに、タンサイの所へ在るいく古見子。

「入浴室は何処に在るのか…解説してくれるかしら？」

タンサイは親切に教えてくれた。

次の日。

本当に裕福すぎて、腹が立つ一歩前まで誘われた。

コトシラは、ふかふかベッドで心底熟睡してしまったことに、憤りと怒りなどの感情的なモノしかこみ上げきれなかった。

止まるべきではない。よし、次から野宿だ。と宣言した。

「本当昨日は、ありがとうじゃあ、元気に独りこの屋敷で居座りな」

コトシラ、一生孤独そうなこの人に、憎たらしい言語を送る。

「嫌なこと言わないでくださいよ。自分だって、そうならないように努力してきたんだから」

古見子さんと言うと…

「ま、みんなで仲良くリビングで寝たからいいんじゃないかしら？」

そう言う話だ。

昨日は、寂しげなタンサイの為にゲームパーティーをしたのだ。ベッドとは、何故カリビングに放置されたベッドでよく眠れたって言う妙な話。

「それもそうですね…もし良ければ。いつかきつと、ここに再来することを願っていますよ。」

不思議と今まで、こいつの屋敷に何回も来たような感覚に囚われる言葉…

「お粗末な事を抜かすな。次はあり得ない。昨日は偶然だ。」

偶然にしては、本心違和感が感じられる。必然にしては、露骨すぎる。

ちよつと、中立を保って居るのか？

…凄い。奴だ。

「今日会ったことは、忘れた方が良いでしょうね。お互いのために…」

屋敷の門前まで見送り、最後にイチゴン言い放つ。

「では、またきつと、どこかで」

最後は最後らしく。さようならも言わなかった。

「ねえ、コトシラ君、今、目に見えるこの不思議な光景をみて驚いたりする？」

する訳ではない…。しかしと、言を並べればいいのか、目に映るのは昨日とは似ても似付かわしい風景。絵画の様だ…

コトシラ等の眼前に、広がるのは、先ほど居た屋敷。

立ち位置は、昨日初めてこの建築物をみた門の前。  
横には、ちゃんとした、木板が張り付けてある。

「門をくぐって、時間移動したのか？」

現在位置の確認と時間的認識の確認を照らし合わせれば、その結果にたどり着くのは、妥当。

「そんな事在るわけ無いわ。幻よ。」

あり得ないは、幻に繋がる…違う。

「幻で片づけて、この状況を打破するとは思えない」

こんな時だけ冷静なのは、矢張りまだまだ人生経験語り無いからなのか？

「嘘よ。彼にまんまとハメられた線とかがまだ良いわね…それはどう？」

いきなり、こんな面白みに荷送り込む欠ける場所に送り込む彼の神経がどうかしてるだろ？

「面白くも何ともないから彼の仕業ではないと思う。」

うなだれる。うなだれる。

「…逆発想して、最初から全部が幻だったとかは？これは俺の意見」  
バカンスな気分で、探検していかがおうか…

「そうね…その方がハラヲくくれるし、…、ハハハ、探検なんかより面白く遣りそうな気がしますわね」

狂気が芽生え始めたな。カテゴリーどんどん増えていきそうだ…怖いな。

「めっちゃくちゃ言ってくれる…怖いな、古見子さん」

あ、この人が根源的だったりして、人様を勝手にどこか知らない所に飛ばせる厄介な人だしもしかしたらの案も立てるべきだ。

「怖くなんかないわよ。怖いのはこの状況下…」

訊いて観るに一票。

「もしかして、古見子さんが遣ったとかじゃないの？能力とかで…」  
その通り、で一件落着、ハズレでフリダシ。

「言っておくけど、送ることは出来ても遡ったり、反遡ったりは出来ないモノなのよ。」

時間移動不可、その前に、そこまで何なりと時間軸を微調整できるモノなのか、疑問が迸る所何だが…

「よし、分かった。これは夢だ。俺達は同時に悪い夢を見ている！」

人の夢と書いて、悪夢と読むのは、悪いことか？…いや、悪くない。

「生半可の気持ちで夢と語ってしまったら、文字通り夢も身も希望も蓋も無いんじゃないの？」

冗談のつもりだが、やっぱり古見子さんの最初からこうだったに違いないの案が正しいのかも…

「すみません。惚けたつもりで話してのです。すみません」

此処に一つ名言を納める。いつからこうだったのかな…きっと、最初からこうだったに違いない。

「前例がないのよね。人生経験上…ずっと送る側だったし、私」

送られる側も大変だろうな。と思うのはおれだけか？

「ま、この方がずっと、楽しい旅になるんじゃないか？一世代前が生存率低かったし、『イイ旅になりそうだ』の名言もいえるし…」

「そうね…」

始まりは、此処から…

次回

竜毛飛び

龍毛翔ル



築き上げた創造主は、齟齬く好い加減な奴だと打ちのめされる…

「ざっと当てつけて、四万年前の拝辞時代だろうな…」

拝辞時代とは、オレらのずっと昔の先祖に当たる彼らが、まだまだ、優れた英知を蓄えていなかった物理の世界だ。

この時代から、魔術師がちょこちょこ現れる様になったと歴史書に載っていた。

「軽く見積もっても、この屋敷だけは魔力がぶんぶんするわね…一般人が近づかないのも解る。わ」

昔は、物理で人が動いていたからな…感情の具現化なんて、幽霊を観るようなもの…だったのだろう。

幽体かも可能になったおれらの時代が化け物だから、何も怖がりきれないけどね…

人って恐ろしいよ本当。

「とりあえず、街に出たいな、拝辞時の鉄筋コンクリート製の町並みが観てみたいし、森林伐採でこの近くにもやたらと住居があるだろうしね…」

進むべき方向は、変わらない。何だか、四万年前の世界だって東西南北が変わらぬ位置に在る所が定着感があって良いな。



提案される意見に異論を述べる古見子さん。

「でもそれじゃあ、狩人ブームに乗っ取った私達の衣装が浮いて見えたりしない？」

確かに…オールジャージ姿の古見子とはかく、軽く武装したおれは、かなり危うい…両手に腕時計なんかちゃってるし、なんといつても、この左手に携えている重量感有り気な大剣が今後の物語を物語っている。

「…心配ないさ。この時代の人達は、偏見や偏執な眼は向けないよ。なんせ、論理的思想ではもう自治や治安がままならない処まで来ているからさ」

正直な話、この時代は個人的に好ましいジャンルが存在していた風習が在ったため、色々、調べていた様な気がした。

「愛がなせる業とか？そう言ったものかしら？」

その通りかな。まあ、要は人の深さかな…

「良い話ね…話変わるけど、簡単に過去と接したりしていいの？属に言われる過去改変乱用罪で時空警察にご用なったりしないの？」

古見子さん、しっかりしてくださいよ。ネタが旧すぎて、…イニシエ過ぎて突っ込みも使用出来ない。

「え、おれ、現代人っす。って言えば、問題無いだろ？所詮、時空警察だぞ？」

正論をぶちまけた。帰る余地は無い。  
進むだけだ。前に…

「時空警察も嘗められたものね…今となつては、都市伝説も当てにならない御時世から来たものだからね。」

仕方ないと言いたいのだろう。都市伝説イコール情報操作だからな。

「この時代のお巡りさんも拝見したいな、しっかり頑張っているか？などと、敬愛を敬い慕う意味を込めて…」

この装備で行くことにしたコトシラ。

壮大で果てしなく広がった森は、一步步くと、…中途半端にマンシヨンたちが見え隠れする安っぽい境地変貌を遂げていた。

「空気が薄いわ。此処何処なの？」

吐露するのは古見子さんの方、その口語通り、明らかに大自然に囲まれた住民からは、空気味に違和感を覚えるだろうね。

「此処何処は余計だろ？此処は『余白系第五惑星』の『区具星』だから、細かく言つと元我バルト王国郊外。あ、現在の地名は知らないな」

一人独り言を、前方に歩く古見子の長髪に当てる。

「現地の名前を知らないあなたはもうダメね…出直してきなさい」

最初に振ってきたのはお前じゃないか！の名言は期限切れ、言いたくても期限が限定されている為此処はこうでる。

「お前、かわいい奴だな。頭なでて良いかい？」

場の空気の支配者とはよくもまあ言えたものだ。

イトコ、と言うと点ではこれは普通の回避方法と昨日のタンサイは言っていた。

使う日が此処まで迅速とは思わなかったが…

「はいはい、戯言はやめましょう？此処は現実よ？別次元にでも行ってやり直してきなさい」

道は疎らにぐぐだだ。歩き辛いつたりやありやしない。

「あ」

短い声で鳴く古見子さん。

「危ないなー実に危ない」

棒読みで掲げ、体勢を崩して森の柔らかい土に激突する予定の古見子さんの手を引く。

「げ、現実でこんな演出が訪れるとは思わなかったわ…」

状況は最悪、両手塞がって居たため、右手に許容するテントを放り投げての救出のため、テントは泥水たまり不時着した…

等価交換と云うべきか、古見子さんは助かった。

「古見子さんが無事で何よりだよ、テントの犠牲になったんだから……」

テントは自由に空を飛び、そして儚く墜ちた……きっと、テントも幸せだっただろう……

「私よりテントを助けてよ。テントが可哀想……」

古見子さんは、

振り向きテントの安否を観て、衝撃を受けた……

テントは、泥だらけになったただけだ……二度と使えなく成った訳ではないのだ。けれど、そのテントに感傷を許すなんて……

彼女らしいな。

「古見子さん……そんなに落ち込む成って……俺だって、テントのこと考えていなかった訳じゃ何だ。どっちも大切だった……」

イカれ物腰なテントは沈黙と混沌を凌駕している……

それを観て、悶え悲しむ彼女は、観ていられなかった……

「私の所為なのかしら？ きっと私……何の役にも立てない、何も救えない、みんなを苦しめる……そんな存在なの？……私」

言葉を選ばないと、罪悪感で死んでしまいそうだ。

「気にするなよ、お前が悪いわけではない……あれは、結果だよ……俺たちは、最善を尽くした。その事実だけ在れば、彼だって、許し

てくれるさ…お前等やってくれたなって…」

だからきつと、

「古見子さんは、悪くない。」

屈み込む古見子さんに囁いて、俺は無言で泥水たまりに足を入れた。

温い温度が両足に伝わる…

生きていると自然と、立ちくらみがしたり、頭痛がしたりするが、今の俺は何だか…

そんな感じた…

「よつと、」

軽くテントのバックを握り持ち上げる。足元は数十センチの泥で靴の中はカオス状態。その上、頭がクラクラする。

酸素が足りないのか？

「はぁはぁ、古見子さん…大丈夫ですか？」

訪ねると…古見子さんからの返事はない。

「古見子さん？」

うぐ、

クラむ視界に、恐怖感が迸る。  
此处で倒れたら一環の終わり。

どうにかしないと…

「どうにも成らないか…あはは、」

初めっから知っていたよ。

ここは、四万年前。

知っている、解ってはいた。

俺たちが住んでいた世界とは異なり、科学力が優れ、何故か、俺たちの世界だけ科学が進歩しなかったのか…

簡潔回答を呈するならそれは、

それは、

それは、

純正の人間は、一度滅びたがら…

目の前真っ黒だ。

次回

こう繋がるのか…

最初から知っているようなフリをして、振る舞ってた。真相は知らない。

オレらは、微量に不思議な世界でずっと生きていた。それだけ…

「死んでも可笑しくない境遇だったな…生きてる心地がなかった…」

目が覚めたコトシラは、今を観ている。

今は、元居た何時もの世界…

オレたちが放浪していた時代より四万年先の世界だ。

何であそこまで、破壊的な出来事が起きるのか…

全部まとめ、おれの持つこの大剣の所為だ。とでも言ってしまうば、どれだけ楽なんだろうな。

「私…何か喋っていたかしら？」

彼女、古見子も無事でいつもと何ら変わらないはずの口調で訪ねてきた。

「私は必要ない子…的な何かを叫んでいたよ。お前、」

覚えて居る限りの事も伝えるつもりで、重要ポイントだけを抑える。

「い、生きていけないわね…」

彼女にとっては大打撃だったのか…凄まじくとも無い事を零す。

「不安がらなくても、相手がおれだ…大したダメージではないだろうか？」

助けるを前提として、語りかけたコトシラは、その意味の重大性に気づかない…

「そうなっちゃうのかな？」

恐る恐る聞くような感じ…

疑問符を提供するのなら、返す言葉を変換しないと。

「そうなっちゃうですよ」

時間の移動は、僕らに何の影響を与えたのだろうか？

取り除かれる歪みを体験する境地…

今までよく生きて来たなって、本心思ったりするのだな…

「テントと…同等の私はどうだったかしら？滑稽を通り越して、有頂天だったりしない？」

有頂天になる心境も掴めないな…

良いことでも、在るかの様な言動の振る舞いだ…心地良いものではない。

「…面白かったよ、お腹いっぱいさ」

面白かったは、本心。いわゆる言霊。



「そう…そうね、私は道化にならずにちゃいけな生け贄って訳なのね…」

初期設定とはまた、だいぶ違いを見せる姿だ。成長したのか、変わったのか、どちらかハッキリして欲しいな。

「と、話を変えていただきますとね。歩く道筋は決まっていますが、次また、泊まらせてくれる人間に会えるか解らないから、…その意見に関して、言葉を聞かせて」

話を四十五度変えて、分岐を変更する。行事に取りかかる。

「そうね、…テントは在るんだし、近くに川が流れて頂けたらまだ、過ごせるわ」

それは、お泊まり断念の日の話。

今日かもしれないし、遠い未来かも知らない。

覚悟は前もって、定めておくべきだ。

「清潔を維持するのは断念した方が良くぞ、女性は死ねって言うて居るもんだがな…」

なんだかんだ、ゴタるのなら前もって話を付けよう。

「頭が割れそうな。問題ね…そこを解決できたら、まだ現実でも遣って行けそう。」

現実を見直す。やっとこさ、頑張った努力も報われないのが現実とばかり思っていたが…解決できないのも、現実特有だと知るコトシ

う。

「裸で歩くしかないんじゃないか？」

そう言った言葉は、禁句だかついポロツと出てしまう…

「馬鹿なことは言わないの。」

そうです。そうです。正しい判断です。

おれは馬鹿だから、自分の言った言葉に自信がもてない。  
哀れな人間です。

「ごめん。馬鹿で愚かでごめん…」

森は深く、方向探知を身に付けていなかったら、絶対的な数値で遭難してしまうだろう。

能のない奴は、生きられない。よくできた世界は、今のよう  
に単純な弱肉強食で彩られた事を言うのか…

「そんなに気持ちを入れて、謝らなくてもいいのに…、私の方が悪いみたいでやるせないっばい…」

古見子さん、楽しく生きるにはどうしたらいいのだろう？

果たして、今のおれは楽しんでいるのかな？

そして、目の前の彼女は楽しんでいるのだろうか。

「古見子さんの作ってくれたカレー美味しかったよ。」

コクと香りを楽しんで食べていたから、あれは楽しかったのかな？

「…そうね、懸命に必死で作ったから、それなりの味は出たじゃないかしら？」

なら不味かったと言えば、どんな反応を起こすのだろう？

「美味しくなかったって言ったら、どう思う？」

素直に聞くのがおれの主義。

「美味しくなかったら、美味しくなかったで良いんじゃない？正直に答えた方が嬉しいし、嘘で固められた言葉なんて、飽きるだけ…」

飽きるとは、どんな表現だ？

繰り返されることで飽きるのなら、美味しいってこたえる割合が多くて、またそれも、嘘にしか聞こえない事を示しのかな？

「頭が痛くなってきそうだ…もう戻れないな。」

勢い任せの言動も疲れた。もうどうにでもなれだ。

「あ、モンスターが現れたわよ。どうする？」

今更モンスターなんて出ても、戦うのめんどくさいし…

「そんなのほつといて、歩きましょう」

てくてくと歩く。森林はやけに静かで虫もないようだ。獣鬼はこのこ現れるくせに、

「…無理みたいよ。こっちに向かってくるわ。」

その通りと云わんばかりに、獣鬼がキチガイな声色立てて、向かってくる」

「死にたがりなモンスターだな。ここまで死にたがる生き物は、人かぐらいだぞ」

知識や技術が進歩した時点で終わり立ったんだろうな。獣鬼の方も、以上に満ちあふれている、言わば同類の感じ。

「あ、そうだ。ペットにしてみないか？」  
ふと、思いつく。

「ペット…？あなたもずいぶんまいつているようなのね…」

死を覚悟した蚊のような眼をしているのかな？  
鏡があつたら観てみたい。

「一度決めたから…一度試してみないか？捕獲して、監視するんだ」  
無茶言ってるのは、水の泡を観るより明らかだ。けど、何かが変わるかもしれない。と言う名の好奇心が僕を駆り立てる。

「一度…だけなら遣つてもいいんじゃない？モノは試しよ」

良いこと言ってくれる、そうと決まれば…

コトシラは、獣鬼に向かって飛び出した。手持ちの大剣は形を変えずに、コンパクトサイズ。

「古見子さんも手伝って、」

古見子に声をかけるコトシラ。

「言われなくとも、そうするつもりよ」

素早い動きで走り出すのが解る。  
これは盛り上がる。

一瞬の間に、作戦を考え始める。

「古見子さんは足を狙って、動きを止めてくれ」

俺は、あくまで敵を殺さないように頭部を狙う。  
敵は、狼型と狐型のハーフなので動きは早いように見えるが巨大なので気休めばかりに動きは遅い。

「殺さないように頼む、が抜けているわよ」

層だった。彼女なら謝って殺しかねない…

「殺さないように頼む」

「解ったわ」

次回

もう疲れた

無感情理論を虐げた私に、感情移入なんて高等技術、通用しないのよね…

こちらへ進撃し、直進しつづけるとはいいきれない獣鬼の振る舞い。何故なら、木々が入り組みその巨体の特性が十二分に発揮できていないからだ。

森と言うことだけあって、あたり一面森しかない。雑草すら、地面の土を覆い隠しきれない。

どこかで密林と言い表していたのなら、言葉の誤算だ。すまない。

それはさておき、これからの行いに関して、語彙を連ねよう。

今さっき、の自分等は仲間になろう。

とんでもなく、差別感無しばやいた戯言とかだったけど…実行力する段階まで来てしまえば、跡も取りも、引くことも、出来やしない。

示度は、捕獲。後に洗脳。結果…

の順に、目途はペットとする。

「まだ、8時半くらいよね？…この肌寒さは、春だからなのかしら？それとも、午前の太陽が休んでいるから？」

深林の空気は、喉が裂くほど澄んでいる。

その所為在って、澄んでいる分、空気も温度も気分も寒い。

「曇り空なのは頭上を観ればよくわかる、普通なら、今日は、雨だ。寒くても気象に感謝しろよ。」

説明不足で悪かったが、刺激を繰り返した狼の様な巨大狐は、俺の一撃で翻り仰け反り、喚いて逃げ出したのを追跡中って言いようだ。

「あの獣も大変ね。あちらから、攻撃を繰り返すと思いきや、ただ、森なら何処でも落ちている木の実を全力で広い喰いしようとしただけなんて……」

おれが獣鬼の顔面を軽く横なぶりしたいけど、その際、俺の背後に有った散乱した木の実を観れば、大方大概は『この木の実が食べたかった』に繋がるよね？

その通り、狼顔した彼は、木の実を逐一この場所に、貯蓄した。

「断言した。」

中途半端や生半可とか言われる前に、まずは言われない努力の兆しを見せるべきだな。

「何を？」

古見子さんは、おれの後を追う。

俺は、獣鬼の後を追う。

残念なら、木々をポンポンと飛びわたったり、掛け走ったりは出来ない。

「あの獣鬼の顔をほんの少し、会見して頂いたんだけど、…」

頂いたと言うより、見えた。

「あの獣鬼なんだか、愛くるしい顔付きしていたんだよね。だから

…」

此処でも断念できる。

彼女は、

だからどうした？

と言う。

「だからどうしたの？もしかして、何かに芽生えたの？」

…

素直じゃないな

俺の予想を否定するように、言葉を追加するなんて…。

「タレ目」

俺は断念した。

「え、…」

彼女は、言葉を失う。

「あの獣鬼…タレ目だったんだ…」

そう、恐らくあの瞬間、目があった。

ほんの一瞬の出来事。出来事でもない。あれは、万物の節理の法則



の如し、そうなる定めだった…そうに違いない。

獣鬼に一瞬、心を奪われるとは、不覚としか言えない。

「なんだか…悪寒が走るのは気の所為？」

まるで、鬼畜でも観てる様な眼差しを僕に向ける古見子さん。オレの背後を追って、姿が見えないのは解る、けれど、それは鋭利な視線を送っているのは解る。それだけで斬殺できそうなその眼力を…

「明日は晴れると良いですね。」

おれは、視線を中和するべく、如何にもわざとらしい話の切り替えに申し出た。

「明日は、晴れると思うけど、今日は振るんじゃない？この天気よ？」

薄暗いし、太陽もどの位置にあるのか…オレは兎も角一般人には解らないな。

そう思うと、俺って、人より得した人間じゃないか？

確かに、この時代に生きる人等は、皆身体能力は四千年前より断トツ的に遙かに高い。だけど、それは当たり前であって…みんなそうして生きている。

方向を司るおれは、人以上だったりするのかな？自信や自惚れはないけど…

「今日は大丈夫だよ。空は雲ばかりだけど、雨は降らない。これは憶測…」

勘が外れたり、反れたりはある。

「あなたの勘は、女性である私の勘よりの中率が高いから怖いのよ……」

今度は、化け物を観るような眼差しを送る古見子さん。

俺もまるで獣の形相で獣を探知する。

「そんな事無いよ。おれは何も考えているのか解らない。古見子さんの方がよっぽど、狂魔王だよ……」

ホオローもばつちりはらんだセリフ。

「ホオローのつもりか、ホオローに成っていない処が絢爛ね」

何とでも言うが良いさ。おれには、ホオローのつもりだったんだからな。プンスカプン。

日常会話に、勤しんでいた俺たちに一手、置いたのは古見子さんが先手。

「さっきから駄弁ってばりですけども……あの怪獣の後を本当に追っているの？」

それは、問題ない。やぶさか、おれが永遠に見つけられないとでも思っているのか？

と、此方が思ってしまう言い草。

「生物の行動パターンを把握している…他言無用だ」

この発言、危ないよね？

危ないと思われるかた、うつわぁーと行いって、僕の隣を素通りしても言いよ？。

「うつわぁーですわ」

何処から幻聴が聞こえてきた。  
気にしない。気にしない。

「なら、頼もしい限りね。安心できそう…」

今の言葉を起点に、獣鬼の動きが止まった。此処からは見えないが多分止まり停止したのは解る。

「そろそろ、タレ目ちゃんのお出ましだぜ。準備しておけよ。」

あのタレ目獣鬼、偏見と同じ物の見方で高く評価しているから頭はいいだろう…。

賢いから食料は、一カ所だけじゃなく複数に保管している。

俺たちを巻いたと思って、安心して貯蔵ポイントに向かったと、思われる。

あのタレ目にも悪いことをしたな。

そう言う風に思えるのは、オレだけか？

きつと、オレだけじゃないはず、オレは信じているからな。

コトシラは、若干木々が少ない森にぽっかり空いた敷地へと飛び出た。

「草木が見あたらないな。ミステリーサークル建設地跡か?…」

オレの後を追っていた古見子も、ゆつたりとした歩調でミステリーサークル建設地跡と思われる敷地内に入場。  
イチゴン目に…

「まさかとは、思うけど…ボス戦じゃない?かしら…」

と、ゲームチックに短く語り出す。

「ボス戦とは、名残惜しいなあくまで、あのタレ目ちゃんは、仲間  
にしたい…」

煌びやかな俺の身を観て、古見子ため息混じりに…言葉ノベル。

「上手く行かないのが現実よ。」

嫉妬心ありありじゃないか、別に、邪な考えやいかがわしい思想や  
恋愛沙汰とった感情は一切何だが…

ただ、憧れや良いなそう言うのも、って言うか…言葉にできない何  
かだよ。つまりは…

「萌えるって、こんな時に使うのかな?」

素性に聞いてみたくなった。

「あなたが言うのなら、そうなんじゃない？ 私にはよくわからない世界なの……」

次回

狼狐

不思議と獣鬼は話しかけてきた。

「今日のお前等についている、何故なら、今日は曇り空だからだ、眩いばかりに輝く太陽が迸って、居たのなら…残念ながらお前等は死んでいた…」

話を聞いていると、必然的に返す言葉が出てこない。

そこら辺に、返す言葉が落ちていたとしても拾うまでが面倒だ…。

「あの怪物…殆ど末期と言ってもいいんじゃないの？…早くどうにかしないと、大変なことになりそうよ…」

と、古見子はあの獣鬼に、ではなく俺に対話を申し出る。

そうだな…今の言葉を本心本音で言葉を交わしているのなら…  
狼の狐のその外見が

犬のような、狸のような生物に関連づけて、見えてきそうだ…

「おい、獣鬼。お前は、何故日本語を理解し、なおかつ日本人にも分かりやすく文脈を整えて語り出せるんだ？まずは、そこから疑問符だ」

獣鬼な彼の第一声がオレはどうも…

藁も無ければ、大地にすがり付きたい的な言葉の振る舞いにしか聞こえないのは、おれだけか？

「な、古見子さん？」

「う、うん……」

オレだけがそう解釈していたようです。

処変わって、獣鬼がモノを言い出す。

「オレが…言葉を話せられる理由か…」

獣鬼は、全体的に脳内歴史を逆再生しているような様子だ。

要するに、思い出している。

ひとまず、言わせて…第一自称がオレってかぶって誰が誰だかこんがらがっちゃうよね？

「何か、戯言でも話したらすぐ崩れそうじゃない？」

お隣で囁く古見子さん。

「おれに、其処まで相手を蹴落したり、陥れたるする語学はないよ。」

つぶやき混じりで返す。

獣鬼の方は、脳内回想に没頭中。楽しそうだ。

「古見子さんなら、遣れそうじゃないかな？その持ち前の眼力で、

邪険晒し完膚無きまでに平伏すことも、出来るはずちゃう？」

基本ドジ目な彼女は、こんな時こそ役に立つとばかりに思ってた。

「そんな事、容易く私に口走って良いのかしら？」

「うん、良いよ。何なりと…」

即答なおれの態様に、うぐ、とかの躊躇う面影が見て取れた。

昨日退治した、イノシシは圧縮ポーチに入っている…あのときは、ちゅうちゅ無く殺したが今回ばかり話が違いと、語りかけているような古見子さん。

「交渉的な感じで行けばいいのよね？なら私にだって、やり遂げれるわ…」

自信情げに、物を吐く。空気は急降下して緊迫化の一途を辿る。果たして、運命はどちらに見方をしてくれるのか…

僕には、予想も予測も附かない。

「頑張っておいでよ。新たな仲間を増やす為に…」

肩を叩いて、今から始まる惨劇場に後を押す。

勇気って、なかなか出せないものだよね。自分一人だけで振り絞るのって、困難極まりないし、後一步の処で留まってしまう…。

そんな時、仲間の重大さや仲間の価値勘が決まる。

おれには、仲間何て居なかったけど、オレの目の前にいる彼女や屋敷の端袈居や今は、この世には居ないがきつとまた何処かで会えるシイクだって、



みんな仲間じゃないか…。

仲間って良いよな…

誰かがおれに…

何時かは解らない遠くない未来にそう言い聞かせる奴が居た。

「行くしかないのよね？」

「おう、」

「なら、行くしかないのね…」

重量感の無い足取りで、獣鬼へと向かう。

一方、子犬の様な狼色な巨大狐は涙をこぼして嗚咽はらんで涙ぐんでいる。

なんか、とんでもなく悲しい事柄があったのか、全力で泣きしゃくっている。

彼を観ていると…タレ目ってこんな使い方もあるのか…と感心してしまうのは、おれだけの習わしなのだろうか？

「獣…鬼！」

怒鳴っちゃ駄目なお分かり？古見子さん…

「ひげえうい」

ますます、興味を誘う驚きっぷり、面白いを通り越して、微笑ましが適切。

「あなたに話が在るのよ、聞いてくれる？」

古見子さん優しく冷ややかな視線を送る…これでもかって良いほどに、

「な、何だ…人間か、で、どうした人間風情がつ」

この獣鬼も此処まで乗り気だと、突っ込む余地もないな…  
タレ目じゃなかったら、斬り殺して居た処だぞ。古見子さんが…  
いや、おれか…

「人間風情…ね、なら、あなたは小動物風情ね…」

遠慮がないな我がイトコよ…おれの弟より局地的に的を射抜くな。

弟

今は居ないがな…残念な話だよ。正直。

「な、なにを抜かしおるのだ。小娘よ…オレの嫁になれ」

ん？気のせいかな、空耳で虫の知らせが聞こえたのよな…

「アナタ死亡ね。」

シュン

びゃあ

バキバキ

悲惨だ…

テイクツ―

「な、なにお、抜かしおるのだ。小娘よ…オレが本気を出せば、貴様の女体は木っ端微塵だ…それでいいのか？小僧…」

何やら、話をこっちに向けてきたようだ。この場合おれはおれらしく振る舞う必要がある。下手すると得るのは、地獄谷。

「おれは別に、そんな趣味は無いけど、遣ってみるが良いさ…」

今の言葉道理に、タレ目が動くのならテイクスリーと話が分岐地に戻ることになるからな…  
さあ、どうなる？

「やっぱ、辞めとく」

そうそう、お前はやめて置くが賢明なんだ。さつさと、おれ達のペツトなれ…

「弱虫過ぎるわね。呆れてものも言えない始末よ…」

おいおい、敵たる目標が入れ替わっている様に思えるのだが、古見子さん大丈夫？

「オレ…オレ弱いのか？自覚していなかったがオレ弱いのか？そんなのか？」

何かの起動スイッチに点火したようだぞ、本当に大丈夫か？古見子さん…。

「オレは、弱い子。オレは弱い子。オレ…」

まじで、目が泳ぎ始めた。古見子さんの言霊の力量は計り知れない。マジ怖い。

「古見子さん、ちょっとヤバすぎるよ…何したの？」

恐る恐る、それは天性からの細心用いて、控えめに聞いてみた…

「ああ、簡単な話よ。彼の頭を多次元に放り込んだのよ…彼は二度と正気になることはないわ…」

え、

血の気が一気に冷めたのが解る。

彼女はなんと言ったのか…

彼女の言葉が認識をするまいと否定していたが、無理な話…

目の前に、いる変わり果てた『それ』を観れば、誰だって、信じるしか無いのだ。認識するしかないのだ。

「どうして…どうして、そんな事を！」

立場的に彼女の性格から察して、何となく理解が出る…

でも、言葉で訊くまでは、絶対に信用できない。信用したくもない。

けど…

「ああ、それは邪魔だったからよ。あなたにも解るでしょ？」

弱さとか、そんなんじゃないくて、ただ、純粹に、邪魔だったから？

「ふざけんなよ。」

おれは、変わり果てたそれに駆け寄る。

抱きしめる。

温もりを感じる。

生きてはいるのに…

「これじゃ…死んでるみたいじゃないか…」

動いているだけ、生きては居ない。

「それでも使えるじゃないの？それだけで十分でしょ？…」

それだけで十分…確かに、所詮は家畜やペットと言ったのは、このおれだ。

「少し話をしましょう…」

次回

過ちすぎる

## 26 (前書き)

此処から始まりですね

だから嫌いだったんだ。

従うって漢字、在るから従姉とか、今問題ではない。なおさら、どうでも言い事…

それは、彼女がただ従姉と言う設定でこの世に留まっていること、それが言いたい。

今では言える…今だから言える。

おれ達、身内とか親戚とか、居るはずもないし、存在するはずもない。

事細かな設定まで築けないのが設定で、それ以降のものは後付け。最初から欠陥だらけのシナリオの上に立っている…遊ばれているんだ。

おれが小柄な体系で眼鏡掛けていると言えば、そうなるし、はたまた、おれが小太りして眼鏡を掛けていると思えば、その様になる。

設定はルールで絶対…

ルールは秩序で破ることできない、一つの糸。

もつと言えば、彼女は死んだ。

そう彼女は死んだんだ。もうこの世には居ない。悲しい。

けど、

彼女は生き返った。もう一度また、駄弁を繰り返す事が出来る。嬉しい。

何でもありませんよ。結構滑稽なの、当然とは思いませんか？

つまり結論は、こんな風に、話、されても、…。

ですね。

此処からは、

これは過去の話、

ちよつと昔に、なるのかな…。おれにまだ家族が存在し、その時普通の普通の日常を送って居た頃の物語。

「お兄さんと呼ばれるのと、お兄ちゃんと訊かれるのどっちが良いです？」

対等に、会話文淡々と並べてくれるのは、弟の方だ。

今日の天気は、雨。外で遊べなく、家でトランプと将棋を交互に扱っている最中。

暇だからやらないと、と飽きてきたもう止めようが降り混じるから、こその問いだ。

ここは無視して、遣っても良いがおれ自身の口が時間を持て余し、あくびが出るなどのアクションを行うので仕方なく、口を割る。

「『お』抜きで、兄ちゃんと呼んでくれると、心がウズいて申し分ないと、言っている…我が弟よ」



トランプで将棋をするのもまた、変わった風格だな…何て思いながら言った口だ。深い意味はない。

「兄ちゃん」

「なんだい？あどけない弟よ」

弟は出来がよく、頭も運動能力も上位ランク。学校側も文句さえ、通知に刻むくらいだからな…嫉妬心で組み込まれた担任で可哀想な弟。

後一つ、忘れはしない人がもう一人居た。血縁関係でもう一人居たんだよ。

お姉さんが…

本当に、どうしようもなく残念な出来事だった。事の切っ掛けは、…事故。その通り、すごい比率で、身内が他界する原因だ。恒例行事と言っても言い。

でも、そう言い切れるくらい現実味が無かったのは出来事ではある。学校から帰って、来たら居なくなっていたんだ。事の真相は、弟の筆箱を守るため…

馬鹿げた話で附いて行けなかった。筆箱の価値の値と姉さんの価値と…どう考えても釣り合わない。計算ミスなのか？と何度何度も何度も繰り返して観たが…数値が合わなかった。

人って、死ぬ時呆気ないんだね…

姉さんは、最後の最期までおれに優しくしてくれなかった。

いつも、弟を可愛がっていた、俺も遊ぶ事に関しては常に一緒だった。

おれのクラスメートとだって、「お前、生きている意味無い」なんて言ってくる御時世。本当におれは終わっている。

姉さんからしてみれば、おれの価値なんて弟の筆箱以下だな…。

「明日、テストなんだ。」

「ほー、テストか…なら、今こうして遊んでいていいのか？」

今なら解る、きっと姉さんも出来が悪かったんだ。だから、弟だけを可愛がり、逆に自分を描写したかのように出来の悪いおれを虐めた。そして最後には、…決まりだな。

「テスト、諦めたよ…」

弟は思っても観なかった、何を言っている？そんなの駄目だよ…。

「諦めた…とは、サボって、満点を採らないで居る状況を意味しているのか？」

弟は満点以外は採らない。反転に、満点しか獲れない。

「ぼ、ぼくさ…」

「何を言っているんだ！お前、は！満点トれよ、獲れば良いじゃん

！諦めないと満点取れない奴なんて見えしか観た事ないし、穫ろう  
と思って採れるもんじゃない、理解しれよ。」

可愛い奴には、厳しくとも言うが、こいつは少し甘ったれている様  
だ。

「だって、ぼ、ぼくさ…」

天性の才能を持て余す弟は、オレの中では、憎たらしく愛らしい。  
どちらとも釣り合っている感じさ。

けど、今回は

「何も解らないんだよ…普通人の考えが…」

何でも出来るは、何も感じないのか…現に、将棋、トランプ、トラ  
ンプ代用の将棋、すべて彼の勝ちだ。

ひたすら負けている俺も、これは作業だ。何も感じない無情感その  
物だ。

「天才か…馬鹿らしい。思えば、弟だから可愛がっているがお前が  
赤の他人なら、ただ死ねとしか思わないぞ。」

言ってやるよ。今回だけは…

「ならとって観ろよ。きつと、オヤジや母さんは悲しむぜ。もう救  
急車まで手配するだろうよ。ハハハ」

冗談きつすぎ、笑ってしまったぜ。

「ぼくは…人？人じゃない？どっち…」

「そんなことも解らないのか？」

おれはゴミ人間だから、俺こそ人の心を理解していない。友達も居ないから…

「安心しろ！心配しなくても、お前は人だ。」「自信を持て」

肩をたたいてやる、まるで、どつかのおじさんだな。

「そうか…ぼくは…人」

心に使ったのか、弟は見る見るうちに顔色が純粋化していく。これで大丈夫だろ。

「明日のテストも頑張れよ。」

「うん、頑張るよ。兄ちゃん！」

これは、雨の日の出来事。明日は学校でそれで居て、テストだったらしい。

テストとか、どうでも良いんだが、運命の歯車は前々から回っていたんだろう…。

次の日も雨で弟は死んだ。

死因は事故死。

明らかに、誰かの陰謀か…神の悪戯か…

「どちらにせよ、これは異常だ。」

今この瞬間から、世界のコトワリを追求し始めた…

おれはこの時から、ゲームを楽しみ。

勉学も生半可に受けた。

親からは非難されるがもうどうでも良いと念を押す。心に誓う。

初めっから、親しい無かったって…

歳月は流れ、月日が過ぎた頃合い。

親さえも疎く咎めまじなつたおれは、姉の部屋に向かった。

姉は、骨董品の売買や情報収集などとしていた為、選りすぐりの呪いアイテムまでより沢山そこには、あり得るのだ。

漁るあさる

「これは使えそうだ…」

一つの武器があつた。

剣だ。しかも黒い。

呪いともなると、やはりこの配色…。

姉のPCを起動させ、データベースから、それに対する影響や呪いをありとあらゆる角度から検索した。

検索すればするほど、本当に誰かを呪うたかったのかって言うほど、超重量な呪具が出てくるは出てくるは…

「人としてやってはいけなさそうだな。」

人は、一線越えると別人になるから怖い…。

次回

定めの造り方

全く話が違う方向へ繋がってくる。

弟は、毎日自転車通学していたから、その日だけを限定で危険だった。

注意の一言だけを伝えるべきではないか？何て、運命操作は、同じ人生を二度とも三度も繰り返さなくてはならない。

おれは難儀なことはしたくないし、弟とか、本当、どうしても良かった。

と、言うより何より人が嫌いだった。

人の顔すら見たくない。人が群を成し団体行動しているなんてまるで、大規模な工場の機械で頭が痛い。

更に先に言うと、人混みは完全におれには縁がない物であって、死んでも飛び込まない。人混みは人がゴミの固まりにしか見えない…

親も、呪うと言う非論理的遂行で葬った。これまた事故死。

両親が乗っていた車に馬車を衝突させた。即死の域だ。苦しまずにご愁傷さんだ。

：

私にとって、原点の機転はどちらが先だったかしら？

弟が死ぬ運命は、私が操作したに等しい？。

違うわね。あれは前世の私で今の私は、ただの部外者、関わる必然的はないし、

無縁になったこの現身もただの仮初めだし。

現在を生きている私達は、最も最善尽くしている…。

過去なんて、無駄なもの、忘れてしまえば其れまでで、終了なのよね。

「なあ？これで良かったのか？」

「良いに決まっているのではないの？」

コトシラ一行は、中身のない獣鬼を引き連れて、先を進んでいる。

「何か、何故か…しっくりこない。本当に感情とか、心といったもののすべて飛ばしたのかよ？飛ばせるのは、人だけじゃなかったか？」

合理的に考えると、これは良い結末。人のペットとしての存在ではなく、奴隸として、道具としてそこに滞っているのだから…

愛玩獣鬼など、合ってはならない。

これは絶対だ。

この前提を破る前に、世界のルール上、何処かで抑止力が働く。

昔観ていた教科書に、獣鬼は人の罪だと書き記されていた。何故？何時から？

と、原因、起原を訪問しても誰も答えてくれないだろう。

それが正しい判断なら、それでも構わない…か。  
あきらめ混じりだな…。



コトシラはいつも以上にくよくよめそしていた。

その後の古見子さんは、先ほど言った疑問に対して、論を並べる。

「あれは、人の感情が混じっていたから…多分、それだけを飛ばすことが出来たんだと思う…」

元に戻るの、人と人の繋がりがな…

元には戻せないとは決まったわけではないし、今はこのままがいいのよ」

何を根拠に、辻褄を合わせているかは、暗黙の了解なのであろうか？

「本当は、俺たちって色々複雑な関係していそうだな…」

俺達、実はとっても寂しがりで、そして、とってもそれを否定したのかもしれない。

お互い譲れないのか…譲りきれないのか…まあ薄々その壁も溶けていくでしょう。

コトシラは、武器だけは旅の途中は絶対身に外さない重剣某大剣をこしらえて、古見子さんの横を歩く。

何となく空を観れば、

止め処なく、空を隠す曇り空はまだまだ続いている。それでいてやけに雨は降ってくれない。…振って欲しくないけれど…

「なあ？古見子さん…」

どうでもいい事だけが、脳裏を埋め尽くす。

「何？様でもあるの？」

様とかつて…ま、スルーしよう。

「雨が降ると…雨の降り始め、古見子さんはどんな気持ちになる？」

おれが悲壮感で死ねる演出、傘を持たずに家まで一人歩き…。  
ポツケなんかには手をつ突っ込んだりして…

「素朴に下僕」

？ハテナ、理解し難いではなくては、言動が驚いた。驚愕の一手手  
前ぐらい…

「素朴に…？」

再度確認させて頂きます。

「人身売買」

「古見子さん！しっかりしてよ！怖いよ、」

まるでどや顔な古見子の眼は超過、とてつみなさすぎる深さを誇っ  
ていた…。

「あ、ごめんなさい。冗談よ…そうね。悲しい気持ちだが、妥当かし  
ら？」

もう一押しかな…

「物足りない。と言うか、若干、的外れ？」

「なら、服が濡れる。ああ、大変」

棒読み…解っていたよ…こんな質問提示するおれの方が間違いだっ  
たって…

「ん？古見子さんって、何処の演習学校行っていたの？」

質問攻めで敵を翻弄する老婆のようだ。

「座臥ク学園。あたりの成り行きね」

一言。多い所為か、一瞬おれは機能停止に陥った。

「嗚呼、座臥ク学園か…あそこ、机がないことで有名だよ。ソレ  
デ？」

「？何かしら？」

「だから、机が無いのにどうしやって授業を受けていたの？…かな  
ーって」

別に、普通の会話だよ。

「そ、其方ですか…机が無ければ、授業を受けられないと思ってい  
るの？あなたは、」

質問者に質問で返すこの手際の良さは、静電気除去パッド並だ…。

「思っているが…」

仮説を立てるなら、それは教科書もノートも要らない、四万年前の旧日本時代の授業でも取り入れているのだろうか？

「その通り、受けられないのよ…授業は受ける物…の根底を覆した。とても言うべきね」

覆す、良い響きの語呂だ。物理の世界では、そうやって靴裏返し、靴裏返し、新たな道を切り開く。

そうやって、便利な世の中が誕生したの一部を除くが…

「最近、先生より生徒団体の方が総合的に知識が上なのはご存じ？」

まあ、学年にもよるだろうけど、その考えをそのまま授業に取り組むのは、馬鹿。

「おうとも、」

「そこで、基礎知識身につけていない阿呆が、宝くじを当てて学校と言う組織を立ち上げたのよ。その人が座臥ク学園校長。」

何気なく、やけに現実味があって、深刻な話に聞こえないのは、俺個人の思想に問題在るか？

「正直な話、その校長先生、貴方より格好いいわ」

空に広がる止め処ない雲のように…。

おれもまた、もやもやした気の晴れないやるせなさ、憚り包む込む。

「だったら、その校長先生と結婚すればいいじゃん」

ちえつとか言つて、ポツケに手をつ込み小走りするコトシラ。

明らかに、子供過ぎて幼すぎる行動。

「おもしろいわね。やきもちとか、言つのかしら？それ」

呟きざまに、獣鬼を撫でる古見子さん。

説明事足りていなかったが、荷物を無理やり背負わされた其れである。

其れとは、狼と狐を足してそのままにしたのが、今言つ獣鬼だ。

心無き獣鬼は、双眸だけはタレ目だ。

のこのこ、足を進めるコトシラの背中を追うのも愉快なモノだなと実感と直情する古見さんもそこには心に居る。

「お、川の濁流音がかすかに聞こえてくる…河川はすぐそこにありそだ」

と、おれは言ってみた…。

「…そうね。私には聞こえないのだけれど、あなたが言つのなら、私も聞こえるわ…」

つまり、おれの探索能力を信用しているって事か…。

まあ、何となく理解できる後景。

「よしなら、今日は野宿だ。」

最後に述べるのは、コトシラ。

次回。

今日の

終わり

著しく空は病に罹ってしまったかの様に、雲空いっぱいだ…

川が盛大に濁流を脅かしているのには、基本論理に基づいた理由がある。

おれは、一々回りくどい遣り方はしないので、一口で言い切る…。

この近辺では、雨が降っていて奇跡的に俺らの場所まで雨雲が行き届いていないことが言えよう。

もう少し、範囲を縮めよおもものなら、この河の河上に当たる地点でだ。

当たり前過ぎる論だが、おれが言つと凄いことを言っているようで吐きそうだ。

「雨がやんだら、この濁った川も透き通って綺麗見えるのかしら？」

骨休めに、一言一句を問う古見子さん。

「まずに、此处で…この地点で土石流の様に、濁っているとすると、上も同じに汚らしいだろ？」

つまり、全体が不潔な河。弱アルカリ性なら飲んでも良いかなあと思っていたけど、無駄な期待は持つべきではないな。

的外な結果だにより虚しい。

「まあ、なんだかんだ言っても…単なる水ですから…私達には関係ない事ね」

いや、それはちょっと、匙の分量が大胆不敵だよ古見子さん…。

「いや、水は大切だと思いますよ。…ほら、古見子さんも疲れているだろうし、飲み物とか飲みたいんじゃない？それと同価だよ」

優しくお手柔らかに、反論を吐露するコトシラ。正直な処、おれも喉が干魘でくたびれたトマトの如く酷い口内状況だ。言い換えれば、喉が渴いた。

「そんなんでこの先、生きていけると思う？

何時食料が不足したり、破綻し足りするか解らないのよ？

それにね。この世には、

断食で耐え抜いている人もいれば、断断固、美味しい物を食べれ居ない人もいるのよ？

と説教気味に言ってみたわ」

なるほど、説得力が在るのか、否かは置いといて納得し、共感できるなそれ。

「それもそうだな。よし、そんな幸薄な人のために、この濁流と濁流音に囲まれながら、川遊びをしよう。」

久々の冴えたオレの現状を把握してでの案。たまに、こういった企画が飛び交うから人生たまらない。



「それは在る意味キチガイね。微笑ましいわ。」

前倒しとして置いて置くが、これは本気だ。嘘や虚言ではない。真剣に肌寒いこの季節に水着で泳ぐつもりだ。

もうおれを止めれん奴は、古見子さんしかない…。覚悟の上だ。

「言って置くが…おれは本気だぜ。こんな企画も在ろうかと、あらかじめ持ってきた水の中に入る際の専用服を持ってきたんだ。」

ほら、と言って見せびらかす。変態じみたコトシラ。

「間違いなくキチガイに、昇格ね…。」

数秒間の沈黙は、古見子さんが横目で水辺を観る処から始まった。考えている様な、いない様な曖昧でハッキリとしない無表情に近い顔をするのは、やはり、標準水準な古見子さんだと思った。

「そうね…私も泳ぎたくなつたわ。」

何という、合理的破りな発言。

いつか、きっと、おれ達私達で世界征服も夢じゃなく、身近な物にしてやるよ。と比が被るくらいの言いようだ。

「え、まじ?」

本気と誓つたおれも心が揺らぐ。

コミちゃんの表情も何故か、本気っぽい。

「ええ、本当よ。一緒に救えようのない馬鹿になりましょう。」

いいね、いいよ、良いですね。揺らぎますね。誘い乱れますよ。

「ああ、解ったよ。」

「あ、まずったわ、水につかる為のお洋服を持っていらっしやらないわ。私…」

「大丈夫。そんなの問題点でもないよ。…ほら、身の分持ってきたよ…姉ちゃんのだけど…」

世界が混沌の闇に包まれても、彼女と一緒にならやって活けそうだ。これは本気で、本物の気持ち。

今日はここでお泊まりと…テントを設置し、安全を配慮して、獣除けのお札をありとあらゆる木々に張り付ける作業をした。

追伸として説明するが札同士で一種の結界が完成するし、その結界からは出ることは出来ても中には入れないとか、…虫除けにも繋がるとか。

近所のおばさんから聞いた話だと、うち鍵の様に、結界に戻ることか出来ず、仕方なく結界師とか、呼んで事なきを得たとか…。

「これで仕込みは終了ですね」

テキトウに仕込みとか、台詞に追加した。元々色々とかオスな小説なので、この程度の台詞の改竄も許せるであろう。

「結構しんどかったわ。この札も、許せる範囲くらいは、合理性に徳化してもいいのにな…」

確かに、発展途上国の代物だがなんだか…変な習わしで、この形でこの使い方じゃないとダメらしい。名残とか、古くからのとか。本来、必要性虚無なんだけど、やっぱり大切なんだろうな、こんな感じが…。

新たな世界から来た渡来人のような心境に陥るコトシラあんど古見子。

「コミさんは、神様とか、信じます？」

色々支度する。古見子さんに訪ねた。

いきなり突然唐突に、とは言えたものだ。

「何？いきなり突然唐突に…」

……そうね。

神様なんていないでしょうよ

居るとしたら、不利をしたペテン師。

類のノモのじゃないかしら？」

やっぱり、この質問だけは、そうとしか答えきれないよな…

物理を超えた。影響源を発見したが神を観たという者は誰もいない。居るとすれば、それはおれたち同様、キチガイ人だ。

泥まみれのテントを観れば、ふと蘇る四万年前の世界…

あれは夢だったのか？

不思議な感じだな…

と言うか、神様以前に、俺の身の回りに起きることが一番、異常現象だろ。

異常とか、不思議とか…数値化できるのかな？…

「示度は整ったわよ。さ。いきましようか」

「わいわい」

ガヤガヤ

ざぽーん

寒さの中、濁流と共に、水遊びを楽しんだ。

「（くしゃみの音）、ヤバいって、これ、まじで風邪ひくよ。」

健気に体を振るわせながら、くぐもった声を吐く。

「あなた、意外にも虚弱体質とか、病弱とか、そんな感じ…ね」

ああ、そうさ。

脳内麻薬で何時だってハイなおれは。身体は何時だって、女性ホルモンで満ちあふれているさ。

そして、そう言う、古見子さんは、オレなんか比べて、女性らしいスタイルと抜群のスタイルで観る者を魅了するそれを養って言いよな。

オレだってたまに、他の異性に転職したいなとか思ったりするさ。

「どうせ、おれは冴えない屑糞塵生物ですよ」

自虐なら得意だぜ。

なんせ、姉の奥深い拷問に近いそれを、結構、かい潜ってきたからな。

「いや、あなたは、自分の思っている以上に素敵な物を持っているし、案外、イケているわ。それ以下のもあるけど…」

それ以下がどんだけ目立つものか…

考えるとヘン頭痛とヘン腹痛しかない…。

「んじゃ。これだけ言わせて…」

「？なにかしら」

「アイシテイルヨ」

次回

明日は風邪で動かないな。

もう私たち…結婚した方が良くないんじゃない？

内心に思のは、古見子さん。物理的にも多少小さな胸は止めどなくあふれ出しそうな思いにまで、口からポロツと零れる処まで…到達していた。

そこまで来て、拒む理由は彼女自身…わたったもんじゃないと判断する。

「ま。風邪でもひいたら困るから早く着替えてきなさい」

何故だが、優しく言うてくれるのな…と、思った人が此処にいた、…其れ即ちコトシラだ。

壊滅的なコトシラの震えっぷりは前代未聞と世間には広告すら出来ない有り様だ。

男の子でいて、此処まで寒さにひ弱なお人は、彼くらいだ…と自負心でハチキレそうだがコトシラが普通なだけで問題点は古見子さんにあるのだ。

悟ったコトシラは、内心だけに留めておくのだ…彼女は体が常人以上に、強力だと。それを前提してみて、察すると今までの超人的な運動能力と身体能力の高さが高いのも頷ける結果だと推定される。

だが、コトシラは言わない。

その長所は彼女にとって、どの様に思われているのか、常人じゃない彼女の体質を評価していいのか、相手のことをまだよく知らない上で言葉を乱用するのは、犯罪と何ら代わりがない。だからこそ、コトシラは言葉を閉ざす。一部の意味で…

「明日は風邪寝込むかもしれない…」

宣言口調とはほど遠い、言葉の振る舞いで古見子さんに伝える。

「疲弊なあなたを観れば、そんな弱音口調でも寛大に観てあげるわ。明日は死んだように休んでも良いわよ」

暖かな言葉のはず何だろうけど、語彙の扱いが愉快的事に成っているから、どうしても素直に快くイエスとは言えなあ。

「わかった。思う存分頭痛高熱嘔吐で明日は天空に仰向けになって、テントと布団をそう上から羽織る事にしたよ…」

でもそのかわり、一つ頼みがある。

「だからさ、今日は僕に何でも頼んでよ。在る程度のことはまかなえるからさ…」

これは、交渉や取引と言った種類に分別される。誰だって、ただじや頼めないのがこの世のコトワリで、どちらとも利益な取引でないと応じないのも…この世理だ。

「別に頼み事とか、在りませんが？今日はもうゆっくり休んでいただけの方が嬉しいのだけれど…」

優しいなおれの親より優しいよ。姉とは、正反対なのが何となく対照的な近さを感じた。

在る意味似てる其れで居て似つかない。

これもよくある話だ。

「そうか…オレは足手まといで、単なる邪魔者って奴なんだな。…わかったよ、おれが最高の杏仁豆腐を作ってやるよ。夢で」

夢の世界はカオスだが、使いこなせば何だって思い通りさ。

コトシラと古見子さんは、会話している間にも、標準装備へと着替えた終えていたご様子だ。

「（くしゃみの音）もつともな意見を言えば、やつぱ、この衣装が一番しっくりくるぜ、だって、毎日同じ防具の替えをローテーションで着ているから…」

独り言に最も近い台詞。今此処に古見子さんがいなければ、誰もが樹木に話しかけていると答えるであろう。

それと、防具と言っても、ラフな上下に安物の防弾ベストの様な物を着用するだけの妙なもの。

文字なＴシャツは曜日によって、入れが変わる…今日は緑だ。

「可哀想なほど、芸がない衣服ね。私の借りるかしら？」

と言われても…オシャレとはほど遠い。彼女それも、結構なレベルでやばい。従姉の近さが物語っているな。



バリエーションって点では、古見子さんが百本一步譲ってイイと思うが着るすべてノものがジャージなのはいいかわせんとなな…折角の美しさが掻き乱れて、普通に成っている。

言葉を掻い摘んで、容姿なんて飾りだろ？心が必要なんじゃないかな…

と、心の隅に念を押すコトシラ。

「動き易そうですね。いつか、借りることにするよ。古見子さん」

まだまだ、昼過ぎ出し、腹も減ったし、木の実でも喰いながら携帯ゲームにでも、電源を入れるとするか。

古見子さんは、ちょっと探索とか言っつて、川上へ向かった。別に詮索はしないし、気も止めない。

コトシラは、「ああ解ったよ」と振り向きざまに手を挙げ、手の甲を晒す…フリフリ。

くしゃみはするが生憎、幸いなことか、頭は痛くない…思考能力も安定している。

ゲームを二、三時間遣るくらいの体力は十分に残っていると決する。

今の今までの話なんだが、おれが携帯ゲームを持っていたことは、話していなかったな。おれは冴えないが気持ちだけは一流で居たいんだよね。だからこそ、今まで我慢してきたんだ。

で、でも、…限界だ。おれはオレの本心誓ったつもりだったんだ。巨大リスブレイのみでしか娯楽用品を扱わないと…

「あああああ1あああああ」

拒絶反応かは知らないが、手が勝手に震えだし、思うようにゲーム機本体が持てない。

でも、此処であきらめていいのか？

勿論、ゲームを遣らなかつた事で、これまでの生活に支障が生じる訳ではないが、…暇には勝てない。

明らかに、今は孤独症候群で躁病に成つて、再度川に飛び込むか、もしくは、鬱病になって、体育座りで時間を浪費するかのどちらがおれを待っている…。

ガラ…

理科の時間によく使われるカバーガラスのように割れやすいその携帯ゲームは、コトシラお手製自作強度強化版カバーで覆われているため、高さ三メートルから落としても擦り傷程度ですむが…

「お…おれが遊び機を…落とすなんて…」

初めてのことでない。だが、此処はテントの中だが基本野外だ。その野外で、ゲーム機を落とすなど…万死数值化できる…。

「生活保護はたいて、買った三年前の機種なのに…」

彼にはどうすることも出来なかった。

そこには、ただの虚しさと置いて行かれた感しか、この場にはなかった…。

原始的に残るのは、輝かしい光沢の光る遊び機だけ…。

「おれはもう、駄目なのか？」

ゲーム遣って歷十年間、初めての挫折とも言える敗北感が襲う。

「古見子さん…」

何だろうか、この気持ちは何だろう。

不思議的に、従姉の言葉がこぼれる…

ああ、そうか…おれは初めっから、古見さんの事が好きだったのか…。

思い出せば、古見さんが現れる前から、彼女を知っていた。

『従姉』とは違う。別の古見子さん。

…  
姉だよ。

おれは、おれが『僕』って、言っていた時だ。何時かはしないが姉は言っていたな。

「あんたも少しくらいは、男らしく振る舞いなさい」

よくおれは、気が弱く。小さい頃は、ガキ共に虐められていたもの

だったよ。

「むり、そんなのむりだよ、おねえちゃん」

本当、あの頃は何かにするのがやっとで、何もかもが苦悩だった。

「黙りなさい。ほら、弟はあんなに上手くやってるわ…あんたは、ただの弱虫うじ虫…」

そうさ、何時だっておれは、うじ虫のようだった。今でもそうだ。

「…でもね。」

其れはやっぱり、考え方に問題があると思うの。

あなたは、害虫よ。生きているだけで人に害を及ぼす。

…其れでいいじゃない。

其れそれだけで十分よ。

だからあなたは、他人にふれるのは止めて、ゲームをしなさい」

あの時の話の言動は、今のおれにも分らない。

けど、姉は何かを変えてくれたのが事実。

それがいい方向とか、悪い方向とかは、置いといて…

次回

起動する

ゲームを起動した上での注意事項。

体が浮遊感を覚え、さらには、乗り物酔いの様に体調不良を訴え始めるであろう。

電源入れたコトシラは、これで二度目のあの感覚に襲われる真っ最中だった。

「二度あることは三度あるってか…？、この世界のシステム、どうにかして欲しい…よ」

情けない声と共に、コトシラの姿が泥塗れテントから消えた…精確には、二進数の世界に取り込まれた…が、正しき回答。

液晶画面をまたいで、別次元に行った。と、堂々と口外出来るのはコトシラくらいの異人であろう。

「早めの内に帰らないとな。古見子さんが結界の外で立ち往生するハメになって、」

モンスターに喰われて、はい、お終い。は避けたいからな。

異次元空間を移動中。それで居て、疑問に浮かべるコトシラは、現実と異世界の時間の比率を考え始めるのであった。

視界に広がるのは、無数の電子回路。

触れるだけで火傷しそうな、電熱線。

あれは場違いな造形をしている。  
形が斜めドラム式だ。

おびただしい数の電気エネルギー素通り、着地したのは、何ら違和感のあるテントの中。

「此処は…テント？」

シノビの様な着地を決めたコトシラは第一声に疑問系をテントの表面に投げ交わす。

「元居た世界を忠実に再現した…話じゃ説明できないぞこれ？」

明らかにどう観てもテントだった…。

不本意に触れてみるが、質感同様泥の付着具合も全く持て同合している。

これが初めての他次元移動をだったのなら、おれは迷わず、「さっきの乗り物酔いは気のせいだった」と勝手に解釈してしまうくらいに、完成度が高い。

「瓜二つの別物を用意してまで俺に何を伝えたい？」

取り敢えず、外に出て観ないことには、なにも解決しない。なので、外に出てみる。コトシラ。

引きこもってばかりのコトシラは慎重に、テントの布の壁に縫いつけられたジッパーを下げる。

ジ

ジジジィー

内面、何が飛び出して来ても可笑しくないこの世界、先に恐怖心がこみ上げてくるのも笑える話じゃないだろ？。

恐る恐ると言った挙動で、テントで言うドアを全開して、外を観る。

「…」

予測と反比例し、今までと全く変わらない濁流音を奏でる河川敷？がそこには平然と君臨していた。

「あれ？…本当に夢でも見ていたのかな？」

一瞬戸惑う。森に囲まれた河川もさつき、泳いだソレと変わらない。

「誰かの悪戯にしては、たちが悪い。恐らくこれは、人為的な何かだ」

分かり切ったことをまず、述べる。

このような事を出来るのは、古見子さんくらい。犯人ならとくにあばいているが、別次元に居るって、言ってしまうば、元も子もない。

それを口にする人もなかなかのレベルで危うい。

「今日の事柄で古見子に変な処は無かったがな…多分、何かの手違い？」

そう信じたいのは、おれの古見子さんに対する甘え？だったり、じやなかったり。

九割方実行犯は、確定しているが動機が皆無等しい。情報量も乏しい。

めぼしがない有り様。

「お手上げて処か…何か、アクションでも起きれば、話は変わるが…」

上手く行ったり、行かなかったりするのがこのご時世…期待は出来ない。

「…！」

どうやら期待できたようです。

濁流の上を歩く人が現れました。

急展開です。少しは、こっちのモチベーションを考えて、何もかもが動いて欲しいですよ。

コトシラは、大人びた正論地味だ。考え、思想をつい及ぼして、ため息で返答した。

「明日は水曜日で、また何でもない日々が訪れるんだよ。今ある時間を有意義に過ごせたら、どんなに幸せか…」



基本、どうでもいい事を遠慮がちな声の音量で呟いた。殆ど、声にも成っていないけど…。

眼前の濁流を歩く人を、眺めていると、何だか眠くなってくる。生理的にポロツとあくびが出そうなのを堪えながら…

「だれだ!!!」

こだわりのエクスクラメーションマーク、二つ添え。

それに返答するように、うごめく歩く人は…。

「お前が、倒される人ですね。」

おいおい、倒される人とは、何の意味が隠れているんだ？もっと、初対面らし…

「シイクじゃなか!」

ハッキリしないトーンで放った所為か…声が届いていない。ご様子のシイク。

「?どうしました、」

「反抗期は無事に終えたか？」

何か、様子が違うも、シイクに話しかけるコトシラ。

「お、やおや、この僕を知っているようですね？何処で知りましたか？

そ、そんな事は置いとき来ましょう。  
本題に入りたいので…」

そのキャラ、破綻してないか？  
明らかに、無理をしていると感知。

「本題？」

この世界にも、丁寧にルール等を説明してくれるご用人が居て助かる。

つまり、自動翻訳機みたいなもの。

「このゲームの…ありが、た？について、」

助けてやってくれよ。彼の言動。シイクさん？こんなのシイクさんじゃない。おれの知っているシイクさんは何処にやった。

「偶にあるんだよね？くぐもった感じが帯帯しているの…大丈夫だからさ。ゆっくり話してよ」

気長に待つてあげよう。

少し若干、優しい気持ちになりながらも、持つてあげる事にしたコトシラ。

「つまり、ですね。僕がお前を倒すか…僕がお前に倒されるかで、お互いの人生が大きく変わるって、事ですよ」

格ゲー感覚って事か…しかも、凄い駆け引き。

「それは、どんなルール？武器とか、使用していいの？」

武器なら、おれの背中にも有るぜ。黒光りするそれがな。

「う。うん、大丈夫みたいだ」

瞬殺するのは、可哀想だ。同情気味に、話と戦うわけを訊いてから潔くやる。

コトシラは、ぐいっと、重みのある剣を握る。

「あ、ちなみに、どういった武器を扱うのかな？シイクさん？」

拳動不審が悪化したシイクさんに何があったのかは知らないが、そんな事よりも、どのような先方や武撃や武器を用いるのかが一番気になる処だ。

自分で言ってしまったたら終わりだけど、おれって結構、嫌やな奴だな。

「武器…武器ですか…武器ならありますよ。」

と取り出すのは、赤い柄のノコギリ。

いやな感じがしますが立派な日本刀のような鋸ですよ。

刃渡り一メートル二十センチは在りそうです。

伊達に、メガネを掛けてないだけはある。いいセンスした武撃機器だ。

取り出したのがスボンのポケからって処がたまらない。

「少しは自重しろよ。おれの黒剣がダサく映るだろう?」

何時もより、態度のデカいおれは、形態的にコンパクトなその剣を片手で素ふる。

ブン

ブン

「ま。いいでしょう」

シイクの刀に鞘などなく、本当に所持するのも大変そうだなとしか思えなかった。

「駆け出しは、このコインが地面に落ちたらと、するよ」

と言って、胸ポケットからコインを取り出すシイク。

「嗚呼、良いぜ」

濁流流れる水面で…

次回

戦いは、命懸けですよ。

決着というのは、数秒でけりが付くもの。  
惑いけり。

「躊躇なく、トドメを刺して良いのか？ シイクさん？」

儚く散った、までは行かないが今のこの現状は、明らかにおれが有利。

シイクはおれの攻撃、第一打で武器を濁流の彼方に飲まれる結果に陥り、仰向けに成って倒れる始末。

猛烈な重量感のある攻撃には片手だけの握力では耐えきれない処がある。

それが現実。

人の言動や挙動に辻褄が合わない処が有っても、物理的な出来事だけは嘘は吐かずに、真実を映してくれる。

これが結果。

「負けが目に見えていたら、もう足掻く必要性もない、だろ…？ 心を擬なくやってくれ」

潔が良いのは、彼の特権。殺す？と訊かれて、有無を言えるのも彼の権利。

「もしも、此処であなたをやらないと帰れないというのなら…同情なんて必要ありませんが最後に一つだけ訊いていいかな？」

つまり、どんな時だって、自分生存意志には勝てない事態もあるって事。

「切り返しにでも成るわけではないし、時間稼ぎをしたいわけではない。それを踏まえて、何でも訊いてくれ。…僕は、人を殺したいくらいに僕自身も死にたい。」

殆どすべてが決着が付いている中、おれは一言彼に訊きたいことがある。

「シイクさん、シイクさんは、何故こんな所に居るのですか？理由を訊かせてください…」

何故。とは、シイクさんは前におれの前から忽然と姿を消し、今この場に忽然と現れたその理由の詮索欲を意味する。

「おま、お前も、真面目すぎるほど、真面目な質問を受けさせるのな…」

口を開いたのは、シイク。

この際、真面目とか、真面目じゃないとかは置いて、真実を知りたいだけだ。

文句があるのなら、おれにもっと英知をくださらなかった神にでも恨め。

「そう、だな。簡単な話、連れてこられただけ、だな」

意味深なことを言っているように、本当は全然当たり前のことだ。

「もっと、詳しく話せますか？」

急かすように、促す。

「まあ、焦るなよ。どうせ、元に戻れば時間は進んでないし…」

元とは、現実と認知されている世界のこと。此処は、幻界。

「強ち、僕もよくは知らないが、気付いたら此処にいて、彷徨っていた。」

シイクは凄く遠くの景色を眺めているように空を観ていた、のちに言葉繋ぐ。

「長かったんだよ。本当に長かった。疲れたと言ってもいい」

辺りの風景には、何の支障もないただの木々の間隔が広い林だ。

他も、元のそれと同じでならかわりないトレースされた世界…

けど、明らかな何かが抜けている…。

「知っていましたか？此処人が居ない、のですよ。何十年何兆年、時間を費やして、世界中を旅しましたが誰もいませんでした、誰も…」

この世界時間を費やすと言う言葉は不適格だと思われるのだが…

その通りも何も、証拠がなく、彼の話を一方的信じての結論だけだね。

「人が居ないか…きっとそれは、寂しかっただろうに…」

心の混じっていない無機質な同情。

現実味が無いとかの前に、体験したこともないおれが言えるのは、原価の安い言葉だけ。

「いいさ…この体験は、僕だけの物、そして、墓まで持って行くさ。さ、未練何て無いかの様に、これしてくれ…」

この世界で起きたことや彼に関する記憶は、帰ってみれば全部忘れていた。

一人だと寂しく、複数居ても気分が悪い。

だったら、人はどうやって、人生やっていけばいいんだ。意味が分からない。

コトシラは、ゲーム世界であろうその空間と現実世界であろうその空間のちょうど、半分の位置を一人歩きしていた。

未練がましく、恨ましく、世界の狭間で独り孤独感を味わっていた。



いつもの世界には、何時だって帰れる…しかし、この狭間と言つべき境界を次に足を踏みいえることは出来ないのではないかと、元に戻ると言う判断をオコタっている有り様だ。

明日があると解っていないが、『今日でおしまい、次は無い』とかの心理状況に匹敵する…。

絶える事もなく、永遠を願う者は。永遠に成ったとき真つ先に、精神が崩壊するだろうとか、無駄な知識が役にたった時とか。

様々な思想を繰り返して、その先何が在るのだろうか？

知っていない事は、妄想で補える…だが、この妄想も何かの模作。止まることがなく、変化し続ける物達。

地球が回るように、廻る人間関係。  
産まれながらにして、十本の指を持って、十年間キーボードを叩く人。

おれは、磁気がない世界では迷ってしまう。

ここは、思想を曲げる…よく解らない空間。

地は在り、足の平で感じる自分の重み。

感覚神経だけでは、麻痺してしまいそうだ。

本当の孤独を知りたいのなら、無限に彷徨える空間とどんなに費やしても止まることのない時間があれば、簡単に感じ取れる。

目に映る物は、二色のみ。

聞こえるのは、単調な足音。

触れていると感じるのは、自分の重みのみ。

味わうのは、唾液。

匂いは、空気の香り。

何時だって戻れる世界。

何時だって、戻れるから、気楽にしておくか…。

最初で最後なら、思う存分堪能しよう。

齟齬で出鱈目な空想論理を並べてしまえ。此処だと、本心に来る無情がこみ上げてくる…。

明日も明後日も明後日も昨日一昨日も、すべて今日で納めることが出来る此処で。

…

「この人、もう助けようがないんじゃないの?」

「え、古見子さん。結界をどうやって、開潜ってきたの?」

ゲームを弄りながら、言語だけ駄弁る。

「あら?知らないの、コトシラ君。私の力。忘れたの?」

彼女は、別世界人を送ることが出来る。

でも、此処は、別世界じゃないと思うんだけど…気の違いかな？

「気の違いじゃないわよ。…ほら、こんな情報訊いたこと無いかしら？」

結界は、隔離するが物理的な意味ではないと…言う話を…」

あ、在ったな。親父が偶に結界を張る訓練をしたり、しなかったりしていた頃、何の辞書を読みあさったから知らないがよく訊かせてくれていたな…。

「あ、思い出した気がする…」

つまり結界は、世界を切り取り新たな世界として機能してるって事だったよな…多分」

近所の子供が結界結界言っていたけど、思っていたのより随分、高度な奇術だったんだな…関心関心。

「普通、空間を切り取るとかしたら、即、パワーバランスぐちゃぐちゃになったやうものね…恐るべき人間の技術力ってやつよ」

さっきまで、夢を見ていたような気がするのは、気の違いって奴なのかな？…

川の流れは、穏やかで。

おれの体調もよくなっていた。

次回  
不思議がって

31・5(前書き)

とりあえず、気休めに

お？足の指、足してなかったぞ？

実質上この人、意外と鈍いところあるから何ともいえないのだが…  
出来れば、何事もなかったかのように。  
覚えて居なかったことにして頂きたい。  
これは私の考え。

全ての凄いと思われる現象は、大方失敗作駄作試作品の物物が多い。

凄いとは、人が人以上の何かに対する…敬意を含む単語ととして、  
誰もが口にする何ら聞き慣れるばかりな言葉。

だが他人は、正確な凄いの価値観何て知らない。全て憶測の範疇。

これが私の無様理論。

世界を渡り歩ける私の思想。

とんでもない。脳味噌しているし、とんでもなく低脳な私は賢く魅  
せるのがやつとで本当に臆病な娘立ったりする。

コトシラ氏には、平行世界の所かでお世話になった、と言えば。

恩返しに成ると思えないが、私自身の人生を彼に託すことだって  
出来る。

その状況下にて、設定を…初期設定を変更し、従姉という立ち位置を所持した。

彼は私を知っている…ずっと前からあなたを観てきた。知らない事の方が知っていることよりも多いし、ずっと監視してきたとなると、変人や変質癖のそれと変わらない意味合いになる。人によっては、

「なに、俺の顔見てんの？古見子さん？そこまで凝視するまでに歪な物が着いているのか？顔に」

と、コトシラは、相変わらずゲームをポチって居た。

そして、コトシラ自身も何かの違和感に気づかされる。

作者は無事、事なきを得た。

お？足の指、足してなかったぞ？

実質上この人、意外と鈍いところあるから何ともいえないのだが…  
出来れば、何事もなかったかのように。  
覚えて居なかったことにして頂きたい。  
これは私の考え。

全ての凄いと思われる現象は、大方失敗作駄作試作品の物物が多い。

凄いとは、人が人以上の何かに対する…敬意を含む単語ととして、  
誰もが口にする何ら聞き慣れるばかりな言葉。

だが他人は、正確な凄いの価値観何て知らない。全て憶測の範疇。

これが私の無様理論。

世界を渡り歩ける私の思想。

とんでもない。脳味噌しているし、とんでもなく低脳な私は賢く魅  
せるのがやつとで本当に臆病な娘立ったりする。

コトシラ氏には、平行世界の所かでお世話になった、と言えば。

恩返しに成ると思えないが、私自身の人生を彼に託すことだって  
出来る。



その状況下にて、設定を…初期設定を変更し、従姉という立ち位置を所持した。

彼は私を知っている…ずっと前からあなたを観てきた。知らない事の方が知っていることよりも多いし、ずっと監視してきたとなると、変人や変質癖のそれと変わらない意味合いになる。人によっては、

「なに、俺の顔見てんの？古見子さん？そこまで凝視するまでに歪な物が着いているのか？顔に」

と、コトシラは、相変わらずゲームをポチって居た。

そして、コトシラ自身も何かの違和感に気づかされる。

コトシラと古見子さんは、無事結ばれ森の中で一生を過ごしましためでたしめでたし。

アクセス。全知全能が前置きにおいては、成すべ無し、（前書き）

おまけですので

アクスベリ。全知全能が前置きにては、成すべ無し、

事実婚で居て、正式な婚姻を定めたわけではない。

あれから、九年が経つ。

熱い愛なども語りもせず、時と時間だけに流され、体つきだけは  
だいぶ大人だ。

冷めたおれと枯れる彼女。

そう言い切れるのは、訳があるからだ。

観て解る…簡単に言えば、おれはもう人間ではない。  
心は有っても、身体はない。

どうしてか？…の前に、どう言った理由を述べているのか？を解説  
してみよう。

一口に、おれは人形。

原理は、魂の器と人の模型。素材とその用途と言ってもいい。  
今は魔力のような物で動いている。

格好いいとかアンティークだとか、一般的感想は求めては良ない。  
事実を告白しているだけだ。

人で無くなった以上、おれはもう死んでいるのと同じなような錯覚

に襲われたりする。

しかし、彼女の方も、おれより悲惨な人生を歩んで行かなくては成らない始末だ（おれ場合は人生剥奪）

観るも無惨に、生身の古見子の体は、この三次元空間を認識する際、八十パーセント重要視され伴う大事な器官を失い。

利き手はない状態。

俺達は、どうもパツピーエンドとは言え無い物語終盤の延長を迎えているのかもしれない。

屋敷は齟齬家。俺達二人の家だ。  
おれの家は、火事でなくなった。  
もつと言え、タンサイは亡くなった。

そうだな、きつとそうだった。

物語に結末があっても、それは、人生の結末とは言えない。人生の結末は、死しかないからなあ…。

此処からは、過去を語るかのようにシナリオを進めたい。

アクセストロベリー…

「なに、俺の顔見てんの？古見子さん？そこまで凝視するまでに歪

な物が着いているのか？顔に」

と、コトシラは、相変わらずゲームをポチって居た。

そして、コトシラ自身も何かの違和感に気づかされる。

怪しげと訝しげをグチャグチャにして、一刀両断したような眼力を彼女に放つ。

「明日は、何曜日だ？」

その前の言葉の回答を訊かずに、わがままに訪ねるのは俺だ。

「何を言っているのかさっぱりよ？ちゃんと、日本語をしゃべりなさい。」

聞き取れなかったのか？或いは、無意識に呂律が廻らなく発音しきれていなかったのか？。再度、尋ねよ。

「明日は、風邪をひかないで済みそうだ。…今何時くらいかな？腹が減って、指先のキレが悪い。」

「あ、そっち…なら、パンがあるわよ？食べる？」

どこでパンを入手したのかは、知らないが元々彼女の周りでは不思議なことしか起きないから、違和感はなかった。

「お、良い気廻しだ。食べるよ。無論勿論食べるさ。」

読めてきたぞ。この小娘の考えが…

どうせ、こんな小説を読んで居る奴なんて、携帯の待ち受け画面が可愛い女の子が映ってんだろ？この作者も同類だから安心しろ。

みたいな奴らを、陥れているのであろう。

今の今までは、その場の空気のノリでなんだかんだ遣つて来たがここは、そんなに甘くはない無法地帯樹海『くるトナの深林』だからな、血縁が在ろうとも、油断は禁物。

「わかったは…取り替えず、ゲームを終了するか、ゲームを遣つたまま食事を行うか？選考しなさい」

この選択肢に意味は在るのだろうか？

結局選ばして置いて、無慈悲に強制選択送還されるのではないか？解っている…解つて居るさ。

答えは初めから一つだ。

「お言葉に甘えて、ゲーム道程切り開いて進行しているから、おれのお口に放り込んでくれ…」

一種の恒例行事な物。おれ自身が望んだ選択肢だ。本性と言っても過言言語ではない。

「解りましたわ。そのお口に、正体不明未確認パンを口にねじ込みますわね」

承諾を受け入れた古見子さんは、器用な手つきで…ゲーム画面ディスプレイを眺めているおれの口に言動同様ねじ込み突っ込んだ。

優しくお口放り込まれた食べ物、イースト菌の死骸と小麦粉の焼

けたあじと…それとあんこの感触で味覚は埋め尽くされた。

「う、美味しい。この食パン風味のアンパンマン何処から拾ったのか、聞いてみたい」

彼女は魔法でも試用したかのようにパンを取り出し、化学式の微調整を経て完成に完成度を高め、熟成した味覚の感覚神経を擽る一品を上と言葉で示す。

「あら、そう…美味しかったの…不味かったら、まずいと言っても良いのに…」

逆に、無理して不味いフリでもすれば良いのに…  
それ、試作品なのよ」

試作品でこの出来とは、にわかに信じがたい。信じないことにしようか…違いな。信じなかったことにしよう。彼女の心境を考えて。

「試作品でこの出来とは…まだまだだな、正直言つて、おれが造った方がこのアンパンの256倍は美味しく仕上げることが出来る…出直してこい」

その前の甘口な感想は何処にやったと言わんばかりに、辛辛な語語。二度、言葉を並べれば、それしく聞こえる日本語はこれだから使える。

気配りの利いた掌握言語と言える。

「そのくらい威勢が良いと、作り概があるわね…明日はピザパンで決まり…」

所で、そのパンを作るに至っての、材料、機器、技術は何処から用いられた？此処は森だぞ？

じつと、今度はおれの番だと言わんとせんたとばかりに、羨望によく似た視線を向けてみる。

視覚が無くともゲームが出来てしまう体になったのも喜ばしいことなのか…それとも、疎く咎めればいいのか…

其れはサテオキ。

「何を目を水車のように丸くして、観ていらっしゃるの？…ちよつと、怖くては笑えませんわよ、あはは」

ごまかしの利いたアクセントで笑う。

その水車は、カーボン製が主流だろうな。

ま、おれは、私の事は知らないし、世界でもって渡って、パンの修行でも受けに行っていたのであろうよ。

顔中ススだらけだ。

「黒滅劉派『ドン猊下ゲイツ』とでも戦ってきたかのような。顔してるぞ。顔洗ってこいよ」

ドン猊下ゲイツとは、しがらみ、トバリ、くさび、が大っ嫌いなわがまな黒竜だったはずだ。いにしえ文書だったのでよく読みないし、覚えて居ない。

「…あら、そうなの…顔に非道い物でも付着していたから、優しくごまかしの利いた戯言をくださるのね。」



いやいや、真っ黒クロスクローングロテスクに、成っているわけではないので安心してくださいよって言う意味もハビコらせたつもりだったんだけど…

ドン狛下ゲイツは黒竜と言いながらも、美を代表する白き龍である…

新世界創造後。それは伝説と化した。

「なら素直に、顔を洗ってくるわ」

泥まみれのテントをでて、河川へ踏み出す古見子。

「嗚呼」

驚愕するほど、プレイ時間の短い表示にしたがつつむ。

プレイ時間 00:00:01:33:46

次回

新たな道

本音の所。視線恐怖症のおれは、何か作業をしながらじゃないと、人とともに話すことが出来ない。

顔を洗っている古見子さんを水中に落としに行こう。

コトシラは、テントから外の世界へ飛び出した。

コトシラは、外の世界の壮大さに圧倒された。

「此処がその…空蟬残して飛び出した新空間か…」

つまり、自分自身の息で湿きっていたテントとは違い。新鮮な森林の空気って事が言いたかった。

ロマンチックな自殺のし方は、色々ある事に思い出される。

好きな女の子を目の前にして、口が塞がり何も言い出す事が出来ないときの自殺方がある…。

例えば、即死とは言え無いが飲み込んでしまうと必ず死ぬ丸薬を飲み込み。

その後、粉末状の毒薬を口の中で貯えそのままキスをしてしまえばいいのだ。

その際、成功して相手の胃の中まで到達すれば、死後の世界で永遠の愛に浸ることが出来る。

成功しなくとも、自分自身、既に死に逝き絶え、自身に恥を知らずにして無の境地へ誘われる。

現実世界では、哀れな死として崇められる。

どっちにしる幸せな、自殺方。

自殺と言うより、相対自殺。と象った方が良いな。

想いに思い出した。コトシラ。

「何かの本に書かれてあつたけっか？」

根元が思いに思い出せない模様。

それは、コトシラ本人。

在る在るよくある…全く、思いつく物ばかりは全てが何かの模作か…  
…そっちのけの何か。

困り果てるのは、おれではない。どこかで俺らを観ている高次元の誰かだ。

爪楊枝を相似したかの様な高々な木々辺り一帯を囲む中、断片的に両断する川は、冷たい音を奏でる。

今。おれの冷静な頭で考えて、考え直した結果。あの冷めた流れる液体に浸かった俺たち本気のバカではないのか？と思う。

無事で何よりだが大事件勃発でもしていたら、過去としての笑い事は、まさに笑えない。

体中凍傷で低体温症の災禍の果てに、骸となって、地球と一体になるのは明白。

ただ唯一、時期を誤っただけで命さえも塵になるから自然の摂理にはかなわない。

と。またしても述べてしまった。

今すべき事、趣旨がズレているというのはこの事を…この時点を言うのだろうか？

ま、良いか、今は古見子さんを川に落とし、体中凍傷で低体温症な骸に仕上げることが最優先。

脳内何とかは、ここでいったん、機能停止。

コトシラは、古見子さんと思われる人影に恐る恐ると忍び足を繰り返す。

「しめしめ、どうやら気付いてない様子だの、突き落とすだの」

小声でくぐもり口調でばやく。

様子を拝見して観ると、丸くなって顔洗っているような描写が見て取れる…貧弱で幼稚な語彙しか兼ね備えていないコトシラの最大限の表現だ。

不確定要素に繋がる大陰は、養分たっぷりの土まみれなテントに預けて置いた。たぶん問題ない。

不審に撮られがちの携帯ゲーム機も電源を切って、在る程度綺麗なテント床に置いてきた。ブルーシート生地の下が直で接しているそれを床と言えるかどうかは定かではないが、そう言わないと説明できない。

あえて言おう。お化けのような構えで、地に接するのは、つま先からだ…

のこのことコトシラは、一步一步通行する。古見子さんまでの距離にして、三メートル…相変わらず、古見子さんは丸い。

…何をしているのだろうか？…

疑問符を絶やさないのは、恐怖心を取っ払い為の作為。さっき、脳内何とかは捨てると言った矢先でこれだから、多分…中毒しているのだろうか。

自覚はないが仮説は立てる。

もし、そうだったとして何が俺をそうさせるのだろうか？

其れの正体は簡単、不安と定着心の無さ、。

執念深く、かみ砕けばいい物をあえて、宛もなく飲み込もうとする様なもの…

つまり、どうでも好い話し。

三度目の正直とばかり、今回は逃げない。

コトシラ。助走を付け助速を得て、古見子さんの背中に流用する右

腕を差し出し、突き飛ばす構えで、駆け出す。

「コミコミバーナ、一因観光昨概破裂の貶めし！」

思い当たる語呂語呂を連ねて吐き出す。

拙劣に幼稚な駆け足と、幼稚で拙劣な掛け声に合わせて、突出。

よけて観ろ。古見子よ、避ければおれは水切りをしながら水辺に追撃する予定になるだろう。

諦め物腰な零下思考は、こんな時まで憚る。

雑念め消えろ。

「氣勢を上げたら、折角の奇襲も台無しね…私を誰だと思っているの？」

読まれていた。

否、読まれていた。

違う。読んでいた。

足取りは、止まることはない。距離感にしても目と鼻の先くらいまで狭まっている、逃げる場所はない。ヒステリックな喘ぎ声でも上げて、仰け反り水面に超絶突破するが良い。

揺られと立ち上がる古見子さん、果たして立ち上がる時間なんて在るのかな？と思うほどゆっくりと立ち上がる。

「見え透いた手ね…」

片手を前に出す。左手だ。

右手を差しだし。駆け出しているおれとは、引力に違いが在りすぎる。

正面突破は手段だ。他の手段は好め無いが、その手段を扱わせてもらう。

ガシッ

古見子さんの左手に、おれの右手が絡む。

餓死って聞こえたのは、おれだけのはずだ。

力勝負なら、おれの勝ち。技術面なら古見子の勝ち。

「これを勝負と言うのなら、私は、敗北を選ぶわ。だけどね、これは飽くまでも私的な面が多いから貴方にとっては、逃げにしか聞こえない…わ」

凄くガラスを割った小学生の言い訳にしか聞こえないのは、本人の眼前にいる俺だけにしか伝わらない慣わしなのか？

と、古見子さんは宙を舞う。

個人的には、背中を押して突き飛ばしたかった…そこに憧れを感じたから、…

「おい、ちょっと待てよ、俺はこんな落とし方、望んじやいないぞ！」

突き落とした右手を差し置いて、暇を余した左手を伸ばす。

『掴め』の意だ。

明らかに明らかすぎる、言い草に古見子さんは…

「やっぱり、貴方は企画者ね…」

と、無意味ありげな言葉を返す。

そして、右手を出す古見子。

『握って観る』の志。

ヒュッ

宙を舞う。従姉は、それだけで何処か狙った感のある構図で右手。

差し出す。長ズボンを履くおれは、河川敷ぎりぎりから左手。

手が届くか届かないかは、解らないし知らない。けれど其れは、今のこの段階や局面や場面や状況を著しく把握して、理解していれば。結果なんて、どうでも良かった…

手が繋がるその瞬間。

二人は、肌寒さ残る河川に再度墜ちた。



次回  
浅はかな  
川は寒く  
息を吐く。

シクラベ・クオリティ

ヒント、『あ』に近い買い言葉を冒頭に持つてくる。

誰だって、先頭を観るからね。最先端とかの言葉に集まるのも解るから、

ヒント、友達に伝える。もしくは進める。  
すると、すごい連鎖で広がる。

まるで、全世界がその人立てで動いてるように見える。

これは、文中に仕組みを作ればお手の物。共感できる物に、人は評価するし、誰に伝えたくなるから、

とりあえず、造語は必須。

何か。抜け目や穴場や不覚を衝く。

誰って遣っているように、新しい物は新鮮感のある造語を生み出せばいいのさ。

しかし、小説と言った物には、作者のセンスが試される。

むやみに、造語を連発してしまうと、あとは逆地着陸してしまい、日を観るよりも哀れな感じに成っちゃいますよ。

狂附けてください。

ただ今の物語の進行上。ローペースにも程があると作者は悩んでいます。

結局完結という形に仕上がっていますが、これは作者の未練の固まりと言っべきでしょうね。

初めに、コトシラとか。古見子とか。

本当は文中の人物ですし。

作者が好き勝手言ってるものであって、中身がないもですし。

読んでくれた人は、スゴいですよ。本当に、

では、ばいばい。

シクラベクオリティ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5555x/>

---

アクセス。

2011年11月27日16時06分発行